令和5年度

小·中学校 実 践 研 究 集 録



八戸市教育委員会

月 次

◇各小·中学校 実践研究報告

〇小学校

1	八戸	1 3	白鷗	2 5	下 長	3 7	豊崎
2	城下	1 4	白銀南	2 6	城北	3 8	新井田
3	吹上	1 5	町畑	2 7	高館	3 9	旭ヶ丘
4	長者	1 6	鮫	2 8	根岸	4 0	南郷
5	図南	1 7	種差	2 9	是 川	4 1	島守
6	中居林	1 8	大久喜	3 0	三条		
7	柏崎	1 9	金浜	3 1	西園		
8	小中野	2 0	根城	3 2	明治		
9	江陽	2 1	白山台	3 3	桔梗野		
1 0	湊	2 2	西白山台	3 4	轟木		
1 1	青潮	2 3	江 南	3 5	多賀		
1 2	白銀	2 4	田面木	3 6	多賀台		

〇中学校

1	第一	8	白 銀	1 5	北稜	2 2	東
2	第二	9	白銀南	1 6	是 川	2 3	中 沢
3	第三	1 0	鮫	1 7	三条	2 4	島守
4	長者	1 1	南浜	1 8	明治		
5	小中野	1 2	根城	1 9	市川		
6	江陽	1 3	白山台	2 0	豊崎		
7	湊	1 4	下 長	2 1	大 館		

No.	学校名	令和5年度 小学校 研究主題及び副題	年次
1	八戸	考えを深める子の育成	2年計画の
		~対話を通して主体的に学ぶ児童を育てる授業づくり~	1年次
2	城下	主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成	3年計画の
		~児童の課題解決力を高める指導法の工夫を通して~	3年次
3	吹上	主体的に課題に向かい、共に学び合う子どもの育成	3年計画の
		~児童の考えを広げ深めるための集団解決の場の工夫を通して~	2年次
4	長者	確かな「見方・考え方」を育てる授業づくり	3年計画の
		~全員参加を目指した「聞く」ことへの指導の工夫~	4年次
5	図南	主体的に学び合う子の育成	3年計画の
		~対話的な授業づくりを通して~	2年次
6	中居林	表現し合い学びを深める子どもの育成	3年計画の
		~個の考えを全体へ広げる対話の工夫~	2年次
7	柏崎	主体的に学び合う子の育成	2年計画の
		~問いの意識と変容を促す授業づくりの工夫~	2年次
8	小中野	自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成	3年計画の
			3年次
9	江陽	主体的に学ぶ児童の育成	3年計画の
		~問題解決の意欲を持続させるための「はたらきかけの工夫」~	3年次
10	湊	主体的に学び合う子どもの育成	3年計画の
		~子どもの「見方・考え方」を働かせる授業づくりの工夫を通して~	1年次
11	青潮	主体的に学ぶ子どもの育成	3年計画の
		~教師の働きかけの工夫を通して~	1年次
12	白銀	主体的に学び、自分の考えを表現できる子の育成	3年計画の
		~導入から課題設定までのはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫~	2年次
13	白鷗	探究心をもって主体的に学ぶ子の育成	3年計画の
		~子どもが解決したくなる、聞きたくなる働きかけの工夫を通して~	1年次
14	白銀南	「わかった!できた!役立った!」が実感できる授業づくり	3年計画の
		~問題解決的な学習の授業実践を通して~	2年次
15	町畑	主体的に学び合う子どもの育成	3年計画の
		~「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を目指して~	2年次
16	鮫	関わり合いながら、ともに成長する子どもの育成	2年計画の
	44.14	~特別支援教育の充実と改善を通して~	2年次
17	種差	"全員参加"で学びを深める子供の育成	3年計画の
	1 1	~複式学習において問いを生む授業づくり(国語科)~	1年次
18	大久喜	主体的に問題解決に取り組み、伝え合う子どもの育成	3年計画の
	A >==	~子どもが本気で話したくなる算数科の授業づくりを通して~	2年次
19	金浜	かかわり合いながら、主体的に表現する子どもの育成	3年計画の
	In th	〜少人数・複式学級における授業実践を通して〜 ************************************	1年次
20	根城	主体的に学び合う子の育成	3年計画の
		~各教科における対話的学びの充実を目指して~	4年次
21	白山台	主体的に表現する児童の育成	3年計画の
		~子どもが生き生きと学ぶ問いと対話の工夫~	3年次
22	西白山台	多様な他者と協働し、課題解決に取り組む児童の育成	3年計画の
		~人間関係形成能力を高める学級活動の工夫を通して~	1年次

23	江南	主体的に課題に向かい、自分の考えを表現できる子の育成	1年計画の
		~思いや考えを伝え、学び合う学習活動を通して~	2年次
24	田面木	進んで伝え合い、主体的に学ぶ子の育成	3年計画の
			2年次
25	下長	ともに学び合い、考えを深める子どもの育成	3年計画の
		~つなぐ授業を通して~	4年次
26	城北	主体的に学び、考えを深める子の育成	3年計画の
		~対話的な授業づくりを通して~	1年次
27	高館	「自分の考えを豊かに表現し、共に学び合う子どもの育成」	3年計画の
		~ユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫を通して~	1年次
28	根岸	自分のこととして課題解決する子の育成	2年計画の
		~解決の見通しをもたせるしかけや振り返りをさせる場の工夫~	2年次
29	是川	主体的で対話的な授業づくり	3年計画の
		~多様な考えをつなげて話す楽しさ~	4年次
30	三条	自分の考えをもち、進んで表現する子供の育成	3年計画の
		~伝え合う場を大切にした授業づくりを通して~	1年次
31	西園	学びに向かう力の育成	3年計画の
		~課題を自分事にする授業づくりを通して~	1年次
32	明治	主体的に学び、考えを深め合う子の育成	3年計画の
		~学習方略(まなびかた)を活用した授業を通して~	2年次
33	桔梗野	関わり合い、考えを深め、解決する子の育成	3年計画の
		~主体的に学び合う活動の工夫を通して~	3年次
34	轟木	主体的に学び合う力の育成	3年計画の
		~複式・少人数における問題解決の力を育成する授業実践を通して~	3年次
35	多賀	進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成	2年計画の
		~一人一人が考えをもち、表現できる授業づくり~	2年次
36	多賀台	自分の考えをもち、進んで表現する子の育成	3年計画の
		~児童の思考に寄り添い、学び合う授業づくりを通して~	3年次
37	豊崎	主体的に学び合う子の育成	3年計画の
		~少人数・複式学級における主体的・協働的な学びを生み出す授業づくり~	1年次
38	新井田	自ら課題へ向かい 共に学び合う子の育成	3年計画の
		~問題解決的な授業展開を通して~	1年次
39	旭ヶ丘	共に考え、創る学びの実現	3年計画の
		〜学ぶ基盤づくりを通して〜	1年次
40	南郷	主体的に学び合う児童の育成	3年計画の
		〜話す意欲を高める対話活動を通して〜	2年次
41	島守	主体的に学び合う子どもの育成	3年計画の
		~聞く力の育成を目指した指導の工夫~	1年次

No.	学校名	令和5年度 中学校 研究主題及び副題	年次
1	第一	主体的・対話的で深い学びを実現する生徒の育成	3年計画の
		~対話的な学習場面の工夫を通して~	1年次
2	第二	思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫	3年計画の
		~特別支援教育の視点を生かして~	2年次
3	第三	自ら課題を見つけ、自ら学ぶ生徒の育成	3年計画の
		~「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業づくりを通して~	1年次
4	長者	進んで課題解決に向かう生徒の育成	3年計画の
		~「主体的・対話的な学び」の実現を図る授業づくり~	1年次
5	小中野	主体的に学ぶ生徒の育成	3年計画の
		~話合い活動や学んだことを表現する場の工夫を通して~	1年次
6	江陽	自分の考えをもち、共に学び、深め合う生徒の育成	3年計画の
		〜協働的に学ぶ場面の工夫〜	1年次
7	湊	問題解決的な学習を通しての主体的・対話的で深い学びの研究	3年計画の
		〜展開部分での学習活動の工夫〜	3年次
8	白銀	主体的に課題を解決する生徒の育成	3年計画の
		~基礎的・基本的内容の定着に向けて~	2年次
9	白銀南	生徒が主体的に学習に取り組む授業の工夫	3年計画の
		~生徒が自ら問いをもてる課題設定の工夫をとおして~	2年次
10	鮫	生徒の言語能力を高め、学びに向かう力を育成する指導の研究	3年計画の
		~互いの考えを深め合う活動を中心として~	3年次
11	南浜	志をもち、主体的に学ぶ生徒の育成	3年計画の
	1-15	~問題発見につながるための導入と学力を保証するためのまとめや振り返りの工夫~	2年次
12	根城	主体的に学ぶ生徒の育成	3年計画の
	.1. 1. 1.	~課題設定の工夫と振り返りを通して~	3年次
13	白山台	主体的に思考・判断・表現する生徒の育成	2年計画の
1.4	マド	~ 「問い」をもち、主体的・対話的に探究する学習活動の研究を通して~	1年次
14	下長	主体的・対話的に活動する生徒の育成	3年計画の
1.5	上に仕	~ I C T を活用し、合理的配慮に基づく指導の工夫を通して~	1年次
15	北稜	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方	1年計画の
1.6	8 111	〜生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面の工夫〜 ************************************	1年次
16	是川	基礎・基本を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成	3年計画の
1.7	一友	〜生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定の工夫〜 ウムな独し、課題に向えるを生徒の方式	1年次
17	三条	自分を律し、課題に向き合う生徒の育成	2年計画の
1.0	마다 사스	〜探究的な(課題解決)学習活動を通して〜 問題解決的な学習を取り入れた授業の研究	2年次 3年計画の
18	明治		
19	市川	〜課題設定と協働的な学習の工夫を通して〜 見方・考え方を働かせながら、自分の考えを広げ深める学習指導の在り方	1年次 4年計画の
19	111)11	兄方・考え方を働かせなから、日方の考えを広り保める子首相等の任り方 ~言語活動と振り返りの場の設定の工夫を通して~	4年計画の
20	豊崎	確かな学力の向上を目指し、見通しをもって学習に取り組む生徒の育成はどうあればよいか	3年計画の
20	豆峒	推がよ十月の同工を自由し、元通しをもうく于自に取り私む工作の自成はと J の4 いはよい '''	2年次
21	大館	主体的に学習に取り組む生徒の育成	3年計画の
		~必要感・切実感のある協働的な学びの工夫を通して~	3年次
22	東	学力の向上を目指して自ら学ぶ生徒の育成	3年計画の
		~主体的な学びを支える学習指導法の研究を通して~	1年次
23	中沢	自ら学ぶ力の育成	3年計画の
		~自己調整学習を通して~	3年次
24	島守	思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫	2年計画の
		~課題設定の工夫と振り返りを通して~	1年次

小学校

1	八戸	1 3	白鷗	2 5	下 長	3 7	豊崎
2	城下	1 4	白銀南	2 6	城北	3 8	新井田
3	吹上	1 5	町 畑	2 7	高館	3 9	旭ヶ丘
4	長者	1 6	鮫	2 8	根岸	4 0	南郷
5	図南	1 7	種差	2 9	是 川	4 1	島守
6	中居林	1 8	大久喜	3 0	三条		
7	柏崎	1 9	金浜	3 1	西園		
8	小中野	2 0	根城	3 2	明治		
9	江陽	2 1	白山台	3 3	桔梗野		
1 0	湊	2 2	西白山台	3 4	轟木		
1 1	青 潮	2 3	江南	3 5	多賀		
1 2	白 銀	2 4	田面木	3 6	多賀台		

考えを深める子の育成

〜対話を通して主体的に学ぶ児童を育てる授業づくり〜 (2年計画の1年次)

校長 小林淳

1 研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校の教育目標である「誇りをもち、主体的に生きる子」の育成に迫るために、努力目標の一つとして、「進んで学ぶ子」を掲げている。さらに、学校課題をふまえ、今年度の学校目標を「思いやりの心をもち たがいに認め合い 学び合う子」と設定し、「思いやり、コミュニケーション力、対話力」を育成すべき資質能力とした。これを踏まえ、学習問題の設定の仕方を工夫し、話合いの場を効果的に設定することによって、学ぶ意欲や思考力の向上を目指したい。

(2) これまでの実践から

児童の主体的に学ぼうとする意欲の向上や話合いを通して思考力を高めるという課題を踏まえ、令和2年度から「考えを深める子の育成」という主題で研究に取り組んできた。学習問題を設定する際に、子どもたちのつぶやきやつまずき、疑問などを取り上げたり、児童の思考の「ズレ」を意識させたりしたことで、解決する必要感をもたせ、問題解決への意欲が高まった。また、「話す聞くスキル」を掲示し、対話の仕方の指導に取り組んだことで、進んで対話活動に取り組む児童が増えてきた。しかし、話合い活動の中で、相手と自分の意見をつなぐ言葉をうまく使えていない児童や、活用していても十分に考えを深めているとはいえない児童も多くいた。

そこで今年度は、学習問題の設定の工夫や相手の話を受けて話す指導の工夫を取り入れた授業展開を行っていく。 学習問題の設定では、児童の思考の「ズレ」を意識させて、解決しようとする意欲を高める工夫に引き続き取り組ん でいく。また、話合い活動では、対話名人表を活用して話し方や聞き方の指導を行い、児童同士が考えを積極的に交 流し考えを深めていき、「考えを深める子の育成」を目指したいと考えた。

2 研究のねらい

考えを深める子を育成するために、解決する必要感のある学習問題を設定し、児童が考えを交流し深めていくことが 効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

- (1) 思考の「ズレ」を生かし、解決する必要感のある学習問題を設定することで、主体的に学び考えを深めようとする 児童の意欲が高まるのではないか。
- (2) 対話の仕方を具体的に示し経験させることで、児童は考えを交流し深めていくことができるようになるのではないか。

- (1) 学習問題の設定の工夫
 - ア 思考の「ズレ」を生かし、解決する必要感のある学習問題の設定の工夫をする
 - イ 本時の課題の提示や考えを共有する場面の工夫をする。
- (2) 考えをもち表現する力をつけさせるための土台づくり
 - ア 「対話名人表」を活用し、本時で活用する対話の仕方を示し経験させる。
 - イ 本時の振り返りをさせる。(対話、内容)
- (3) 話合いの指導や支援の工夫
 - ア 根拠をはっきりさせる話合い (既習事項や経験、図や資料など)
 - イ 話をつなぐ言葉を用いた話合い
 - ウ 教師のはたらきかけの工夫(板書、揺さぶり、発問、指示、切り返し等)
- (4)研究の検証
 - ア 「対話名人表」での振り返りをもとに、児童ごとや学級全体の変容を見取る。(2か月ごと)
 - イ 考えが深まったかどうか、授業の中で児童が行う振り返りから変容を見取り、研究の日常化を図る。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・助言者	授業の概要(校内研究との関わり)
10	19	第1回授業研究(4学年) 「面積」(算数) 授業者 教諭 髙畑 和子	面積と周りの長さが関係するか、その予想と結果の「ズレ」を生かしたり、一番広い面積の図形はどれかを焦点化したりすることで、学習意欲が高まった。また、話合いの際に図や話をつなぐ言葉を使うことで相手意識をもって説明できた。
11	22	第2回授業研究 (6学年) 「てこのはたらき」 (理科) 授業者 教諭 当山 一希	前時の学習課題や生活場面との「ズレ」を生じさせることで、課題を解決したいという意欲が高まった。また、自分の考えを理由をつけて話させたり理解できなかった内容を聞き返したりさせることで、友達の方法を知りたいという意欲が高まり、考えを深めることにつながった。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師等
5	2 4	ノート指導と板書についての研修
6	1 2	教科書調査
6	28	プールの使用についての研修
		(講師:八戸市立第二中学校 講師 大倉 理佳 先生 管理人 澁谷 泰治 氏)
7	2 1	AED講習会(八戸消防署 署員4名)
8	2 2	対話を取り入れた授業づくり
		(講師:八戸市総合教育センター 主任指導主事 畠山 洋一 先生)
9	2 0	特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり
		(講師:八戸市教育委員会教育指導課 主任指導主事 青木 拓哉 先生)

6 研究の成果

- (1) 課題設定の場面などで、思考の「ズレ」から問いをもたせ、課題を共有して授業を進めることによって、学習意欲が高まり、興味・関心をもって取り組むようにできることを検証することができた。
- (2) 教師と児童が対話名人表の内容を共通理解して進めることができた。対話の仕方を示し経験させることで、対話に慣れ、つなぐ言葉をつかうことのできる児童が増えた。
- (3) 授業や単元の終わりなどに書く振り返りでは、友達の意見でよいと思ったことや自分の成長を自覚する内容が書かれ、深まりが見られた。

7 研究の課題

- (1) 対話名人表の項目を焦点化し、学年に合った目標や系統性を明らかにし、評価規準をはっきりさせて活用していく 必要がある。
- (2) 対話的な活動を継続することで、習得の段階から活用・応用に進化させること、また、その学習のあり方の工夫も課題である。

記入者(山道 恵里香)

主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成

~児童の課題解決力を高める指導法の工夫を通して~ (3年次計画の3年次)

校長 木村 朋子

1 研究主題について

教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標の「心豊かに学びたくましく生きる子どもの育成」及び努力目標「進んで学ぶ子」を受け、「夢や志の実現に向け、よりよく育とうとする子」を目指す児童像として教育活動を行っていく。主題を「主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成」とし、児童の課題解決力を高め自らの夢や志の実現に向かって行動していくための基礎を培うとともに、課題解決の基盤となる情報活用能力を養うための授業づくりについて研究を深め、教育目標の具現化を進めていく。また、話し方や聞き方の定着を図ることや特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを共通の取組としながら、児童が本時のねらいに確実に到達できるように努めていきたい。

・児童の実態から

本校児童は、これまでの取り組みの成果もあり、インターネットで情報収集したり、jamboard や Google スライドなどのアプリを活用したり、文字入力をしたりと課題を解決する上で学習の基盤となる情報活用能力の基礎が身に付いてきている。児童が考えを共有しさらに共に考える場面では、自分以外の様々な意見を知ることで、考えを深め課題解決に生かす様子が多く見られた。今年度は、互いに得た情報を共有し学び合う機会を工夫して設けることで、課題解決力を高め、学びを深めていく児童の育成を目指していく。

これまでの実践から

これまで本校では、児童の課題解決力を高めることを目指し、情報活用能力を養うための指導法を工夫してきた。1年次から、1人1台端末を活用する場面を授業の中で位置づけることで、児童は端末の使い方に慣れ、基本的な操作ができるようになってきた。2年次は、さらに互いに得た情報を1人1台端末で共有したり、板書や実物投影機で共有したりするなど、様々な方法で児童の意欲を高め、学びの共有の仕方を探ってきた。今年度は、互いに得た情報や考えを共有する場をさらに工夫し、児童が多様な見方・考え方を知ったり、考えを深めたりすることで、課題解決力を高め、学びを深めていく指導を積み重ねていきたい。

2 研究のねらい

主体的に関わり、学びを深めていく児童を育成するために、学習に必要な情報を取り出し課題解決のための手立てとしたり、意見を集約し他者とともに問題の発見や解決に挑んだりできるような指導の在り方について、課題解決力を高めることにつながり、主体的に関わり、学びを深めていくことができると考える。

3 研究仮説

互いに得た情報や考えを共有する場を工夫し、多様な見方を知ったり考えを深めたりさせることで、課題解決力を高め、主体的に関わり学びを深めていくことができる。

- (1) 情報活用能力を養うための指導の工夫
 - ア ICT機器の効果的な指導の工夫をする。
- (2) 特別支援教育の視点を取り入れた指導の工夫
 - ア 児童が考えたり理解したりする助けとなる視覚支援を工夫する

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
9	27	第1回授業研究(2学年) 音楽「おまつりの音楽をつくろう」 授業者 松橋 茉里奈 講師 助言者 八戸市立江陽小学校 教頭 石井 一二三 氏	前時までに作った太鼓のリズムカードを使って、グループごとに自分たちのお祭りの音楽を作るという課題に取り組ませた。グループ1台のタブレットにし、ジャムボード上のリズムカードを操作させたことで、意見を共有しながら活動することにつながったほか、カードの入れ替えが簡単な分、音楽を作る時間が十分に確保され、意欲的に学習することができた。
11	20	第2回授業研究(6学年) 社会「大久保利通と 明治新政府の改革」 授業者 関下 健司 教諭 助言者 八戸市教育委員会 教育指導課 主任指導主事 青木 拓哉 氏	富国強兵のための諸政策について考えさせることで、明治新政府が目指した強い国づくりを捉えさせた。おさえたい重要政策を4つに絞って示し、自分が大事だと思う政策のランキングを作らせることで、児童自ら教科書や資料を読んで考えるなど、主体的に学習に取り組むことにつながった。クラス全員の考えをモニターに映しながら1人1人ジャムボードでランキングさせたことで、自分と他の考えを比べながら学習することにつながった。

(2) 一般研修

月	日	研 修 の 内 容
6	2 1	ミニ研修講座 講師:教育指導課 主任指導主事 中村 美穂 氏
6	2 6	特別支援教育研修 講師:青森県総合教育センター指導主事 森山 貴史 氏
7	9	AED 講習会 講師: 八戸消防本部救急隊員
9	6	小·中 JS 特別支援教育(スクリーニング研修会)講師:八戸学院短期大学教授 野口 和也 氏

6 研究の成果

- (1) 「児童が考えを共有し、共に考える場」を研究し、日常的に授業で取り組んだことにより、各教科・領域において共有の仕方(1人1台端末で、モニターに映して、具体物で、板書で、全体で、グループで等)を工夫した授業展開をすることができた。その結果、児童が多様な見方・考え方を知ったり、考えを深めたりすることにつながった。
- (2) ICT 機器を活用し、児童の手元で対象物を見せたり、同じものをモニターなどで見せながら共有させたりすることにより、どこを見るのか見たいのかが焦点化され、主体的に活動することができた。また、1人1台端末の効果的な活用により、児童の意見を引き出しやすくなり、意欲的な話し合いをすることにつながった。

7 研究の課題

- (1) 共に考えるためには、自分の考えをもたせなければならない。児童に自分の考えをもたせるための手立てを さらに研究していく必要がある。
- (2) 視覚支援は有効であったが、それだけでは難しい児童もいるので、視覚支援に絞らずに児童の実態に合わせた支援をしていくようにする。

(記入者 髙橋 康子)

主体的に課題に向かい、共に学び合う子どもの育成

~児童の考えを広げ深めるための集団解決の場の工夫を通して~

(3年計画の2年次)

校長 川村 洋

1 研究主題について

本校では、教育目標として「気づき、考え、行動する子」努力目標として「進んで学ぶ子」を掲げ自ら課題を見つけ、解決に向けて主体的に学習に取り組む子どもを育てることを目指している。学習指導要領の目標及び内容を踏まえ、授業の展開において児童の考えを広げたり、深めたりするために集団解決の場を工夫することで主体的に課題に向かい、学び合う子どもを育てることができると考え、研究主題を設定した。

昨年度は、3年計画の1年次として「主体的に学び、共に高め合う子どもの育成~児童の意欲を引き出す『学習課題』の設定と集団解決の場の工夫を通して~」という研究主題のもと児童の考えを広げ深める授業づくりを目指し授業改善を行った結果、以下のような成果が得られた。

- ○単元や1単位時間の導入時に教材のしかけや発問の工夫をし、教師が意図するねらいと子ど もの「解決したい」という思いを一致させたタイミングで学習課題を設定することが児童の 解決意欲の高まりにつながった。
- ○学習過程の中に、立場を表明する場を設定し、児童の考えをネームプレートやクロムブック の付箋機能を使って提示させることで、児童の考えを整理することができ、課題解決のため の思考の焦点化につなげることができた。
- ○集団解決の場において教師が話し合う観点を示したことで児童から根拠をもった意見を引き出すことにつながった。

今年度は、解決意欲を高める学習課題設定の日常化を図りつつ、さらに児童の意見や立場を明確にし、児童の意見をつなげたり整理したりする話合いを通して児童の考えを広げ深める授業実践を取り入れていきたい。考えをよりよいものに練り上げ、考えを広げ深める集団解決の場の工夫について研究を進めることで、子どもが主体的に学び合い、「わかった!できた!身についた!楽しい!」と実感できる授業の実現を目指していくことができると考える。

2 研究のねらい

主体的に課題に向かい、共に学び合う子どもを育てるために、児童の考えを広げ深めるための集団解決の場の工夫を、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

立場を表明する場を設けたり、観点を明確化・焦点化した上で話し合わせたりすることにより、主体的に学び合う児童を育成することができる。

- (1)立場を複数回表明させるための場の工夫
- (2)集団解決の場で話合いの観点を明確化・焦点化するための工夫

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	授業研究	全体会等
5	3 1	授業公開(特別支援学級) いちょう学級 授業者 元木 欣也 壬生 理輝 寺田 晴美	個々の課題に応じた段階的な個別指導と、立場の 表明からの問題解決的な学習、様々な活動の中で失 敗を通して協力する姿勢を育てる学習に取り組む ことができた。
7	5	第1回授業研究(3学年) 理科 「こん虫を調べよう」 3年4組 授業者 松山 郁	チョウやバッタの体のつくりについて振り返る ことで、他の虫についても昆虫かどうか判別するた めにどこに着目して考えればよいのか、観点を焦点 化した話合いができた。立場を再表明することによ って、児童の考えの変容が明確になり、昆虫の体の つくりについて理解を深めることができた。
9	2 5	第2回授業研究(集中授業) 国語 「うみのかくれんぼ」 1年3組 授業者 村井 優子 助言者 八戸市教育委員会 教育指導課 主任指導主事 中村 美穂 氏	「名前と場所」「体の特徴」「隠れ方」の3文で抜けている文章を提示し、選択肢を与えることによって意欲的にどの文が入るかを考えることができた。また、同じ立場同士で話し合わせたことによって、着目させたい言葉や3つの文の順序に気付かせる手がかりになった。
12	6	第3回授業研究(5学年) 社会 「これからの社会に向けて」 5年2組 授業者 広田 陽介 助言者 八戸市教育委員会 教育指導課 主任指導主事 大下 洋一 氏	世界の EV 普及率のグラフを提示した後、日本の 普及率を予想させたことは、話合いの観点を明確化 し、学習意欲の高まりにつながった。話合い後、「値 段」「スタンド数」「環境」の3つの観点で EV とガ ソリン車のどちらを買うのかを再表明する場を設 けたことで、考えを深めることができた。

(2)一般研修

月	日	内 容
4	1 9	集団解決の場の工夫〜教師のファシリテーションとは〜 講師 本校教頭 福田 秀貴
6	7	吹上小学校避難所運営研修 指導 八戸市災害対策課 職員
1 0	2 5	特別支援教育についての研修 講師 こども支援センター 主任指導主事 小堀 祐二氏

6 研究の成果

- (1) 少人数や全体での話合い後に、再表明する場を設定することによって、児童の考えの変容が顕在化し、さらに根拠のある考えに迫ったり自分の考えを深めたりすることができた。
- (2) 既習事項や児童のつぶやきなどから話合いの観点を明確化・焦点化することによって、児童の思考の流れに沿って話合いを進めることができた。

7 研究の課題

- (1)児童が主体的に学び合うための立場の表明の工夫についてさらに研究を深める必要がある。
- (2) 集団解決の中で児童の考えを広げ深めるための教師の働きかけを工夫する必要がある。

(記入者 上平 陽子)

確かな「見方・考え方」を育てる授業づくり

~全員参加を目指した「聞く」ことへの指導の工夫~

(3年計画の4年次)

校長 島浦 靖

1 研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

青森県及び八戸市の学校教育指導の方針を受けるとともに、児童や家庭・地域社会との連携のもと学校経営に創意工夫をこらし、教育目標「めあてをもって自ら学ぶ子」の育成に取り組んでいく。その根幹として校是である「徳と知識を磨く」という基本理念を共有し、"笑顔いっぱいの学校"を目指している。学校は、子どもたちにとって学ぶ楽しさを実感できるところでなければならない。その基盤となる学級に受容的・共感的な支持的風土が溢れるとき、子どもは、自分自身が受け入れられ、認められ、かけがえのない存在であることを実感し、学ぶ力が育まれると考えた。

この3年間、感染症拡大防止の観点から、個人研究や学年・ブロック研究という形態で校内研究を行ってきた。今年度は、昨年度までの研究で培ったものを全教員が共有し、みんなができる普段使いの授業を目指して研究を進めていくことにした。

そこで本校では「人との関わりを意識した子どもの育成」を学校目標とし、学習指導と学級経営において、次のことに取り組んでいく。学習指導では、考えの根拠や理由を導く確かな「見方・考え方」を育てるために、全員参加の授業を目指した「聞く」ことへの指導の工夫を、日常的な授業実践を通して明らかにしていく。学級経営では、月別生活目標への取組や特別活動の実践、ソーシャルスキル・アンガーマネジメントの指導を通して、安全・安心な生活を送る中で、人との関わり方について具体的に学ばせる。そして、子どもたちの夢や志の実現に向け、生涯にわたって重要な働きをする「見方・考え方」を育成する本研究は、本校の目指す子ども像"笑顔いっぱいの子ども"を具現化するために有効であると考え、研究主題を設定した。

(2) 児童の実態から

昨年度の研究では、導入から課題設定における工夫をすることによって、児童に学びの必要感を与え、意欲的に学習に取り組ませることが確かめられた。「聞く」ことを発展させるために、日常の授業において教師が児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけ(ファシリテータ機能)を工夫したことによって、児童の聞こうとする意識が高まり、自分の言葉で言い換えることができるようになった。しかし、「見方・考え方」をより確かなものに育てるためには、児童が自分ごととして課題に取り組むこと、共感的に話を聞くことが必要である。そのためには、問題へのつぶやきや疑問を明確にしたり、自分の立場や考えを表現したりする手立ての工夫が求められる。また、児童全員が主体的・対話的に課題解決に取り組めるよう、児童の発言を他の児童につなぐ言葉がけの日常化やより発展的な研究が必要である。特に、聞く力が弱い児童やうまく話せない児童には、特別支援教育の視点を生かした手立ての工夫や共有が有効であると考えた。

そこで今年度は、「全員参加を目指した『聞く』ことへの指導の工夫」として、人の話を共感的に聞かせ、 児童の発言をつないで引き出す教師の言葉がけや、特別支援教育の視点を取り入れた指導を工夫することに よって、物事を捉える力の育成を目指す。

課題解決に向けて、多様な「見方・考え方」を認めることで児童の思考が広がり、深化するとともに、一人一人の個性を尊重することで、「自分でもできる」という自己有用感が高められ、努力目標の「進んで学ぶ子」の育成につながるものと考える。

2 研究のねらい

考えの根拠や理由を導く確かな「見方・考え方」を育てるためには、全員参加の授業を目指した「聞く」ことへの指導の工夫が必要であり、日常の授業実践を通して明らかにしていく。

3 研究仮説

日常の授業実践を通して、全員参加の授業を目指した「聞く」ことへの指導の工夫は、児童の考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を育てることができる。

4 研究内容

子どもの変容が見える授業づくりとして、以下の2点を示す。

(1) 導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫が、日常の授業において実践できているかについて検証する。

(2) 児童の発言をつないで引き出す教師の言葉がけや、特別支援教育の視点を取り入れた指導の工夫が、全員参加を目指した「聞く」ことの指導に効果があったか検証する。

5 研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名	成果・授業の概要
7	10	【要請訪問】 第1回授業研究 低学年ブロック 国語科「スイミー」 2年2組 教諭 福士 玲菜 指導助言 教育指導課 中村 美穂 主任指導主事	本時は、登場人物の行動や出来事から、登場人物の気持ちを想像する学習である。 教師が問い返したり、聞き比べをさせたりする言葉がけを通して、児童は本文の言葉に着目し考えをより深めることができた。
9	13	第2回授業研究 高学年ブロック 学級活動(3) 「将来のために」 6年2組 教諭 山崎 孝裕	本時は、将来就きたい職業について話し合う活動 を通して、働くことの意義を考える学習である。 児童の発言をつないだり引き出したりする教師 の言葉がけによって、聞こうとする態度や互いを理 解しようとする態度を養うことができた。
10	31	第3回授業研究 中学年ブロック 算数科 「何倍でしょう」 3年2組 教諭 伊藤 定宏	本時は、3つの数の数量関係を順に考えたりまとめて考えたりして解く方法を見つける学習である。テープ図や関係図を用いて多様な考え方や解き方を話し合わせる活動によって、「聞く」ことへの全員参加や思考の深化を促すことができた。

(2) 一般研修

(4)	120					
月	日	内	容・講師			
6	28	特別支援教育に関わる研修会①指導計画	なかよし学級	担任	前田	健一
7	12	救命講習会	養認	雙教諭	中田	幸恵
8	22	アンガーマネジメント研修	一般社団法人アンガーマネシ	ジメン]	トジャノ	ペン
			到	里事長	佐藤	恵子
10	11	特別支援教育に関わる研修会②コグトレ	なかよし学級	担任	前田	健一
10	26	心のケア研修	八戸学院大学短期大学部	教授	野口	和也
2	14	特別支援教育に関わる研修会③	なかよし学級	担任	前田	健一
		100000000000000000000000000000000000000	J	• !	14 41	

6 研究の成果

- (1) 導入から課題設定における工夫をすることによって、児童に必要感をもたせたり、参加意欲を高めたりすることができ、課題に対して主体的、能動的に取り組ませることにつながった。
- (2) 全員参加を目指した「聞く」ことの指導のために、日常の授業において教師が児童の発言をつないで引き 出す教師の言葉がけ(ファシリテータ機能)を工夫したことによって、児童が自然につながり、互いの意 見を聞いて自分の言葉で言い換えたり、付け足したり、比べたりすることができるようになった。
- (3) 特別支援教育研修では、八戸短期大学の野口和也氏やアンガーマネジメントジャパンの佐藤恵子氏、特別支援学級担任の研修を受けることによって、児童理解が深まり、日常の言葉がけや指導に生かすことができた。

7 研究の課題

- (1) 児童の確かな「見方・考え方」を育てるために、導入から課題設定までに、解きたい、解かずにはいられない状況をつくり出し、他者との協働による問題解決の過程を楽しませることが重要である。そのために、特別支援教育の視点を生かした手立ても更に工夫しながら、全員参加の授業を展開することで、より多くの児童の発言を引き出す必要があると考える。
- (2) 児童が「やればできる」という思いをもちながら、最後までねばり強く課題解決に向かうために、教師は 学級の受容的・共感的な支持的風土づくりに努め、授業における児童の発言をつないで引き出す言葉がけ を日常化するとともに、一時間の授業や単元を通して自己の変容を児童自身にとらえさせ、自己肯定感を 高める指導の工夫が必要であると考える。

(記入者 吹越 直美)

主体的に学び合う子の育成

~対話的な授業づくりを通して~

(3年計画の2年次)

校長 大坂 隆

1 研究主題について

本校では教育目標に「明るく やさしく たくましい子」、努力目標に「自ら考え、学び合う子」を掲げ、主体的に学習に取り組む児童の育成を目指している。また、学校目標を「ともに成長する子の育成」とし、児童の学習意欲を引き出し、学ぶ楽しさや喜びを実感させる授業づくり、話を聞いたり、話し合ったりしながら友達との関わり合いを深める授業づくりに取り組んでいる。

昨年度まで副題を「~問題解決的な学習を通して~」とし、問題解決的な学習の流れを意識した 授業改善を行い、「必要感のある学習課題の設定の工夫」と「学びを実感できる振り返りの工夫」を 研究した。その結果、成果として、問題提示の仕方や教材にしかけを作る等、導入の工夫をするこ とで、児童に問いの意識を芽生えさせることができた。また、学習して分かったこと、よいと思っ た友達の考えなどを様々な方法(文章、絵文字など)で表現させることにより、次時につながる振 り返りをさせることができた。しかし、授業の導入時だけでなく、45 分間を通して児童の意欲を持 続、増幅させるような授業の展開や学びを実感させる振り返りはどうあればよいかという課題も残 った。さらに、学校生活において、内容を考えて話を聞いたり相手を意識して話したりすることが 十分に身に付いていないことも課題として挙げられた。

そこで、今年度は昨年度までの研究主題を踏まえ、課題解決のため意欲を持続させることと、友達と考えを交流しながら課題解決をする力を育成したいと考え、副題を「~対話的な授業づくりを通して~」と設定した。まず、問題提示のしかたや教材へのしかけ、考えや立場の相違を可視化するなど、導入でのはたらきかけを工夫することで、問題解決への必要感や切実感をもたせ、自分ごととして課題をとらえ、解決への意欲の持続ができるようにさせたい。さらに、自分の考えを友達と話し合い考えを深めるような対話活動を工夫することで、協働して課題解決にあたるようにさせたい。このような授業実践を積み重ねることで、主体的に学ぶ児童を育成することができると考える。

2 研究のねらい

児童が主体的に学びに向かい、対話しながら問題を解決するための効果的な指導のあり方を国語 科・算数科の授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

必要感のある学習課題の設定や対話の場を工夫することにより、問題解決に向けて主体的に学び合う児童を育成することができる。

4 研究の内容

- (1) 必要感のある学習課題の設定
 - ア 導入でのはたらきかけの工夫(提示の工夫、学習教材へのしかけ、発問や活動指示)
- (2) 対話の場の工夫
 - ア 学習場面に応じた対話活動の内容や形態の工夫
 - イ 対話を行うための基礎的な力をつける (聴き方、話し方、話し合いのしかた)

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等・題材名・講師等
6	2 3	第1回 授業研究(要請訪問)
		第3学年 国語科「こまを楽しむ」 授業者 教諭 大島 和香奈
		指導助言 教育指導課 主任指導主事 中村 美穂 氏
1 1	1 3	第2回 授業研究(要請訪問)
		第6学年 国語科「『鳥獣戯画』を読む」 授業者 教頭 木村 千穂子
		指導助言 教育指導課 主任指導主事 中村 美穂 氏
1 2	5	公開授業 1学年 算数科「もののいち」 授業者 教諭 松橋 麻紀
1 2	6	公開授業 2 学年 算数科「長方形」 授業者 教諭 山田 章子
1 2	7	公開授業 5学年 社会科「ニュース番組をつくるための情報収集」
		授業者 教諭 加藤 晃介
1 2	1 2	公開授業 4学年 算数科「小数のわり算」授業者 教諭 中園 由香
2	1 9	公開授業 そよかぜ学級 自立活動「聞きとり検定に挑戦しよう」
		授業者 教諭 高橋 愛

(2) 一般研修

月	日	内容・講師等	
4	4	エピペン講習会 講師 養護教諭 久保 紗也香	
5	2 6	AED講習会 講師 八戸消防署署員	
6	7	「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり」	
		講師 八戸市教育委員会 教育指導課 主任指導主事 青木 拓哉 氏	
6	2 8	「気になる児童の見方・捉え方・考え方」	
		講師 こども支援センター 指導主事 三浦 祐子 氏	
8	2 1	長者中学校区ジョイントスクール研修会 講話「保護者への対応」	
		講師 青森県総合学校教育センター 教育相談課 指導主事 根城 亮輔 氏	
8	3 0	県学習状況調査の分析と考察	
9	2 7	「体育科における問題解決的な授業づくり」	
		講師 教頭 淡路 浩志	
1 0	1 8	心のケア研修支援事業「気になる児童の様子と教師の対応について」	
		講師 八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 教授 野口 和也 氏	

6 研究の成果

- (1) 思考のずれを生じさせるような導入でのはたらきかけにより、児童に問いの意識を芽生えさせることができた。児童は自分の考えや立場を可視化することで意見の違いを意識し、考えの根拠に焦点を絞って話し合うなど学習課題に対して主体的に取り組むようになった。
- (2) ペアやグループ、全体での話し合いや一人一台端末の活用など、対話の場を工夫することにより、児童は友達との考えの相違に気付いたり考えを広げたりしながら協働して課題を解決しようとしていた。

7 研究の課題

(1) 児童の聞く力は高まっていると感じるが、さらに話の中心を捉えて聞いたり、相手に伝えるという意識で話したりする力を付ける教師の関わり方はどうあればよいか、研究を進めていく必要がある。 (記入者 松橋 麻紀)

表現し合い学びを深める子どもの育成

~ 個の考えを全体へ広げる対話の工夫 ~

(3年計画の2年次)

校長 沼舘 寿朗

1 研究主題について

本校では、教育目標を「自分を育てる子」とし、自己を振り返りながらよりよい自分を目指して努力し、自分を高めていく子を育むこととしている。また、努力目標の一つとして「自分の考えをもち、進んで学習する子」を掲げ、相手の考えを理解するためによく聞き、自分の考えと比べたり質問したりしてよさに気付きながら考えを創り上げ、協働して課題解決する子を目指している。今年度の学校目標は、自他を大切にしながら、よりよい生活に向けて自主的に考え、実践していこうとする態度を育てていくことが重要であると考え、「自分やまわりの人を大切にし、主体的に学ぶ子の育成」としている。

昨年度の校内研究では「表現し合い学びを深める子どもの育成」(1年目)の取組の成果として、導入時に児童の中に生まれた問いや思いを共有することで、課題意識が高まり、友達の考えを聞こうとする態度に向上が見られた。また、具体物やICT機器等を活用しながら考えの根拠を表現させることで、双方向の対話がしやすくなり、学び合いに深まりが見られた。さらに、発表者の考えを他の児童にも繰り返して発表させることで、個の考えを全体に広げ浸透させることができた。児童の発言をもとにした問い返うことにより、新たな気付きを発表する姿も見られるようになった。自分の立場を明確にさせて学習を進めていくことで、考えを積極的に話そうとする児童も見られた。

課題としては、全体的に見ると発表に対する意欲は高いとは言えないため、発表意欲を高める指導を 工夫していく必要がある。対話的な学びには、相手の立場になって話したり、聞いたことをもとに自分 の考えを広げようとしたりする姿勢が必要であると考える。そのため、今年度は、話す場面の設定を工 夫することにより、学び合いを深める授業づくりを目指したい。

「伝えたい」といった発表意欲を高めるためには、子供一人ひとりに「なぜだろう?」「やってみたい」「こうしたらどう」といった問題意識を高めることが大切である。また、自分の立場を表明させた後に他の立場と比較する場を設けるなどして、「自分の考えを伝えたい」「相手の考えを知りたい」という対話の必要感をもたせることも大切である。よって、児童に、学び合うよさを実感させ、相手の立場になって話し、聞いたことをもとに考えを広げる授業づくりを目指していきたい。そのためにも、板書の工夫や問い返しといった教師のかかわりのもとに対話することを中心とした、小集団交流や全体交流を意図的・計画的に設けていく。そして、交流後、改めて自分の立場を表明させ、振り返りに生かすことにより学び合いによる自分の変容を自覚させていきたい。そのことによって、学び合うよさをさらに実感できるものと考える。

本校児童の実態として、CRTの意識調査結果を見ると、「主体的に学習に取り組む態度」は学年が上がるとやや低めの傾向にある。課題を素直に取り組むよさがある一方で、活用問題では諦めたり、自信がもてず受け身になりがちである。児童を能動的に学習へ関わらせるために、話す力を育て、教師の関わり方や効果的な指導の工夫を研究していくこととする。自分と他者の関わりの中で展開される協働的な学習活動を通して、表現し合い学びを深める子どもの育成を目指していく。今年度は、2年目の研究として、自己の考えを全体に広げる対話のあり方に焦点を置き、研究を進めることとする。

2 研究のねらい

一人の考えを全体に広げ、学びを深めるための指導の在り方について、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

児童の中に生まれた問いや思い、考えを全体へと広げる対話的な学習を展開することにより、表現し合い学びを深める子どもを育成できるのではないか。

4 研究内容

- (1) 児童の中に生まれた問いや思いを全体へ広げて課題意識を高める指導の工夫
- (2) 個々の考えを全体へ広げて問題解決につなげる指導の工夫

【具体的な取組】

- ○導入時の立場の表明と、交流後の立場の再表明
- ○小集団交流や全体交流の意図的・計画的な設定
- ○思考の変容の可視化と自己の変容を踏まえた振り返り

(1) 研究仮説に基づく研究

(1)	191 フL I	火説に基づく研先		
月	日	内 容		
9	2 1	第1回授業研究(要請訪問)5学年 国語 授業者 瀧川 恵士 「よりよい学校生活のために」講師:八戸市教育委員会教育指導課 主任指導主事 中村 美穂 氏		
		個人で話し合うべき課題や解決策を考え、「Canva」のホワイトボード機能を使って共有することで、個々の考えを全体へ広げ、課題意識をもたせた。話合いの際の話型を統一することで、話合いを通して問題解決を行った。		
1 0	1 1	第2回授業研究(要請訪問) 2 学年 算数 授業者 野里 文 「三角形と四角形」講師: 八戸市総合教育センター 主任指導主事 小向 一樹 氏		
		図形を少しずつ提示していく図形クイズを行うことにより児童の活動意欲を高め、児童の 呟きを拾い全体に問い返し、全体に広げていくことで課題意識をもたせた。グループの話合 いでは、ホワイトボードに児童の考えを書かせたものを全体共有の場で活用することで、問 題解決を行った。		
1 1	2 9	報告会		
		授業仮説に沿った授業実践の内容・成果と課題の発表を行い全体共有した。		

(2) 一般研修

月	日	内 容
4	1 2	今年度の校内研修年間計画について
5	3 1	ミニ研修会 ペア対話(教頭 大江雅之)、特別活動に関わる研修(特活主任 馬渡静香)
6	2 1	道徳教育に関わる研修会 授業参観と質疑・応答(道徳推進教員 安ケ平祐美子)
6	2 8	特別支援教育に関わる研修会(みどり学級 成田涼子) (6月19~23日参観週間:自立活動(モジュールの時間))授業参観と質疑・応答
8	1 8	小中ジョイントスクール推進事業 第一中学校区第2回合同研修会
8	3 0	県学習状況調査 (5 学年)

6 研究の成果

- (1) 導入時、全体に大きな図形やCanvaの画面を見せるなどして児童の意欲や集中力を高め、問いや考えを共有することによって、課題意識を高めることができた。
- (2) 児童から出てきた言葉を拾って紹介し全体で共有することで、問題解決につながる話合いを進めることができた。また、個やグループの考えを可視化することで、考えを広げたり深めたりする児童の姿が見られた。

7 研究の課題

- (1) 話型や反応の例を示すことで、話題からずれることなく相手の話を聞き、共感するような話合いが展開されたが、児童に問題解決への必要感や切実感をもたせるための対話のあり方を工夫していく必要がある。
- (2) 児童が自分の考えを表現し合い、全体で共有しながら問題解決していく協働的な学びにつなげるための教師の役割について研究を進めていきたい。

(記入者 佐々木 直子)

主体的に学び合う柏っ子の育成

~問いの意識と変容を促す授業づくりの工夫~ (2年計画の2年次)

校長 南舘 義孝

1 研究主題について

本校では、教育目標に「夢をもち 自分を育てる柏の子」を掲げ、発達の段階や個性に応じて「夢」をもち、自分の心の中の「三本の苗木:やる気・根気・勇気」を育て広げる教育を行っている。昨年度より研究主題を「主体的に学ぶ柏っ子の育成」から「主体的に学び合う柏っ子の育成」とし、共同的な学びをより深め、日常の授業改善を繰り返しながら子どもを育てる取組を行っていくものとした。昨年度の校内研究では、「主体的に学ぶ」姿を追究するため、学習問題の設定と自分の立場(考え)を明らかにした上で、授業に取り組む児童の姿を共有することにした。また、個で考えを収束させるのではなく、「学び合い」を経て多様な考えに触れ、自分の考えを見つめ直す「変容」の姿についても明らかにすることとし、本主題及び副題を設定した。

今年度は授業研究について、対象とする教科を制限せず、より広い教科・領域で主体的に学び合い、変容する姿を明らかにすること、そのための手立てについて研究することとした。そのために、「問いの意識」を大切にすることを継続しつつ、授業の中での問い・思考・立場の変化を意識しながら問題解決に向かわせ、より「学び合う」場の工夫に焦点を当てた授業実践を行うようにした。また、「変容」について、立場や意見そのものが変わらなくても、他者の意見を踏まえたり、納得したりした上で、考えが広がったり深まったりすることについて共通理解を図った。そして参観者全員で児童の姿を見取ることで、授業の中での変容がどのようなものであるのか、また、どのような場面や教師の働きかけによって起こるのかに着目し、検討することにした。

2 研究のねらい

児童が主体的に学びに向かっていくための問いや効果的な学び合いの在り方を、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

児童の追究意欲を喚起する課題設定や、人や教材と向き合う場面を取り入れることにより、主体的 に学ぶ児童を育てることができると考える。

- (1) 問いの意識を大事にした働きかけの工夫
 - ア 問いを生み出す発問の仕方・教材提示の工夫
 - イ 児童にとって必要感のある課題設定(問いの共有)
- (2) 人や教材と関わり、一人一人の変容を促す「学び合い」の工夫
 - ア 考えを広げたり、深めたりするための人や教材と向き合う工夫
 - イ 変容を自覚するための手立て

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等		
6	22	国語科 (2学年)「あったらいいな、こんなもの」/教諭 八嶋 麻里 道徳科 (4学年)「良 太 の は ん だ ん」/教諭 小笠原梨夏 算数科 (5学年)「図を使って考えよう」/教諭 尾崎真理子		
7	13	(初任者研修示範授業を兼ねる) 教育指導課訪問		
1	13	教育拍导床切问		
7	19	授業研究(6学年)音楽科「ききどころを見つけて」/教諭 畑中 裕子		
9	6	授業研究 (3学年) 社会科「買い物調べ」/教諭 古川 千晶		
11	1	授業研究(1学年)体育科「ボールけりゲーム」/教諭 在家真奈美		
11	21	小・中学校ジョイントスクール (3~6学年授業公開)		

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等	
6	14	特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり	
0		講師:子ども支援センター 小堀 祐二 主任指導主事	
8	31	県学習状況調査の採点・分析・考察	
10	25	問題解決的な学習を促す「問い返し」の共有	
10		ファシリテーター:本校研修主任 下村 亘	
11	15	体育指導に関する研修	
11		講師:本校校長 南舘 義孝	

6 研究の成果

- (1) 児童は、問いを生み出す発問や教材提示などの手立てにより、「解決したい」「解決しよう」という思いをもって授業に臨むことができた。「○○を考えよう」といった学習課題だけではなく、「なぜ」「どちらが」「どうすれば」といった、思考を焦点化した学習課題を設定することにより、主体的な学び・考えを広げたり深めたりすることにつながった。また、試行錯誤の時間と他者と関わる場を確保することで、一人一人の思考を促し、児童の思考が変容する様子が見られた。
- (2) 昨年度は2教科(国語科・算数科)の授業研究であったが、今年度は6教科の授業研究を行った。幅広い教科で「学び合い」の事実を見取ることができた。児童は単なる意見交換ではなく、考えを検討したり、話合いによって深めたりする「学び合い」に向かうことができた。また、研究の中で考えを深めさせる「問い返し」の重要性を認識し、指導者全員で「問い返し」の言葉を共有する機会を設けることで、研修の日常化につながった。

7 研究の課題

- (1) 教科や発達の段階に応じた「学び合い」の方向性について共通理解を図りながら、具体的な単元 や場面において追究を継続していく必要がある。
- (2) 意欲や学力において個人差が見られるため、一人一人の追究意欲を喚起する問いや評価の仕方・ ICTの活用など、個別最適な学び・協働的な学びについて理解を深めていく必要がある。

(記入者 下村 亘)

自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成

(3年計画の3年次) 校長 花生 典幸

1 研究主題について

これまで本校では、国語科と算数科の授業を中心に「対話する場面」を意図的に設定 し、2年間研究を進めてきた。1年次は、対話のさせ方(発問、教材へのしかけ、対話を ファシリテート)を工夫して指導を継続してきた。それにより、相手の話をじっくり聞こ うとする児童が増えた。相手の意見をしっかりと受け止め、共感しながら聞こうとする 姿が多くみられるようになった。また、自分の考えと相手の考えを比較しながら聞くこ とができるようになってきた。相手の考えをしっかりと受け止め、その上で自分の思い や考えを相手にわかりやすく伝えようとする姿も多くみられるようになってきた。しか し、全体的に見ると、友達の話を集中して聞くことができなかったり、自分の考えをも っているのだが、その考えをうまく相手に伝えられなかったりする児童の割合も依然と して多いことが分かった。そこで、2年次は、より「対話」に焦点を当て「対話のベー ス作り」「『対話する場面』の工夫」の2点を研究の中心とすることとした。「対話のベー ス作り」を継続して行うことにより、友達の話を自分事として真剣に聞くようになり、 話を聞く姿勢に良い変容が見られるようになった。対話を継続的に行わせることにより、 何でも話そうとする意欲に向上も見られた。友達の話を肯定的に聞きながら対話をする 姿が多く見られるようになってきた。そして、「『対話する場面』の工夫をする」ことに より、対話に必要感が生まれるようになった。対話の仕方を教師がアドバイスすること により、子ども同士の対話スキルに大きな向上が見られた。しかし、子どもたちの対話 場面で教師がファシリテートしすぎるあまり、子どもが主役になりきれず、子ども本位 の問題解決のための対話に至らないことも少なからず見られた。

そこで、今年度は研究テーマと研究教科はそのままで、昨年度までの研究の成果を生かしながら、子どもたちの力で問題解決ができる子どもたちを育てていく必要がある。子どもたちから生まれた問題を解決するために、子どもたちの力で対話をさせていく場面をできるだけ多く設定するようにする。その際に、教師がすぐにファシリテートするのではなく、子どもたちに育った対話力を信じ、子どもたちに任せるよう心がけていく。2年間の研究で身についてきた「話を聞く力」「自分の考えを意欲的に伝えようとする態度」「自分の考えを巧みに伝えるスキル」を生かし、対話を通して、子どもたちなりの答えを見出し問題解決ができるような子を育てていきたい。以上のようなことをもとに、自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもの育成に努めていきたい。

2 研究のねらい

自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育成するための効果的な指導のあり方を、 国語科と算数科の学習における授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

授業の中に「対話する場面」を意図的に設定し、対話のさせ方を工夫することにより、 自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育てることができる。

4 研究内容

- (1) 対話のベース作り
 - ア 話を聞こうとする姿勢の育成
 - イ 進んで話そうとする意欲の喚起
 - ウ 何でも言い合える学級の雰囲気づくり
- (2)「対話する場面」の工夫
 - ア 発問の工夫
 - イ 教材へのしかけ、提示の仕方

5 研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	研修内容・学年・授業者等
1 1	1	第1回授業研究(5学年)授業者 教諭 三浦 圭太
		算数「表を使って考えよう」 第2回授業研究(6学年)授業者 教諭 野里 さや香
1 1	2 2	国語「やまなし」

(2) 一般研修

月	日	研修内容・講師・概要等
5	3 1	「プールの使い方」についての研修 講師:本校教諭
6	1 4	「クロームブックの活用」についての研修 講師:本校教諭
6	2 2	「のびゆくちぐさの子」を活用しての児童理解の研修(下学年)
6	2 8	「のびゆくちぐさの子」を活用しての児童理解の研修(上学年)
6	3 0	「特別支援の視点を活かした授業づくり」について 講師:立教大学現代心理学部 教授 大石 幸二先生
8	3 0	青森県学習状況調査採点と分析

6 研究の成果

- (1) 対話する場面を多く設定することにより、対話をすることに慣れ、子どもたちが主体となって対話し問題解決をしようとする姿が、多くの子どもに見られるようになった。また、教師が頻繁にファシリテートしなくても、自分たちの力で対話を継続できるようになってきた。
- (2) 日常的に対話をさせることにより、授業以外の場面でも子どもたち同士で問題解決 するために対話するようになってきた。その際に、友達の考えをしっかりと聞き、 自分の考えと比較しながら意見を言うことができるようになってきた。

7 研究の課題

- (1) 積極的に対話をしようとする子が増えてきてはいるが、なかなか勇気を出せずに対話に参加できない子もいる。全員が自分の考えをもとに積極的に対話できるよう、ペアやグループでの対話を活用したり、対話するためのスキルを指導したりしていく必要がある。
- (2) 教師の出番(ファシリテートするタイミング)を見極めるのが難しい。子どもが主体となる対話をさせるにあたり、ファシリテートする適切なタイミングと言葉の吟味をさらにしていく必要がある。 (記入者 佐々木 亮輔)

主体的に学ぶ児童の育成

~問題解決の意欲を持続させるための「はたらきかけの工夫」~

(3年計画の3年次)

校長 三津谷 喜美典

1 研究主題について

令和4年度の研究主題『主体的に学ぶ児童の育成~問題解決の意欲を持続させるための「しかけ」や「発問」の工夫~』の実践についてのアンケートでは、導入は、児童の知的好奇心を刺激し日常化できるしかけを行うことができたという意見が90%だった。また、展開では、授業全体を通して児童の主体性が持続するようなしかけの工夫や効果的にしかける場面選びについて、指導者が意識し、それぞれに実践を積み重ねた。実際、自力解決の場での「しかけ」や「発問」の工夫によって、児童が主体的に学習に取り組む姿が見られた。

一方、導入、展開ともに、しかけを毎時間考えることは難しいことやしかけの捉え方に差が生じていること、また、特別な支援を要する児童への指導を意識した発問の工夫が必要であることが課題として挙げられた。

そこで今年度は、これまでの「しかけ」には、「問い返す」「誤答を出す」のような日常的にできるものも含まれることを共通理解し、日常化を意識した「はたらきかけの工夫」について研究を深めることにした。

昨年度に引き続き、導入から課題設定においては、「教材提示、問題提示」によるしかけに加え、「発問や指示」を明確にすることで、児童が自ら問題を発見できるようにした後、問いを共有し、学習課題を設定する。また、展開では、問題解決の意欲を持続させるために児童の実態に応じて「はたらきかけの工夫」をする。このように「はたらきかけの工夫」をすることで、「解決したい、達成したい」という思いを持続させ、主体的に学ぶ児童を育成していきたい。

2 研究のねらい

問いをもち、最後まで児童の問題解決の意欲が持続するような「はたらきかけの工夫」について、 算数科の授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

児童が課題を自分ごととしてとらえ、進んで考えたくなる「はたらきかけの工夫」をすることで、 問題解決の意欲を持続させ、主体的に学ぶ児童を育成することができる。

- (1) 問いの意識をもたせ、問題解決の意欲を持続させるための「はたらきかけの工夫」
 - ア 授業の導入から課題設定における「はたらきかけの工夫」
 - イ 授業の展開における「はたらきかけの工夫」

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
6	5	第1回授業研究(要請訪問 2学年) 「長さ」 授業者 教諭 和泉 知子 指導助言 八戸市総合教育センター 副所長兼主任指導主事 松橋 祐哉 氏	導入で長さと向きの異なる2本の直線を 提示し、予想させた。ネームプレートを活 用したことで、意欲的に学習に参加するこ とができた。つまずきが予想されるものさ しの導入で、グループ活動を取り入れたこ とが、意欲の持続に効果的だった。
11	1	第2回授業研究(6学年) 「立体の体積」 授業者 教諭 大川 勇介 指導助言 本校校長 三津谷 喜美典	複合図形の体積の解法を共有し、どの方法で解くのか立場を表明させたことで、意欲的に問題解決に向かうことができた。また、友達が考えた式を説明し合うことで、多様な解決方法があることに気付くことができた。

(2)一般研修

月	日	内容等	
4	2 6	児童理解・生徒指導情報交換	
5	3 1	江陽中学校区ジョイントスクール研修会 (江陽中での授業参観と情報交換)	
6	2 1	救命救急法の講習会 講師:八戸市東消防署小中野分遣所の方々	
6	2 8	1人1台端末の活用について 講師:本校教頭 石井 一二三	
		通常の学級における特別支援教育について	
7	5	講師:八戸市教育委員会こども支援センター	
		主任指導主事 横沢 吉則 氏	
1 0	2 5	1人1台端末の授業での活用について 講師:本校教頭 石井 一二三	
1 1	2 2	江陽中学校区ジョイントスクール研修会 (江陽小での授業参観と情報交換)	

6 研究の成果

- (1) 具体物の提示や立場の表明、誤答の提示、問い返しなどの「はたらきかけの工夫」を行ったことで、課題を自分ごととして捉え、生き生きと学習に取り組む姿が見られた。
- (2) 展開時において、グループ活動を取り入れたり、友達の考えを説明する活動を取り入れたりすることは、問題解決への意欲の持続に効果的であった。
- (3) 「はたらきかけの工夫」の実践を共有する場を設けたことで、日常化へとつながってきている。

7 研究の課題

- (1) 問題解決への意欲が途切れてしまう児童が見られた。来年度も「はたらきかけの工夫」の実践を 積み重ね、児童の実態に合ったよりよいはたらきかけを検証していく必要がある。
- (2) 「聞く力」「話す力」を高める手立てを日常的に講じながら、児童が「聞きたくなる、話したくなる」ような「はたらきかけの工夫」をしていく必要がある。

〈記入者 和泉 知子〉

主体的に学び合う子どもの育成

~子どもの「見方・考え方」を働かせる授業づくりの工夫を通して~

(3年計画の1年次)

校長 音 喜 多 勧

1 研究主題について

本校は、昨年度、「自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成」を研究主題とし、教科を4教科(国語・社会・算数・理科)に広げて、「話す・聞く」ことや「練り合い」を中心に、言語活動のさらなる充実を図りながら、次のような手立てを工夫した。

- ○基礎・基本のさらなる定着
- ○自分の考えたことを表現させる方法
- ○問題解決のための交流の場の設定 その成果として次のようなことが挙げられる。
- ・導入で、模型や図、写真や作品などを提示し、視覚的に捉えさせたことにより、主体的に問題解決 に取り組むことができるようになった。
- ・ペア・3~4人グループなど、授業のねらいに応じて話合いの場を多く設定することにより、関わり合うことへの抵抗感が少なくなり、活発に意見交換や学び合いができる児童が増えた。
- ・説明の仕方の見本や話型を提示し、繰り返し話す練習をさせたことで、説明する力がついてきた。 また、友達の意見に対して、聞いてそれを受けて自分の考えを話すこともできるようになった。 その一方で、友達の意見に対して、どの部分が大事なのか判断できない児童が多い。自分の考えと 比べたり友達の考えを理解しながら聞いたりする力は、さらに指導が必要である。また、自分の考え を組み立てて話すことが難しいため、今後も、話型の提示や提示されたキーワードを使って話すなど 繰り返し取り組んでいく必要がある。

そこで、前年度までの成果と課題を踏まえ、さらに基礎学力の向上を図りながら、話す力・聞く力、 伝え合う力をつけていくことが大切と考える。今年度は、国語科を中心に、課題提示や発問の工夫と 既習事項や教科の学習用語を使って、考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を働かせる授業づく りの工夫を実践することによって、基礎的な知識・技能が身に付き、「主体的に学び合う子ども」を育 成することができると考え、本研究主題を設定した。

2 研究のねらい

主体的に学び合う子どもを育成するために、導入から課題設定までの教師のはたらきかけや、考えの根拠となる「見方・考え方」を働かせる授業づくりを工夫することによって、児童の自ら考える力や表現する力が高まることを授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

課題提示の工夫と既習事項や教科の学習用語を使って、考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を働かせ、伝え合ったり話し合ったりする活動を工夫することにより、基礎的な知識・技能が身に付き、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

- (1)児童が主体的に問題解決に取り組むようにするための工夫
 - ア 必要感のある「問い」をもたせる手立て
 - ①課題提示の工夫(教材や発問等のしかけ)
 - ②発問・指示の吟味
- (2)児童同士が積極的に関わる学び合いができるようにするための工夫
 - ア 課題解決に向けての話合いの工夫
 - ①学習用語の定着と「見方・考え方」を鍛える
 - ②自分の考えを書いて話す
 - ③既習事項(用語、本文からの引用等)や経験を生かして話す
 - イ 振り返り・評価を生かした学びの工夫
 - ①振り返りの視点の明確化(学びの成果等)
 - ②振り返りの活用(変容から次の意欲につなげる、新しい問いを次時に活用)

- ③理由や根拠を明確にして説明する
- (3) 日常における「話す・聞く」力をつける実践の工夫
 - ア 何でも話せる雰囲気・土台づくりの実践
 - ①場の設定の工夫(各教科、朝の会や帰りの会、学級活動等)
 - ②話型の掲示
 - イ 語彙の量を増やすための日常の実践の工夫

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名	授業者・指導助言者	主な内容
7	5	第1回授業研究 3学年 国語 「仕事の工夫、 見つけたよ」	教諭 木村 佳憲	朝市に出店している人の仕事の工夫について、調べたことを報告する文章の組み立てを「人・時間・商品」というキーワードを使いながら付箋を用いて話し合わせた。文章の組み立てについてキーワードにそって分類していた。
11	29	第2回授業研究 6学年 国語 「『鳥獣戯画』を読む」	教諭 中村 真澄	6枚のセンテンスカードを2種類に 分類させ、「見方・考え方」を働かせる ようにした。1つの段落に絞り、評価あ りの文章と評価なしの文章を比較さ せ、評価が入っていることのよさに気 付かせていた。

(2)一般研修

月	日	内	容
6	28	AED 講習会	講 師:トスネット
8	21	絵の鑑賞会(描画指導法・絵の審査)	講 師:本校図工部
9	6	体育授業研修会	講師:本校校長 音喜多 勧
2	14	特別支援教育研修会授業公開	授業者:あおば学級担任 教諭 工藤 晶恵 なぎさ学級担任 講師 今村 直子

6 研究の成果

- (1) 導入で、センテンスカードの分類やキーワードを使って、項目ごとに分けた文例とそうでない文例を比較させるなど、提示の仕方を工夫することで、考えの根拠となる「見方・考え方」を働かせることができ、主体的に問題解決に取り組むことができるようになった。
- (2)ペアやグループなど、授業のねらいに応じて話合いの場を多く設定し、話合いが明確になるように視点やキーワード等を提示することにより、活発に意見交換や学び合いをできる児童が増えた。
- (3) 話合いの仕方などの話型を提示し、困ったときにそれを見て確認しながら話すことで、説明する力がついてきた。また、友達の意見を聞いてそれを受けて自分の考えを話すこともできるようになった。

7 研究の課題

- (1)前時の学習内容であっても、既習事項や経験したことを児童から引き出すのに時間がかかることが多い。課題提示であまり時間をかけないようにすると、その中で必要感をもたせることが難しいことがあった。そこで、前時の振り返りでさらに調べたいことや疑問を引き出したり、単元の初めに解決する必要感をもたせたりするしかけや発問の工夫等をしていく必要がある。
- (2)後の学習につながるような疑問や自分の考えの変容に迫るような振り返りが書けるように、キーワードや視点を与え具体的に指導してきたが、個人差が大きいといえる。課題解決に向けての話合いでは、自分の考えと比べたり友達の考えを理解しながら聞いたりする力は、さらに指導が必要である。また、自分の考えを組み立てて話すことが難しいため、今後も、話型の提示や提示されたキーワードを使って話すなど繰り返し取り組んでいく必要がある。

(記入者 中川 彩子)

主体的に学ぶ子どもの育成

―教師の働きかけの工夫を通して一(3年計画の1年次)

校長 三角 浩司

1 研究主題について

本校では、教育目標である「たくましく」心美しく」の具現化のために、「主体的に学ぶ子どもの育成」という主題で、全教科において研究を進めてきた。昨年度までの研究により、国語の授業では、「筆者の考えが書かれている文はいくつあるのか。」について導入場面で問いの共有ができる課題提示をした。算数の授業では、式や答えを予想させ、自分の立場を明確にさせたりすることで、主体的に解決へ向かうことができるように工夫した。また、自力解決ができるようにペア学習やグループ学習などの場を工夫することで、見通しをもって考える児童が増えるなどの成果が見られた。一方で主体的に解決へ向かう手立てとして、教師の働きかけの工夫が課題としてあげられた。

そこで、今年度は、問題解決的な学習を通して、児童が課題解決に向けて主体的に学ぶことができるように、意欲を高める課題提示や教材、発問の工夫だけでなく、展開場面でより主体的に取り組むことができるように、解決に向けた見通しや対話の場づくりなど教師の働きかけの工夫を充実させたい。児童に「あれ、どうしてかな。」から「答えを出したい。分かりたい。知りたい。」と思う課題意識をもたせる工夫や「何を学習したのか。」を明確にした振り返りを行わせることで、自らの学びについて客観的に捉え、次への問いにつなげることができると考える。

今年度の学校目標は、「よさを生かし、よく考えて取り組む子どもの育成」で、学びづくりの重点 施策は、子どもたちの確かな学力の向上(基礎・基本の内容の定着)である。児童が自ら考えたい、 調べてみたいと主体的に課題に取り組む授業を重ねることで学力の定着を図っていきたい。

2 研究のねらい

児童が自ら課題を見つけ、課題解決に向けて主体的に学ぶことができるようにするために、教材や発問等の「しかけ」による問いの共有や見通しのもたせ方、解決に向けた場の設定をどのように工夫すればよいか、問題解決的な授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

「あれ、どうしてかな。」から「答えを出したい。分かりたい。知りたい。」と思う課題意識をもたせる工夫や「どのようにすれば解決できるか」が明確になる見通しのもたせ方の工夫、子ども同士の考えをつなぐ教師の働きかけの工夫(ファシリテーション能力)を通して、主体的に学ぶ子どもを育成できる。

4 研究の内容

(1) 児童が問題を発見し、主体的に問題解決にむかうために教師のはたらきかけの工夫

(導入から課題設定まで)

- ・ 教材の工夫
- ・発問の工夫等
- * 「思考のズレ」がうまれるような問い→主体的に課題に関わる。
- =場のデザインスキル~場をつくり、つなげる~目的、終着点を明確にする。
- (2) 見通し、解決に向けた場の設定の工夫(見通し・追究・解決まで)
 - ・考えをつなぐ教師のはたらきかけの工夫(結果の見通し、方法の見通し)
 - =対人関係のスキル(つなぐ、うけとめ返す)課題解決の見通しをもたせる工夫
 - ・対話的活動(個・ペア・グループ・全体)など
 - =構造化のスキル~かみ合わせ、整理する~多様な視点から考える場の設定
 - ・「何を学習したのか」が明確になる振り返り

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	授業研究 全体会等
7	1 9	○第1回研究授業・協議(要請訪問 2学年 国語)授業者 教諭 三上 泉美
		題材名 「あったらいいな、こんなもの」
		助言者 八戸市教育委員会教育指導課 主任指導主事 中村 美穂 先生
		・「あったらいいな」と思うものについて、友達と質問し合う活動を通して、そ
		れぞれが考えた道具についてより詳しくすることができる。
9	2 7	○第2回研究授業・協議(3学年 算数)授業者 教諭 田名部 聡子
		題材名 「あまりのあるわり算」
		・問題場面のあまりの意味に着目し、あまりを切り上げて処理する問題を理解し、
		活用できる。
1 1	1	○第3回研究授業・協議(5学年 国語)授業者 教諭 向中野 也美
		題材名 「たずねびと」
		・爆弾によって引き起こされた状況を想像することを通して、その悲惨さを理解
		し、原爆に対する自分の考えを書くことができる。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師 等	
5	2 4	・特別支援教育(自立活動授業解説、個別の支援計画作成のしかた) 教諭 淡路 美樹子(青潮小学校 さくら学級担任)	
6	2 1	・体育実技講習 八戸市教育委員会 教育指導課 主任指導主事 竹井 亮 先生	
8	2 3	・1人1台端末活用研修会①(授業の中での実践例発表) 「教材テストを使っての基礎基本の習熟」など 教諭 菅原 夕紀子 「スライドづくり演習」 教諭 坂本 健一 「ドリル教材のQRコードを使った基礎基本の習熟」 教諭 粟津 宏治 「導入や振り返りにおける Google form の活用・実践」 教諭 中川原 泰文	
1 1	2 9	・心のケア支援事業「気になる子への支援と対応」 講師 八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 教授 野口 和也 先生	
1	3 1	・1人1台端末活用研修会②(授業の中での実践例発表) 「教育関係アプリの活用」(カフート、キャンバ、フリップ、パドレット) 教諭 中川原 泰文	

6 研究の成果

- (1) ・「しかけ」により芽生えた問いや必要感を、問い返しによる焦点化、立場の表明による視覚化を行うことで、児童共通のめあてへと高めることができた。
 - ・ゴールまでの見通しを提示することで意欲的に問題解決に向かうことができた。
- (2) ・「何を話し合うのか」を明確にしてペアでの活動を行うことで、活発な対話的活動ができた。
 - ・課題解決に向けた話合いを重ねることで、まとめや振り返りを行うことができるようになってきた。

7 研究の課題

- (1)・明確な意図をもって立場の表明や導入の「しかけ」を行うために一層の教材研究が必要である。 (発問の吟味、資料提示のタイミング、誤答の提示など解決したい課題に合わせたものにする。)
- (2) ・問い返したり、意見を分類・整理したりするなど働きかけを工夫することや思考の変容を視覚化することで、「分かった、できた、身に付いた」を実感できる振り返りをする必要がある。 (記入者 中川原 泰文)

主体的に学び、自分の考えを表現できる子の育成

~導入から課題設定までのはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫~

(3年計画の2年次)

校長 本宮 共子

1 研究主題について

(1)教育目標具現化の立場から

本校では「たくましく心豊かな子」を教育目標に、「明るく思いやりのある子、すすんで学ぶ子、健康にくらす子」を努力目標に掲げ、教育活動を展開している。その中で校内研究が特に担う役割は「すすんで学ぶ子」の育成である。学習をする上での基礎的な学習ルールを徹底させ、児童一人一人の学びの場である授業において、主体的に学ぶ態度を身に付けさせ、自分の考えをもち、考えを伝え合うことで、よりよい解決につながることが確かな学力を保証し、教育目標である「たくましく心豊かな子」の育成に寄与すると考える。

全ての児童が主体的に学び、自分の考えを表現することができるようにさせるためには、教師のはたらきかけと 工夫が必要である。児童一人一人が「わかった!できた!身についた!」と実感でき、主体的に学習に参加することが、学校目標にせまっていくことができるものと考え、研究主題を設定した。

(2) 児童の実態とこれまでの研究経過から

本校の実態として、授業への集中を欠きやすく、学習課題の見通しがもてない児童が多い。また、基礎・基本の習得や授業中の課題の解決にも不安な児童が多い。そこで昨年度は、見通しをもって主体的に学ぶために、「導入から課題設定までのはたらきかけの工夫」に重点を置き、教師の発問や課題提示などのはたらきかけから「思考のずれ」を生じさせ、児童に「おや」「どうしてだろう」という問いの意識をもたせることで、課題を自分事として捉え、自力解決しようとする姿が見られるようになってきた。また、1人1台端末や挙手、ネームプレートなどを使って児童全員が参加する場面を意図的に取り入れ、児童の考えを視覚化し立場の表明をすることで、問題解決へ取り組もうとする児童が見られるようになった。

しかし、伝え合う活動では、グループやペアで取り組んできたものの、児童同士の話合いは少なく、発言する児童に偏りが見られた。また、自分の考えを表現することへ苦手意識をもっている児童が多いことも分かった。そこで今年度は、導入から課題設定までのはたらきかけの工夫を継続しつつ、さらに児童が意欲的に自分の考えを表現したり話し合ったりすることができるように、「児童が効果的に自分の考えを表現できるような手立てや方法の工夫」に重点を置くことにする。児童全員が主体的に授業に取り組み、学ぶことができるように実践していきたい。児童が主体的に自分の考えをもち、表現したり伝え合ったりすることで、学習への意欲が持続し、課題を自分事として捉え、学びを深めていくことができると考える。

2 研究のねらい

授業の導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫と考えを伝え合う指導の工夫をすることで、主体的に学び、自分の考えを表現できる子が育成できることを、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

授業の導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫をすることにより、全児童の問いの意識を高め、見通しをもたせると共に、学習課題を自分事として捉えさせ、その考えを伝え合わせることで、主体的に学び、自分の考えを表現できる子どもが育成できるのではないか。

- (1)授業づくりにおける導入から課題設定の場面で、子どもたちが見通しをもって取り組めるように「思考のずれ」などの手立てや方法を工夫する。
- (2) 児童が効果的に自分の考えを伝え合うことができるような手立てや工夫をする。
 - (ア)様々な手立てや方法を取り入れることで、見通しをもたせた主体的な伝え合い活動を促す。
 - (イ) 日常的に伝え合い活動を取り入れることで、主体的な伝え合い活動の基盤をつくる。

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

7,72						
月	日	学年・授業者・題材名 等				
5	31	公開授業 (5学年) 授業者 教諭 大庭 菜摘 題材名 算数「小数のかけ算」				
7	14	教育指導課訪問(計画訪問)全学級授業				
		第1回授業研究(要請訪問)·初任者研修実地研修「他校種研修」				
		3年1組 授業者 教諭 川村 貴子 題材名 算数「ぼうグラフを使って」				
		指導助言 総合教育センター副所長兼主任指導主事 松橋 祐哉 氏				
9	6	第2回授業研究				
		6年1組 授業者 教諭 淡路 衣津季 題材名 算数「比とその利用」				
10	31	公開授業 (5学年) 授業者 教諭 川畑 徹大 題材名 理科「もののとけ方」				
11	15	小・中ジョイントスクール授業公開(白銀小)				
12	15	公開授業(2学年)授業者 教諭 古川 裕子 題材名 国語「にたいみのことば」				
12	19	公開授業 (4学年) 授業者 教諭 須藤 達也 題材名 体育「キャッチバレーボール」				
12	20	公開授業 (1学年) 授業者 教諭 小野 素子				
		題材名 国語「ききたいな、ともだちのはなし」				

(2) 一般研修

月	日	研修の内容		
4	27	個別の指導計画の作成について、校内における配慮を要する児童の共通理解 教諭 荒谷 正博		
		生徒指導提要についての研修 教諭 淡路 衣津季		
		保健室の利用等についての研修 教諭 久保澤 麻衣子		
5	24	小・中ジョイントスクール全体会		
7	21	救命救急・AED講習会		
8	22	いじめに関する研修		
8	30	県学力学習状況調査 学力分析の研修		
11	2	心のケア研修支援事業 講師 八戸学院大学短期大学部 教授 野口 和也氏		
1	10	特別支援についての研修		
		講師 さくら学級 教諭 荒谷 正博・野里 安紀・野月 陽子・藤井 肇子		
2	21	研修等報告会 発表者 淡路 衣津季、大庭 菜摘		

6 研究の成果

- (1) 導入から課題設定の場面では、本校の児童の実態に合った「思考のずれ」を生じさせ、「立場の表明」を視覚化することで、問いの意識をもたせることができた。課題を自分事として捉え、自力解決しようとする姿が見られた。
- (2) 自分に自信がなく、自分たちの言葉で説明したり、話合うことに抵抗があったりする児童がいるため、今年度は研究内容(2) に重点を置いて取り組んだ。「伝え合い」の土台作りについて共通理解を図り、授業や日々の活動の中に取り入れることで、「伝えることが楽しい」「教えてもらって分かった」という思いを高めるようにした。ペアやグループ活動、1人1台端末を活用した取組など、児童が自分の思いや考えを伝え合う時間を増やし、工夫することで、少しずつ自分たちの考えを伝えられるようになってきた。

7 研究の課題

まだ、課題を自分事として捉えることができず、授業へ主体的に取り組めない児童もいる。そのような児童も授業の居場所ができるように、本校の児童にあった「思考のずれ」の教材研究を今後もしていく必要がある。また、次年度は研究3年目として更に「伝え合い活動」に重点を置き、一人一人が意欲的に自分の考えをもち、説明したり話し合ったりできる効果的な伝え合い活動の工夫を取り入れていく。教師の働きかけにより、児童の思考が深まるような問題解決学習に取り組んでいきたい。

(記入者 大庭 菜摘)

探究心をもって主体的に学ぶ子の育成

~子どもが解決したくなる、聞きたくなる働きかけの工夫を通して~(3年計画の1年次)

校長 古川 祐行

1 研究主題について

(1) 学校教育目標具現化のために

本校では、「生き生きした子」を教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、その具現化のための取組を続けている。教育目標を具現化するためには、県教育委員会の学校教育指導の方針と重点にあるように、「一人一人の子どもが、各教科及び総合的な学習の時間等において、確かな学力を身に付けることができるよう、目指す資質・能力を明確にするとともに、言語活動の充実を図りながら、一人一人の能力・適性に応じた指導と学習習慣の育成に努めること」が大切であると考える。また、子どもが解決したくなる学習課題の設定や「聞き方」「話し方」を意識させた話合い活動を工夫することは、生き生きと学習に向かう子の育成につながり、本校で目指す児童像の実現に迫ることができると考える。

(2) 児童の実態から

昨年度は、児童の思考に「ずれ」を生じさせることにより「問い」を生むことができた。また、 観点をもった話合いや意図的なペア・グループ学習を取り入れたことにより、話したいという意欲 が向上し、ねばり強く課題に取り組む態度も育成された。

その一方で、「問い」をもたせるしかけづくりは児童の発達段階や理解度に応じて吟味する必要があること、対話の力を育成させるには、まず「聞く力」の育成が必要であることが、課題として 挙げられた。

そこで、今年度は研究主題を「探究心をもって主体的に学ぶ子の育成」、副題を「子どもが解決したくなる、聞きたくなる働きかけの工夫を通して」とし、導入から課題設定までの工夫、そして話合い活動の中でも、特に「聞く力」の育成に重点をおいて研究を進めていく。前年度まで積み重ねてきた内容を継続しながらも、自分の力で問題を解決してみよう、友達の考えを聞いてみようとする態度の育成を図ることは、探究心をもって主体的に学ぶ子の育成につながると考える。

(3)「探究心をもって主体的に学ぶ」とは

「探究心をもって」とは、自分が疑問に思う物事について、進んで調べたり深く掘り下げたりし、問題を解決しようとすることである。そのために、自分自身で解決してみたいと思わせるような課題設定の工夫と「聞く力」の育成に重点をおく。特に、昨年度課題として出ていた「聞く力」については、積極的に聞こうとする態度や聞き方のスキルを育てていきたい。話し手が一方的に話すのではなく、聞き手側の反応やつぶやき、感想や意見があることで、初めて対話的な学びが成立すると思われる。各学級に掲示し指導している「聞き方名人」にある態度面に加え、内容を理解して聞くことができたかについても確認しながら進めていく。

2 研究のねらい

探究心をもって主体的に学ぶ子を育成するために、子どもが解決したくなる課題提示の工夫や話合い活動においての「聞く力」を育てるための工夫はどうあればよいか、算数科の授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

子どもが解決したくなる、聞きたくなる働きかけを工夫することにより、探究心をもって主体的に学ぶ子を育成することができる。

4 研究内容

(1) 導入から課題設定までの働きかけの工夫

- ア 児童の思考にずれを生じさせる課題提示の工夫
- イ 発問の仕方、内容、タイミング等の工夫
- ウ 問題解決意欲を喚起・持続させるための立場の相違や変容を可視化・顕在化する場の設定

(2) 「聞く力」を向上させるための手立ての工夫

- ア 「聞き方名人」を活用し、反応しながら聞く指導の継続
- イ 振り返りの工夫(聞き方・理解度について自己評価、感想の記述)

(1) 研究の仮説に基づく授業研究

月	日		学年・授業者・題材名
11	15	授業研究(5学年)	題材名 平均とその利用
		授業者 後藤 博美	指導助言 総合教育センター 小向 一樹 主任指導主事

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等	
7	14	クロムブック活用研修「授業で使える一人一台端末の活用」	
		講師:吉田 悟(本校教頭)	
8	22	AED活用研修「AED活用・熱中症対策・応急処置」	
		講師: 丸谷 彩(本校養護教諭)	

6 研究の成果

- (1) 児童の思考にずれを生じさせる課題提示の仕方を工夫することで、児童に問いの意識をもたせることができた。
- (2) 発問時には、教師主導ではなく、児童のつぶやきや言葉をできるだけ拾うことにより、学習意欲をもたせることができた。
- (3) ネームプレート・挙手等を活用して立場の相違や変容の可視化・顕在化をすることで、課題を自分事としてとらえることができた。また、授業への参加意識も高まると同時にしっかりと聞こうとする態度の育成にもつながった。
- (4) 「聞き方名人」を活用して聞く力の育成に重点をおいて指導したところ、聞く態度がよくなってきた。また、聞いた内容を復唱させることで内容の理解度も上がってきた。
- (5) 日頃から振り返りの場を設けることにより、自分と友達の考えを比べながら聞くことが増えた。また、自分の頑張りや考えの変容にも気付くようになってきた。
- (6) 分からない時には意思表示をし、どうにかして理解しようとする児童が増えてきた。

7 研究の課題

- (1) 児童の思考にずれを生じさせる課題提示では、難しすぎると学習意欲が低下するので、児童の実態をよく考えて焦点化を図るなどして提示する必要がある。
- (2) 算数の授業において立場の表明をすることは、誤答を選んだ児童が明らかになることがある。よって、誤答児童への配慮が必要である。また、正答・誤答の2択だけで立場の表明をさせることが難しいことがあるので、複数解のある問題提示や解き方について、立場の表明をさせることにも取り組む必要がある。
- (3)全体的に聞く力は向上しているものの、反応しながら聞くことや目的意識をもって聞くことなどはまだ十分とは言えない。今後も、繰り返し指導を進めていく必要がある。
- (4) 話すことに自信がない児童、順序立てて自分の考えを説明することが苦手な児童がいる。 今後は、話す力の育成を進めていく必要がある。

(記入者 伊藤 有紀子)

白銀南小

「わかった!できた!役立った!」が実感できる授業づくり

~問題解決的な学習の授業実践を通して~

(3年計画の2年次)

校長 髙山 一雄

1 研究主題について

本校の児童は、明るく素直で、与えられた課題に対してまじめに取り組む。しかし、自分の力を高めようと意欲をもって自ら進んで学習に取り組むという点では、消極的な態度が見られる。このような実態から、本校では、教育目標として「豊かな心をもち、主体的に活動する子」、努力目標として「進んで学習する子」を掲げ、自ら課題を見つけ、問題解決に向けて意欲的に取り組む児童の育成を目指している。

校内研究では、令和元年度から令和3年度にかけては、児童がより主体的に学習に取り組み、思考力・判断力・表現力を伸ばしていくことを目標に、国語科における「問題解決的な学習」を軸として、研究を進めてきた。令和4年度には、研究主題を一新し、「問いをもたせる学習課題の設定」と「話合い活動の充実」の2つの取組を継続的に検証しつつ、「学習を振り返り、学ぶ意欲を高める」という取組についての研究も行った。その結果、授業において児童が問いをもって学び、自分の意見を伝えようとする意欲の向上をはじめ、様々な成果が得られた。しかし、有効な話合いや振り返りを児童にさせるための手立てが十分ではないことや、能力の個人差からくる学習意欲の差の扱いなど、課題も多く見られた。そのため、今年度は昨年度の研究をさらに深めることを目指し、「友達の意見につなげて、自分の考えを発信すること」「自分の考えと友達の考えを比較しながら意見を深めるような話合いを行うこと」「問いに対する振り返りをもとに、正解にとらわれない多面的な振り返りを行うこと」などによって、児童の学ぶ意欲を高められると考え、本研究主題を設定した。

2 研究のねらい

問題解決に向けて意欲的に取り組むための効果的な指導のあり方を、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

- (1) 児童一人一人に問いをもたせる学習課題を設定し、話合い活動を充実させることによって児童が問題解決に向かうことができる。
- (2) 「わかった!できた!役立った!」が実感できる振り返りを充実させることによって、児童の学ぶ意欲を高めることができる。

- (1) 学習課題の工夫(一人一人に問いをもたせる課題設定・提示の仕方)
- (2) 課題解決に向けての話合いの工夫
- (3) 振り返りを生かした学びの工夫(変容を見取り、次の学びに生かす)

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等	全体会等
6	2 1	第1回授業研究 5年2組 授業者 教諭 伊藤 遥佳	研究協議会(グループ・全体会)
1 1	1	第2回授業研究 4年2組 授業者 講師 平葭 寿樹	研究協議会 (グループ・全体会)
1 1	1 4	小・中学校ジョイントスクール推進事業 (白銀南小学校で授業を実施)	分科会・全体会 (学習・生活・行事・特別支援)
		総合教育センター 計画訪問	分科会 (授業の教科ごと)
1 1	28	第3回授業研究(要請訪問) 1年2組 授業者 教諭 石木田 美保子	研究協議会(グループ・全体会)

(2) 一般研修

月	日	内容等	講師等
5	2 4	Chromebook の活用方法	講師:佐藤元 (教務部視聴覚担当)
6	9	幼保小連携 1 学年授業公開	授業者:1学年担任 特別支援学級担任
8	2 3	AED救急法	講 師:小野 梨花子 (養護教諭)
9	2 7	体育科における学習指導	講師:大坂幸(教科部体育担当)
1	3 1	特別支援教育・授業参観	授業者:特別支援学級担任
2	6	幼保小連携 1・2学年授業公開	授業者: 低学年担任

6 研究の成果

- (1) 学習課題を明確に示したり、絵や図を用いて教材提示の仕方を工夫したりすることによって、本時に取り組む内容を焦点化するとともに児童の学習意欲を向上させることができた。
- (2) 絵や図を取り入れたワークシートを利用したり、異なる立場を示した児童同士で話し合わせたりすることによって、多様な意見を認め合う活発な話合いをさせることができた。
- (3) 児童の意見の変容を視覚化したり、振り返る事項を明確に示したりすることによって、次時の学びへとつながるような具体的な振り返りをさせることができた。

7 研究の課題

- (1) 立場表明をする際、「立場」の内容が曖昧であったために、混乱する児童や立場表明を正確に行えない児童がいた。また、「切実感」のある問いについては、研修を深める必要がある。
- (2) 話合いを行う中で、何を話し合うのか、何を書けばよいのかなどについて児童が混乱することがあった。話し合う内容やまとめ方について、より明確に示す必要がある
- (3) 学習の振り返りを行う際、「友達との関わり」と「学習の過程」の二点について振り返る児童が少ない。問題解決に至った過程を可視化するなど、さらに手立てを改善する必要がある。 (記入者 佐藤 元)

主体的に学び合う子どもの育成

~ 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を目指して~

(3年計画の2年次)

校長 後藤 浩

1 研究主題について

本校では、教育目標の「心豊かにたくましく」及び努力目標の「すすんで学ぶ」を受け、「自分の考えを表現できる子」を目指す児童像として教育活動を展開している。昨年度から研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」とし、児童が主体的に取り組む課題設定の工夫と学びを広げ深める手立ての工夫について国語科の説明文を中心に据えて研究を進めてきた。

本校の児童の学力は二極化傾向にあるため、まずは、どの児童も授業に参加できる「授業での居場所づくり」を目指した。授業の導入部では、児童から疑問を引き出すように教材提示の仕方を工夫し、選択肢を設けて児童が立場を選択できるようにしたことで、多くの児童が自分の考えをもって授業に参加することができるようになった。また、選択した立場を赤白帽子やネームプレート、タブレット端末等を用いて可視化し、お互いの立場の違いを明確にすることで追究意欲を増幅させることができた。その後、児童は自分の立場に基づく根拠や理由を表現するための活動に取り組み、意見交流を通じて自分の考えを広げたり深めたりすることを目指したが、一部の活発な児童の発表で授業が進んでしまうことが多かった。

そこで、3年計画の2年次として、今年度も国語科の学習を中心に据え、立場の可視化を生かした意見交流の 方法を追究した。友達の考えとの共感や比較から自分の考えが広がったり深まったりしたことを表現させること で、学力の定着につなげたいと考えた。

2 研究のねらい

「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を目指し、主体的に学び合う子どもを育成するための国語科の指導の在り方を明らかにする。

3 研究仮説

児童が主体的に取り組む課題設定の工夫、協働的に解決する場面にて学びを広げ深める手立ての工夫を行うことで、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

- (1) 児童が主体的に取り組む課題設定の工夫
 - ア 教材提示や発問等の働きかけ
 - イ 自分の考えや立場の可視化
- (2) 学びを広げ深める手立ての工夫
 - ア 立場の可視化を生かした意見交流の方法

(1) 研究仮説に基づく研究授業等

月	日	学年・授業提案者(報告者)・題材名・講師
6	20	第1回授業研究(2学年) 授業者:長瀬 さおり 国語「どうぶつえんのじゅうい」
		講師:八戸市立吹上小学校 教頭 福田 秀貴氏
11	21	第2回授業研究(5学年) 授業者:和泉 範子 国語「たずねびと」
		講師:八戸市立長者小学校 教頭 上柿 尊志氏

(2)一般研修

月	日	内容・講師		
4	19	「エピペン対応講習会」		
		講師: 本校養護教諭 佐藤 春花		
6	7	「ICT 講習会」		
		講師:本校教諭 乙山 竜太郎		
7	12	「救命救急講習会」		
		講師:八戸市東消防署署員		
8	21	「図画工作講習会」		
		講師:本校教諭 三浦 真弓		
2	21	「特別活動講習会」		
		講師:本校教頭 舘 朋美		

6 研究の成果

- (1) 授業の導入において、ずれや疑問が生じるように教材を提示し、立場をネームプレートや1人1台端末を 用いて選択して表明させたり、スケーリングに表明させたりして可視化したことで、根拠や理由を表現し ようと主体的に課題解決に向かう姿が多く見られた。
- (2) 同じ立場同士で考えを伝え合う中で根拠や理由が広がり、異なる立場の相手に自分の意見を伝えることに自信をもつことができて効果的だった。
- (3) 展開部分において、考えを変えた児童や変えなかった児童に理由を問い、発言を促すことは、児童の学びを深めることに効果的だった。振り返りにおいても、自分の変容を振り返る児童が増えた。

7 研究の課題

- (1) 立場の可視化は児童の課題解決意欲を高める方法となったが、根拠や理由を表現するための手立てを必要とする児童もいる。より多くの児童が意見交流に参加できるように、つまずきに対する手立てを充実させるとともに、教育活動全体を通じて児童の話す機会を増やし、伝えることを躊躇しない支持的な学級の風土づくりを通して、伝え合う力の向上を図る必要がある。
- (2) 教師がファシリテーターとして児童の考えをつないだり、掘り下げたり、ゆさぶったりして意見を交流させ、授業のねらいが達成されるように、各教科や領域へと研究の幅を広げて今後もスキルアップを図っていく必要がある。

(記入者 髙谷 園江)

関わり合いながら、ともに成長する子どもの育成

~特別支援教育の充実と改善を通して~

(2年計画の2年次)

校長 鈴 木 規 夫

1 研究主題について

本校は、「明るく思いやりのある子」「めあてをもって学ぶ子」「健康でたくましい子」を教育目標に掲げ、徳・知・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成のため、「心の教育」を基盤とし、個を生かしながら「生きる力」の育成を推進してきた。

昨年度は、「かかわり合いながら、学びを深める子どもの育成」という研究主題で、国語科における授業構成の工夫や思考を伴う言語活動の充実について取り組んだ。児童が見通しをもって問題解決に取り組んだり、伝え合う場面での言語活動の充実が見られたりという成果が見られた。しかし、児童の中には、学びに参加できずに学習意欲をもてないまま過ごしている子どもや、個別の支援や配慮が必要な子どもが多くいるのが現状である。

そこで、今年度は、誰にでも分かりやすい授業づくりを実践していくために、教科を絞らずに、特別支援教育の視点を生かした授業のあり方について研究を深めていくこととした。また、個別の支援を必要とする児童の実態が多様であるため、全体でのケース会議を行い、事例研究をすることで、児童一人一人の特性に応じた支援について理解し、日常の実践に役立てていきたいと考える。個別の指導計画については、作成するだけではなく、それを生かした実践や改善などが行えるように、進め方について話し合い、共通理解していく。このような研究を通して、関わり合いながら、ともに成長する子どもを育成していきたい。

2 研究のねらい

関わり合いながら、ともに成長する子どもの育成を目指して、特別支援教育の視点を生かした授業のあり方や通常学級における特別な支援を必要とする児童への配慮と工夫について、実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

誰にでも分かりやすい授業づくりや、通常学級における特別な支援を必要とする児童についての事例研究及び個別の指導計画作成の進め方について考え実践することで、関わり合いながら、ともに成長する子どもを育成することができると考える。

- (1) 特別支援教育の視点を生かした授業のあり方ア 誰にでも分かりやすい授業について
- (2) 通常学級における特別な支援を必要とする児童への配慮と工夫
 - ア 事例研究(情報の共有を含む)
 - イ 個別の指導計画作成の進め方

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	研究内容等	
		第1回授業研究(上学年ブロック)	
9	2.0	算数「立体の体積」 6年2組 授業者 佐井 渓生	
9	2 0	講師 八戸市こども支援センター	
		上澤 司 特別支援教育アドバイザー	
	1 2 2	第2回授業研究(下学年ブロック)	
1 1		算数「三角形と四角形」 2年1組 授業者 小杉 宙裕	
		講師 八戸市こども支援センター	
		上澤 司 特別支援教育アドバイザー	

(2) 一般研修

月	日	内容・講師等
4	1 9	健康上・指導上留意を必要とする児童についての研修 ・エピペンの使い方 ・児童との関わり方、配慮することなどについての共通理解
6	7 ケース会議 「支援を必要とする児童についての研修」	
6	2 8	ストレス解消法・リラクゼーションについての研修 講師: 塚尾 沙貴 理学療法士
7	5	救命救急法 「AED、肋骨圧迫法、人工呼吸法」 講師:八戸東消防署 鮫分署の方々 (2名)
9	6	情緒的に安定しない児童についての研修 講師:八戸市こども支援センター 川野輪 美穂 指導主事

6 研究の成果

- (1)誰にでも分かりやすい授業づくりについて研修し、日常の実践に生かすことで、課題解決に向かう児童の意欲につなげることができた。
- (2)個に応じた手立てと全体への手立てを考えて授業を行うことで、関わり合いながら 学ぼうとする児童の態度を育てることができた。
- (3) 通常学級における特別な支援を必要とする児童についてのケース会議を全体で行うことで、児童の特性に応じた支援方法について学び、実践することができた。

7 研究の課題

- (1)児童が関わり合いながら共に成長するために、上位の児童が自力で課題解決できるような授業づくりも考えていく必要がある。
- (2) 学んだことを忘れずに学習に生かすことができるように、基礎・基本の定着を図る必要がある。

(記入者 小山 ゆかり)

"全員参加"で学びを深める子供の育成

~複式学習において問いを生む授業づくり(国語科)~

(3年計画の1年次)

校長 寺 口 朋 男

1 研究主題について

教育目標「自ら学ぶたくましい子」の具現化のためには、身に付けた知識及び技能を活用し、自ら考え表現し合いながら主体的に学ぶことのできる資質や能力の育成が重要であると考える。これを受け、昨年度は複式学習において主体的・協働的に学びを深め合う授業づくりについて、算数科をパイロット教科に据え研究を進めた。効果的な学習指示の在り方を工夫するとともに、ガイドを中心とした学びを進める授業づくりに努めたことにより、間接指導場面において、主体的・協働的な学びが見られるようになってきた。また、間接指導場面における児童の学びの状況を把握するための工夫や同時間接指導を意図的に設定し俯瞰して学習状況を把握したことにより、思考が途切れることなく学びを継続させることにつながった。一方、算数科においては問いを生む工夫や児童の思考をつなげるための手立てを日常的に行うことができるようになってきたものの、他教科においてはまだ十分とは言えない。また、間接指導場面において児童がガイドを中心に考えを出し合い比べ合う力は身に付いてきたが、お互いの発言に対する解釈の度合いが不十分であることから学びが深まらない点が課題として挙げられた。

そこで今年度は、算数科の指導で取り組んできた「問いを生む工夫」や「学びの継続」を国語科に広げて、問題解決への必要感・切実感を高め、間接指導場面に入ってからも解決への意欲が継続される導入(直接指導)の在り方について研究する。また、話合いの中でお互いの考えを解釈し合い、学びを深める授業づくりについて研究を進める。少人数でも"全員参加"で生き生きと学ぶ児童の姿を生む授業づくりについて、授業実践を通して明らかにしていきたい。

2 研究のねらい

複式学習において、主体的・協働的に学びを深める子供を育てるために、効果的な指導法を国語 科の実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

複式学習において問いを生む授業づくりを日常化することにより、主体的・協働的に学びを深め合う力を高めることができると考える。

- (1)授業の導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけ
 - ア 問いを生む工夫(思考のズレを生じさせるしかけ)
 - イ 児童の思考の文脈に沿った課題設定(立場の相違の顕在化、問いの明確化・焦点化)
 - ウ 間接指導場面の学びの状況把握
- (2)考えを深め合う話合いの在り方
 - ア 分かりやすく説明しようとする意識・態度(根拠を明確にした説明、確かめながら説明)
 - イ 解釈の活動場面の設定(ある児童の考え方を他の児童が説明)

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容・学年・題材名・授業者			
6	2 8	3年「こそあど言葉を使いこなそう」4年「新聞を作ろう」	授業者	山内	温子
7	1 8	教育指導課・総合教育センター訪問			
9	1 1	1年「うみのかくれんぼ」2年「どうぶつ園のじゅうい」	授業者	小林美	 秦子
1 1	1	5年「たずねびと」6年「やまなし」	授業者	野里	貴広
1 1	1 5	南浜中学校区小・中ジョイントスクール推進事業			

(2)一般研修

月	日	内 容 ・ 講 師 等
4	3	非違行為根絶のための研修 講師 教頭 山口将貴
5	3 1	種差地域学習素材に関する研修
		講師 種差海岸観光協会会長 柳沢卓美氏
6	7	救命法 講師 八戸東消防署 鮫分署 職員
6	1 3	三八管内複式担当者研修会 階上町立階上小学校
8	3 0	県学力調査採点及びNRT分析結果についての考察と対策
1 0	2 5	道徳授業参観ウィーク

6 研究の成果

- (1)本時のねらいに近づくためのきっかけとなるしかけを意図的に行った。思考のズレを生じさせる工夫を講じたことにより、課題を解決したいという意欲を高める(=問いを生む)ことができた。
- (2)同時間接や同時直接指導場面の意図的な設定により、俯瞰して両学年の学習状況を把握できたとともに、児童自身も学習の深まりを実感していた。また、活動内容の明示等の工夫により、児童が自分たちで学びを継続しようとする意識と技能が育ちつつある。

7 研究の課題

- (1)問いを生む授業づくりにより、自分たちで学びを進めようとする児童の力が伸びつつある。今後は、単元を絞って教材のねらいを明確にすることにより、深い学びを実現するための効果的な学習活動について協働的に研究を進めたい。
- (2)少人数で親和的な関係であるがゆえに、明確な意見交換がないままに何となく話合いが成立してしまうような場面が見られた。考えを深め合うためのよりよい話合いの仕方についてさらに研究を深めたい。

(記入者 小林美奈子)

大久喜小

主体的に問題解決に取り組み、伝え合う子どもの育成

~子どもが本気で話したくなる算数科の授業づくりを通して~

(3年計画の2年次)

校長 髙 橋 将 樹

1 研究主題について

(1) 教育目標の具現化のために

本校では、教育目標に「夢に向かいたくましく生きる大久喜の子」、努力目標に「進んで勉強する子」を掲げ、夢や希望をもち、進んで学習する児童の育成を目指している。

その具現化に向けて、算数科の授業を中心に、「本気で問題解決に取り組み、お互いの考えを伝え学び合う姿」を目指す児童像として掲げた。気付きを生かして課題をとらえ、考えや立場の相違を可視化しながら自力解決していく意欲をもたせて、問題を解決していくことによって本主題に迫ることができるのではないかと考え研究を進めてきた。

(2) これまでの研究経過から

本校児童は、少人数の複式での学習において、自分から問題にかかわったり、考えを伝え合ったりする力が弱い傾向にある。そこで、本気で問題を解決したくなるような課題との出会わせ方や自己決定の場面を工夫したり、考えや立場の相違を可視化したりすることで、主体的に問題解決に取り組み、少人数の良さを生かした「伝え合い」が実現するのではないかと考え、算数科を中心に実践を積み重ねてきた。

成果として、次の点が挙げられた。

ア 課題との出会わせ方、導入の工夫、発問の仕方や問い返し等、支援の仕方を工夫し、子ども たちが本気になる場面が増えてきた。

イ 「比べる」「選ぶ」「順番をつける」等、展開を工夫することで、子どもたちが授業に参加し やすくなったり、考えを検証したりしていく流れで授業を進めることができた。

ウ 考えを交流する場を授業の中に位置づけて、日常的に取り組むことができた。

一方で、次のような課題が浮かび上がった。

ア 児童が解きたい、話したいと思うような課題の設定や授業構成を工夫することで、あえて 「場」を設定しなくても、伝えたくなるような本気度を高めていく必要がある。

イ 考えに根拠をもたせ、いろいろな意見を柔軟に取り入れていく力を育てていく必要がある。

そこで、本気で問題を解決したくなるような課題との出会わせ方や自己決定の場面を工夫したり、 考えや立場の相違を可視化したりすることで、主体的に問題解決に取り組み、少人数の良さを生か した「伝え合い」が実現するのではないかと考えた。

2 研究のねらい

主体的に問題解決に取り組み、伝え合う力を育てるための効果的な学習指導の在り方を、算数科の授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

算数科の学習指導において

- (1) 本気で問題を解決したくなるような課題との出会わせ方やしかけ、自己決定の場面を工夫する。
- (2) 伝え合う場面を中心とした間接指導の在り方を工夫する。

4 研究内容

(1) 課題との出会わせ方やしかけと自己決定の場面の工夫

ア 子どもが解きたい、話したいと思うような課題設定やしかけの工夫

イ 自己決定の場面(見通しをもつ、見当をつける、アイテムの選択)

(2) 複式の指導過程や学習形態の工夫

ア 少人数の良さを生かした「伝え合い」や間接指導での主体的な学び

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日日	学年・単元名・授業者	成果
7	10	5・6年	< 5 年生>
			○スタートスイッチで課題把握ができていた。そこか
		6年 円のおよその面積	ら既習を想起し、五角形を三角形に分けるとよさそ
			うだと解決の見通しをもって自力解決に取り組んだ。
		授業者:千葉 美樹子 教諭	⇒自力解決でどのように三角形に分けたらよいか戸惑
		1 3 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	っている児童がいた。多角形の内角がどこなのか図
			で示して確認すると更によかった。
			<6年生>
			○ガイドを中心に課題把握をして、めあてを立てたり
			解決方法を自己決定したりして、自分で決めた面積
			の求め方で解こうと主体的に課題解決に取り組めた。
9	8	1・2年	<1年生>
		1年 なんじなんじはん	○ 大久喜小の生活場面に合った課題設定により、児童
		2年 たし算とひき算のひっ	が興味をもって課題に取り組むことができた。間接
		算	指導では、次の活動を示すなどの工夫をするとよい。
			⇒長針と短針の確認や時間をみて生活する経験をさせ
		授業者:花田 恵 教諭	る必要がある。ペアなど児童の交流場面を設定する
			と話合いの活動が深まる。
			< 2 年生>
			○前時との違いに気付かせてめあてや見通しをもたせ、
			数え棒で思考を整理して解かせることができた。
11	22	3・4年	< 3年生>
		3年 式と計算	○ スタートスイッチで、別々に考えたりまとめて考え
		4年 小数のかけ算やわり算	たりする2通りの解き方があることに気付かせた。
			児童は2つの方法で解いたが、考えを比べたり話し
		授業者:竹下 豊一 教諭	合ったりさせると更によかった。
			< 4年生>
			○既習から小数・整数の立式に結び付け、図をかくと
			解けそうだという見通しをもたせて自力解決させた。
			⇒ガイドを中心に課題把握や話合いをさせたり、ペア
			での話合いから全体での話合いへと広げたりすると
			主体的な伝え合いができる。

(2)一般研修

	(4)	川又印				
	月	П	内容・講師			
Ī	4	26	1人1台端末におけるNetモラルやeライブラリーの活用について			
			講師 大久喜小学校 教諭 竹下 豊一 先生			

6 研究の成果

- (1) 児童が解きたい、話したいと思うような課題の設定や授業構成を工夫することで、考えを伝えたいという思いが高まり、課題解決に向かって主体的に取り組めるようになってきた。
- (2) 「スタートスイッチ」で課題把握をさせたことで、見通しをもって本気で問題に取り組み、考えの可視化を根拠にして、主体的に伝え合う姿が見られた。
- (3) 複式学習において、進め方の手引きをもとにガイドを育成したことで、ガイドを中心に意見を 伝え合ったり、考えを検証したりする場面が増えてきた。

7 研究の課題

- (1) 間接指導において、積極的に考えを伝え合わせたり、みんなで解決させたりする手立てを工夫することで、より深い対話をさせていく必要がある。
- (2) 「スタートスイッチ」での見通しのもたせ方では、段階を設定するなど具体的な活用方法を考えていく必要がある。

(記入者 千葉 美樹子)

金浜小

かかわり合いながら、主体的に表現する子どもの育成

~少人数・複式学級における授業実践を通して~(3年計画の1年次)

校長 夏坂 俊史

1 研究主題について

本校は、「夢に向かって挑戦する元気な子」を教育目標に掲げ、努力目標「かんしゃする子」「ねばりづよい子」「はきはきはなす子」「まなびつづける子」の育成に向けて教育活動を展開している。

昨年度は、「主体的にかかわり、ともに学び合う子の育成」という研究主題で、算数科学習指導において、問いのもたせ方の工夫、自力解決・話合いのさせ方や支援の工夫について取り組んだ。その結果、児童が見通しをもって主体的に問題解決に取り組んだり、対話を通して自分の考えを広げたりできたという成果が見られた。また、本校は少人数のため、朝のスピーチや行事での感想発表、毎時間の授業などで、話す機会がたくさんあり、自分を表現するためには恵まれていると言える。しかし、一人で話すときに小さな声になってしまったり、いつも同じような内容になってしまったりしているのが現状である。

そこで、今年度は、自分の考えや思いをはきはき自信をもって話すことができるようにするために、 少人数・複式学級の授業づくりや、対話活動のあり方を工夫することを通して、「かかわり合いながら、 主体的に表現する子どもの育成」に取り組んでいきたい。

2 研究のねらい

かかわり合いながら、主体的に表現する子どもの育成を目指して、少人数・複式学級の授業のあり方 や、対話活動のあり方の工夫について授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

少人数・複式学級の学習指導において、授業の進め方を工夫し、対話を通し協働的に学ぶことによって、かかわり合いながら、主体的に表現する児童を育成することができると考える。

- (1) 導入から課題設定における教師のはたらきかけの工夫
 - ア 教師のはたらきかけの工夫(発問、教材や問題の提示の仕方など)
 - イ 見通し(考え方・方法)のもたせ方の工夫
- (2) 対話活動のあり方の工夫
 - ア 「話し方名人」を基本とした話し方、聞き方、話合いの習慣化
 - イ 考えを表現する場や話し合う場の設定
 - ウ 相手意識、目的意識を明確にして自分の思いや考えを伝える力を育てるための手立ての工夫

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材・授業者など	
6	7	第1回授業研究(6年)	
		道徳「『弱い心』をコントロール」 授業者 講師 三角 田鶴子	
1 0	2 5	第2回授業研究(1・2年)要請訪問	
		国語 1年「じどう車くらべ」	
		2年「馬のおもちゃの作り方 おもちゃの作り方をせつめいしよう」	
		授業者 教諭 後藤 理賀子	

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等	
6	1 3	複式担当者研修会(階上町立階上小学校)	
1 1	2 2	プログラミング教育研修 (総合教育センター主任指導主事 大下 洋一氏)	

6 研究の成果

- (1) 導入から課題設定において、ICT 機器を効果的に使うよう意識したり、教材にしかけを設けたりすることで意欲的に学習に取り組むことができた。
- (2) 間接指導時に見通しをもたせるため、教材や教具を工夫することで、意欲を持続させながら、課題解決に取り組むことができた。
- (3) 自分の考えをはっきりさせるために考えを書かせたり、異学年に発表する機会を設けたりすることで、自信をもって話すことができるようになった。学習時だけでなく、全校で集まる機会に、「はきはき話す」ことを継続して意識させることで、はっきり話すことができるようになり、またそのことが自信につながり、自己肯定感を高めることができた。

7 研究の課題

- (1) 欠学年があり、変則的な複式学級になっている。複式学級の授業の進め方について、県の「へき地・複式教育ハンドブック」を参考に、共通理解しながら授業実践を重ねていく必要がある。
- (2) 間接指導時に、自主的に学習が進められるよう、直接指導時の教師のはたらきかけや見通しのもたせ方の工夫についてさらに研究していく必要がある。
- (3) 目的意識を明確にして自分の思いや考えを伝える力を育てるための手立ての工夫について、さらに研究していく必要がある。

(記入者 後藤 理賀子)

主体的に学び合う子の育成

~各教科における対話的学びの充実を目指して~

(3年計画の4年次)

校長 中村 雅臣

1 研究主題について

本校では、教育目標「本気でがんばる子」を掲げ、努力目標として「進んで学ぶ子」の育成に取り組んできている。昨年度までは、3年計画3年次として「主体的に学び合う子の育成~各教科における対話的学びの実現を目指して~」という研究主題のもと、児童が主体的に学び合うための、より効果的な対話的活動と認め合いについて、全教科での授業実践により研究し、一定の成果を収めることができた。

- 一方で、以下の課題も挙げられた。
- ・課題設定の場面において自力で取り組む際、児童が自分の考えをもつために、どのような助言や補足が効果的であるか、また、対話的場面では、より効果的な学習の内容や方法を吟味し、次の学びに向かえるような授業展開を考え、学び合いのよさを実感させていく必要がある。
- ・コロナ禍にあった3年間は、子ども同士が考えを伝え合う対話的な授業が思うように実践できなかった。また、認め合う場面では、日常の生活の中でこそ肯定的に友達の言動を捉えたり、友達の良いところをみつけ自分で取り入れたりする場面が多く、授業の中では提案しにくいという問題点があった。

そこで、今年度は、昨年度までの研究を概ね継続し、3分の4年次として、「児童が主体的に学び合うための、より効果的な対話的活動」について、全教科での授業実践により研究の充実を目指すことにした。具体的な考えをもたせる働きかけや、目的を明確にした対話的活動の内容や方法の吟味を授業で実践し、より充実した対話的学びについて協議していく。また、児童の居場所作りの実践を全体会で情報交換をすることで、認め合いが根底にある授業づくりを目指していきたい。このような研究実践を積み重ねることで、主体的に学び合う子が育つと考える。

2 研究のねらい

児童が主体的に学び合うためには、対話的な学びの展開を工夫していくことが効果的であることを授業実践を通して明らかにする。(課題と向き合う、伝え合う・話し合う)

3 研究仮説

対話的な学び(課題と向き合う、伝え合う・話し合う)の工夫をすることにより、児童が主 **体的に学び合うことができる。**

4 研究内容

対話的な学びの工夫

- ア 考えたくなる課題設定や意欲的に課題に向かうための手立ての工夫 (課題と向き合う)
- イ 目的を明確にした伝え合う場の効果的な設定(伝え合う・話し合う)

5 研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	田	学年・授業者・題材名・	講師・成果・授業の概要 等
7	12	第1回授業研究(1学年)	登場人物がしたことを動作化させて場面の様子を想
		国語科「おむすび ころりん」	像させたり、話したことや繰り返しの言葉を見つけさ
		授業者:教諭 吉田 悦子	せたりしたことで、主体的に音読の工夫を考えること
		助言者:教頭 蛭田 健	につながった。

10	25	教育指導課・センター訪問	それぞれが仮説に基づく授業実践を行った。また、指
10	20	秋月1日 分 版 こ~ /	
			導を受けたことを基こ、それぞれの実践こついて振り
			返り共有した。
		第2回授業研究【要請訪問】(4学年)	ルールはない方がよいか、たくさんあった方がよい
		道徳科「どっちがいいか」	か、理由をもって立場を表明させることで自分事とし
		授業者:教諭 浜田 真希	て考えさせた。また、村人たちの表情に吹き出しをつ
		助言者:八戸市教育委員会教育指導課	け、気持ちを考えさせることによって、ルールに対す
		主任指導主事 青木 拓哉氏	る認識を深めながら話し合うことにつながった。
12	6	第3回授業研究(6学年)	縮尺を隠した問題提示から、縮尺の必要性に気付かせ
		算数科「図形の拡大と縮小」	取り組ませた。また、地図上の1cmが実際は10000cm
		授業者:教諭 北澤 瑛利子	(100m) であることなど、児童が分からないことを
		助言者:校長 中村 雅臣	全体→ペア→全体→ペアと、児童の発言を何度も問い
			返しつないだことで、相互理解を深めることにつなが
			った。

(2)一般研修等

月	日	内容・講師・概要 等		
5	31	児童理解 ~配慮を要する児童、支援の仕方~		
6	14	図画工作 描画指導		
		「よさ」に気づき「よさ」を生かす~子どもに表現意欲と自信をもたせるには~		
		講師:小学校教育研究会図画工作科 元会長 上村 綾子氏		
7	19	救命救急法講習会		
		講師 八戸消防署 根城分遣所 職員		
8	30	県学習状況調査の採点・分析・考察		
9	20	特別な配慮を必要とする児童生徒への支援		
		講師:青森県総合学校教育センター 指導主事 藤川 くみ氏		
10	18	一人一台端末活用研修~こども Suite シリーズ~		
		講師:(株)ゼッタリンクス 高橋 裕生氏(オンライン研修)		
2	21	CRT 分析・考察		

6 研究の成果

自分の考えをもたせる手立てを講じたことで、課題を自分事と捉えて学習に向かうようになった。さらに、目的を明確にした対話的活動場面を設定し、自信をもたせる声がけや雰囲気づくり、問い返し等を工夫したことで、自分の考えを相手に伝えようとしたり、友達の話をよく聞こうとしたりするなど、主体的に課題解決に取り組む姿が見られた。

7 研究の課題

児童全員が授業に参加できるようにすること、また、児童のつぶやき、考えをつないで、全体に広げたり深めたりするためには、教師のファシリテーション力をもっと高めていく必要がある。また、特別支援の視点を取り入れ、個に応じた配慮を講じていくことも大切である。

(記入者 小向 佳奈子)

主体的に表現する児童の育成

~子どもが生き生きと学ぶ問いと対話の工夫~ (3年計画の3年次)

校長 大館 秀光

1 研究主題について

本校では、教育目標に「めあてに向かってともに学び合う子」を掲げ、校歌に謳われた「学ぶたのしさを分かちあう学校」「心とからだを鍛えあう学校」の実現を目指している。1年次の音楽科における表現力を高めるための指導研究の成果と課題を受け、2年次は主題の具現化を目指し、副題を「問いの意識をつなげる授業づくり」として、授業改善を図りながら研究を進めてきた。

昨年度の校内研究では、算数科に焦点をしぼり、児童が主体的に表現するための実践研究に取り組んだ。教師が導入のはたらきかけでしかけたり、児童に必要感のある課題設定をしたりすることによって、児童の課題解決の意欲や表現したいという気持ちを高めることができた。また、ペア・グループに留まらず対話のさせ方を工夫したり、ICTを活用したりすることによって、学び合いのよさや学習の広がりを感じることができた。

一方、研究過程において、児童の問題解決意欲を持続させることや、展開時にも問いをつなげる授業づくりについて課題が残された。そこで今年度は、3年計画の3年次として他教科へ幅をもたせ、3つのチームを組織し研究主題を実現するために共通した研究内容に取り組むこととした。昨年度の「問いをつなげる授業づくり」を継続しつつ、生き生きと学び合うための「対話」の工夫にも重点を置いた授業実践を行っていくことによって、本校児童が「わかった!できた!身についた!」を実感でき、主体的に表現する力を高めていけるものと考え、副題を設定した。

2 研究のねらい

児童が生き生きと課題解決し主体的に表現する力を高めるために、どのような指導が有効か、授業実践を通して明らかにしていく。

3 研究仮説

教師によるはたらきかけや学習課題の設定、対話の場を工夫することによって、子どもが生き生きと 学ぶことができ、主体的に学び表現する児童を育てることができる。

- (1) 子どもの学ぶ問いをもたせるはたらきかけの工夫
 - ア 教師による「しかける」場の設定・はたらきかけの工夫
 - イ 自分ごととして考える立場の表明・再表明のさせ方
- (2) 子どもが学び合うための手立ての工夫
 - ウ 考えを深める・広げる対話のさせ方
 - エ 思いや考えをつなげるファシリテーションの在り方

(1)研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等	全体会等
4	6		全体会(共通理解)
6	7		全体会(指導案作成様式)
7	4	第1回授業研究(要請訪問) 3年 1組 授業者 教諭 中野渡 正明	公開授業
9	2 7	第2回授業研究 5年 2組 授業者 教諭 新保 義成	公開授業
1 1	1 5	第3回授業研究 1年 2組 授業者 教諭 福士 珠未	公開授業
1 1	2 9		全体会(今年度の成果と課題)
1	1 2		全体会 (来年度の方向性①)
2	7		全体会 (来年度の方向性②)

(2)一般研修

月	日	一般研修等
5	2 4	「算数における1人1台端末を活用した授業づくり」 講師:総合教育センター 主任指導主事 小向 一樹
8	3 0	県学習状況調査の採点・分析・考察
9	6	「校内研究における授業づくり(高学年・算数)」 講師:総合教育センター 主任指導主事 小向 一樹
1 0	1 1	「インクルーシブ教育の視点を取り入れた支援体制づくり」 講師:こども支援センター 指導主事 三浦 祐子
1 1	1	「校内研究における授業づくり(低学年・国語)」 講師:教育指導課 主任指導主事 中村 美穂
2	1 5	研修報告会

6 研究の成果

- (1) 子どもに学ぶ問いをもたせるために、本文を穴あきにしたり I C T を効果的に活用したりというように「しかける場」を設定したことにより、問題解決の必要感が生まれ、生き生きと課題解決に取り組むことができた。
- (2) 子どもの考えをつなげられるように、教師が意図的に問い返しをしたり意見を交流する「つなぎタイム」を取り入れたりすることによって、自分と友達の考えを比較したり共有したりしながら生き生きと対話ができ、学び合うことができた。
- (3) 低・中・高学年の3つのチームが、それぞれで選択した共通研究内容に取り組むことにより、各チームが主体的に研究に臨むとともに、個人の教科研究の深まりや日々の教材研究へのつながりなど、教師にとって深い学びがあった。

7 研究の課題

- (1)「しかける場」を解き進む段階でも設けたり、自分事として捉えるための工夫をしたりすることを通して、子どもに選ぶ力と伝える力を付けること。
- (2) 子どもたちの考えをつなぎ、さらに深めていくための教師のファシリテーションの在り方。
- (3) チーム研による研究の継続と、フィードバックの在り方。

(記入者 工藤 佳)

多様な他者と協働し、課題解決に取り組む児童の育成

~人間関係形成能力を高める学級活動の工夫を通して~

(3年計画の1年次)

校長 加藤 慎一

1 研究主題について

本校では、教育目標として「心豊かに たくましく ともに学び合う子」、努力目標として「よく 聴き よく考える子」「きまりを守り 思いやりをもつ子」「進んで体をきたえる子」を掲げている。 今年度はこれらの目標を達成するため、「自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う授業」や「自 尊感情や自己有用感を高める指導の充実」、「自己の体力向上と健康維持を意識して日々努力する態度の育成」を重点施策とし、「西白魂をもち、ねばり強く取り組む子」の育成を目指すことにした。

これまで体育科を中核に据えて取り組んだ6年間の研究では、「組み合わせ単元」の有効性を実証し、教員の授業マネジメント力を向上させることができた。昨年度は、児童が解決したくなる課題設定の工夫、児童が自己の変容を実感できる振り返りの工夫を取り入れた授業の研究に取り組んだ。その結果、手本となる映像資料や前時の振り返りを活用したり、思考を揺さぶる発問を工夫したりすることにより、児童はよく考え、解決すべき問いを見付けられることが分かった。また、観点を与えて振り返らせたり、1単位時間の中で随時振り返る場面を設定したりすることにより、児童は自己の変容をより実感することが実証できた。ワークシートやノートを活用し、教師がフィードバックを行うことが、次時への意欲を高めさせることも分かった。

しかし、どの場面においても考えを発言する児童は限られており、一人一人の考えを全体で共有できているとは言い難く、誰もが自分の考えを言語化できる手立てが課題となった。また、学校生活における挨拶や廊下歩行なども課題となっており、児童が主体的に解決方法を話し合い、実践する力を育てたいと考えた。

そこで、今年度からは「『集団や社会の形成者としての見方・考え方』を働かせながら『様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する』ことを通して、資質・能力を育むことを目指す」特別活動の研究に取り組むことにした。初年度となる今年度は、主に「人間関係形成」能力を高めるため、学級活動(1)の研究に注力する。まずは、自分の考えをもち、それを外言化できるように、学級活動への意欲を高める手立てを工夫する。掲示や教具、ワークシートを工夫したり、事前・事後活動を充実させたりしていきたい。また、協働的に課題を解決する力を高めるため、合意形成を図る指導の工夫に取り組み、教師のファシリテーターとしての役割について考えたり、児童の伝え合う力を高めたりしていきたい。そして、成果と課題を分析するため、児童・学級の変容を見取ることができる調査についても研究していく。これらに取り組むことにより、多様な他者と協働し、主体的に課題解決に取り組む児童を育てていきたいと考える。

2 研究のねらい

多様な他者と協働し、主体的に課題解決に取り組む児童を育てるために、人間関係形成能力(違いを認め合い、みんなと共に生きていく力)を高める学級活動の工夫について、日常の実践を通して明らかにしていく。

3 研究仮説

人間関係形成能力(違いを認め合い、みんなと共に生きていく力)を高める学級活動を工夫することによって、多様な他者と協働し、主体的に課題解決に取り組む児童を育てることができる。

- (1)学級活動への意欲を高める手立ての工夫
 - (学級会グッズ、学級掲示、ワークシート、事前・事後活動 など)
- (2) 合意形成を図る指導の工夫
 - (司会の育成、伝え合う力、対話力、教師の役割、板書 など)
- (3) 児童・学級の変容を見取る調査の作成と活用の工夫
 - (児童アンケート、教職員アンケート など)

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者・助言者
6	27	第1回授業研究 6学年「6の2パワーアップ大作戦」 授業者 教諭 林 義隆 助言者 八戸市立下長小学校 校長 宍戸 義彦 氏
9	6	第1回研究報告会 報告者 豊巻 永子 山田 美智子 竹井 亮太 坂本 由実子 外舘 季和 林 義隆
11	2	第2回授業研究【初任者研修特別活動示範授業】 3学年「おやつの食べ方とむし歯の予防」 授業者 教諭 竹井 亮太 4学年「学習発表会お疲れ様パーティーをしよう」 教諭 深澤 美加子 6学年「『復活!秋の6-1大運動会』をしよう」 教諭 中村 亜希子
11	22	第3回授業研究 1学年「にこにこクリスマスパーティーをしよう」 授業者 教諭 髙橋 葵 助言者 八戸市立下長小学校 校長 宍戸 義彦 氏
12	13	第2回研究報告会 報告者 髙橋 葵 高谷 久美子 木村 智恵 深澤 美加子 佐藤 光子 中村 亜希子
1	11	第3回研究報告会 報告者 富岡 祥奈 田鎖 希美 鎌田 淳子 上村 尚美 中村 奈見子
2	28	第4回研究報告会 報告者 磯谷 琢磨

(2) 一般研修

月	日	内容・講師 等
5	31	特別な配慮が必要な児童についての共通理解 特別支援学級授業公開 授業者 教諭 夏坂 美保子 教諭 山下 由美子 講師 湊 美穂
8	23	「個への気づきと学級集団づくり〜Q-Uの分析と活用を通して〜」 講師 八戸市こども支援センター 学校体制支援アドバイザー 原 寿 氏
8	30	県学習状況調査の分析・考察
9	27	学校DX・1人1台端末活用 講師 本校教諭 外舘 季和
10	25	救命救急講習 講師 日本赤十字社水上安全法指導員 下田 尋通 氏・道地 理英子 氏
1	11	県外研修報告会【東北地区小学校特別活動教育研究会山形大会】 報告者 本校教諭 中村 亜希子

6 研究の成果

- (1)児童が自分事として考えやすい議題を選定したり、学級会シートに対して予めポジティブフィードバックを行ったりすることにより、児童の学級会に対する意欲を高め、充実した話合い活動を
- 実現させることができた。
 (2) 合意形成の具体例や話型を提示して使い方を指導したり、日常的に話したり聞いたりする力を育成したりすることにより、自分たちで問題を解決する力を身に付けさせることができた。
 (3) 学級会グッズを全学級分揃えたことにより、全校で学級会に取り組むことができた。系統的な指導の必要性を確認できたため、次年度の研究へ繋がることが期待できる。

研究の課題

- (1)よりよい合意形成を図る手立てに課題が残った。めあてや提案理由の生かし方、少数意見の受け止め方、教師のかかわり方などについて、改めて整理する必要がある。 (2)話合いに特化した研究だったこともあり、問題の発見から事前の活動、話合い、事後の活動、振り返りまでの学習過程を十分に意識して取り組むことができなかった。児童の問題解決能力をさらに高めるため、計画的な学習過程を構築する必要がある。

(記入者 外舘 季和)

江南小

主体的に課題に向かい、自分の考えを表現できる子の育成

~思いや考えを伝え、学び合う学習活動を通して~ (1年計画の2年次)

校長 笹川 力

1 研究主題について

本校では、「強い子になろう」を教育目標に掲げ、児童の「生きる力」を育んでいくという理念を 共有している。「生きる力」とは、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の3つの要素の調和で ある。

昨年度は1年計画の1年次として、「主体的に課題に向かい、自分の考えを表現できる子の育成」を目指し、主に「児童の思考を促す授業展開」と「表現意欲を高める活動方法」の研究に取り組んだ。授業展開においては、教材(問題)提示の工夫とともに、課題解決の見通しをもたせることにより、自力で課題に取り組み、自分の考えをペアや全体の場で伝えるなど、主体的に課題へ向かう態度が向上した。個別に教材を配付すること、ワークシートを工夫すること、日常的に書く活動を取り入れることなどで、自分の考えを進んで友達に伝えようとする児童が増え、表現意欲の向上につながった。

一方、他者の考えと比較しながらよりよい考えに気付くなど、表現活動が自らの考えを深めたり 広げたりすることにつながりにくい、という課題が出されていた。そこで、今年度は、主体的に課 題に向かうための授業展開に加え、児童が互いの考えから学び合える学習活動の在り方を探ってい き、「確かな学力」の育成を図りたいと考え、本主題を設定した。

2 研究のねらい

各教科の授業において、主体的に課題に向かい、自分の考えを表現できる子を育てるための指導 の在り方を授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

各教科の授業において、主体的に問題解決に取り組むような「しかけ」や「授業展開」を工夫したり、表現意欲を高めるための手立てや考えを深められるような学び合いの場の在り方を探ったりしていくことで、主体的に課題に向かい、自分の考えを表現できる子を育てることができると考える。

- (1) 児童が主体的に課題に向かうための工夫
 - ・進んで問題解決に取り組むような「しかけ」や「授業展開」の工夫
- (2) 自分の考えを表現するための工夫
 - ・自分の考えをもち、表現したいという意欲を高めるための活動や考えを深め、互いに学び合え る学習活動の在り方

(1) 研究仮説に基づく授業研究授業研究

月	日	授業研究・教材研究等
7	5	第1回授業研究(5学年 社会) 題材名 「あたたかい土地のくらし」 5年1組 授業者 教諭 坂本 尊
9	2 7	第2回授業研究(3学年 算数) 題材名 「小数のたし算」 3年1組 授業者 講師 漣 尚代 指導助言 峯 明紀 氏(大館公民館 館長)

(2) 一般研修

月	日	内 容 等
5	2 4	児童理解研修会「のびゆく大いちょう」についての共通理解
7	1 2	「不登校児童・保護者への対応」に関する研修 (オンライン研修) 講師 新岡 雄大 氏 (青森県総合学校教育センター 教育相談課)
8	3 0	「1人1台端末(Chromebook)の活用」に関する研修 講師 坂本 尊 (本校 視聴覚主任)
1 0	1 1	「怪我などの応急処置」に関する研修 講師 小野寺 晶子 (本校 養護教諭)
1 2	1 3	「『気づきのためのチェックリスト』の活用」に関する研修 講師 佐藤 満司 (本校 教頭) 講師 野藤 智美 (本校 特別支援学級担任)
2	1 6	CRT 学力テスト分析(各学年)

6 研究の成果

- (1) 進んで問題解決に取り組むような「しかけ」や「授業展開」を工夫することにより、自力で課題解決を試みたり、友達の説明を聞いて理解を深めたりするなど、主体的に課題に向かう態度につながった。
- (2)「自分の考えをもつ、少人数で伝え合う、全体で伝え合う」など、段階的に伝える場を設定する ことにより、発言への抵抗が軽減され、表現への意欲向上につながった。また、言葉だけではな く、資料や図、表などを取り入れて説明させることで、聞き手により伝わりやすい説明につなが った。

7 研究の課題

友達の考えへの意見のつけたしや、質問により、考えをより深める、あるいは広げるような対話 の在り方をさぐっていく必要がある。

(記入者 池田 美幸)

進んで伝え合い、主体的に学ぶ子の育成

(3年計画の2年次)

校長 松本 清和

1 研究主題について

本校では、教育目標の「よく聞き考える子」及び、努力目標の「よく聞き、しっかり考えて課題に取り組む」を受け、相手の考えを聞き、自分の考えを深めることができる児童の育成を目指している。

昨年度は、3年次計画の1年目として、思考の対立や葛藤、疑問をもたせるための課題設定や発問を工夫したり、自分の考えを表現し合うための場の設定や支援を工夫したりすることによって、児童が意欲的に課題解決に向かい、伝え合う力を高めるための授業づくりを研究した。

学習課題設定のための「しかけ」を工夫し、様々な方法で児童の思考を促したり揺さぶりをかけたりしたことで、児童が積極的に課題に取り組み、自ら課題を考えたり自力で解決したいという思いをもったりすることができるようになった。また、考えを伝え合う場として、事前に自分の考えを書くことやペアで確認すること、少人数で意見を共有する時間を設けたことで、児童に安心感が生まれ、自信をもって発言するようになってきた。さらに、児童から出された意見を視覚化したことで考えが整理され、より活発な話合いにつなげることもできた。その一方で、自分の考えと相手の考えを比べながら聞く力が不十分であることや、主体的に取り組む態度が見られないなどの課題が挙げられた。主体的に学習に取り組む態度を養うためには、児童自らが学習について振り返り、次の学習につなげるような授業づくりが必要である。

以上のような理由から、今年度は、自分の意見を伝えるだけでなく、自分と相手の考えの違いに 着目して聞き、それに対して意見を伝えることができるようにするための手立てや指導について研 究する。さらに、振り返りの場を設定し、その視点を工夫することで、主体的に学習に向かう態度 を育てる授業づくりを研究することとした。

2 研究のねらい

考えを進んで伝え合いながら自己を振り返り、主体的に学ぶことができる児童を育てるための指導のあり方を明らかにする。

3 研究仮説

考えを伝え合うための場や手立て、振り返りの場や内容を工夫することによって、児童が自らの 課題と向き合い、主体的に課題解決に取り組む力が高められると考える。

- (1) 児童が自分の考えと友達の考えを比べながら話したり聞いたりすることができるための場の設定や指導の在り方について、実践を通して明らかにする。
- (2) 主体的に学習に向かう態度を育てるための振り返りの場の設定や内容、視点等の在り方について、実践を通して明らかにする。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月 日 授業 業 研 究 6 7 提案授業 第2学年 道徳科「ぐみの木と小鳥」 2年1組 授業者 教諭 近藤 純子 7 7 授業者 教諭 近藤 純子 7 7 授業者 教諭 小林 望 助言者 八戸市教育委員会 教育指導課 日向端 聖 副参事兼主任指導主事 10 18 接業者 教諭 中平 珠莉 助言者 八戸市総合教育センター 小向 一樹 主任指導主事 11 1 第3回研究授業 あすなろ学級1組 自立活動「自分や友達のいいところを見つけよう」 授業者 教諭 田村 久美子 11 2 下学年ブロック参観授業 第1学年 算数科「たしざんのかあど」 授業者 教諭 坂本 明希子 11 2.4 上学年ブロック参観授業 第4学年 道徳科「ブラジルからの転入生」 授業者 教諭 清水 咲良 12 7 下学年ブロック参観授業 第1学年 音楽科「だしたいおとをみつけよう 授業者 教諭 清水 咲良 12 8 上学年ブロック参観授業 第5学年 体育科「とび箱運動」 授業者 講師 中文字 みずほ 12 1.4 特別支援ブロック参観授業 第6学年 体育科(保健領域)「生活習慣病の予防」 授業者 教諭 山下 淳 12 1.9 上学年ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」 授業者 講師 越後 順子	(1) 10171	1) 切九阪坑に塞りて及来切九		
7 2年1組 授業者 教諭 近藤 純子 7 7 第1回授業研究 (要請訪問) 第3学年 外国語活動「How many?数えて遊ぼう」 授業者 教諭 小林 望 助言者 八戸市教育委員会 教育指導課 日向端 聖 副参事兼主任指導主事 第2回研究授業 (要請訪問) 第4学年 算数科「面積」 授業者 教諭 中平 珠莉 助言者 八戸市総合教育センター 小向 一樹 主任指導主事 1 1 1 第3回研究授業 あすなろ学級1組 自立活動「自分や友達のいいところを見つけよう」 授業者 教諭 田村 久美子 1 1 2 下学年ブロック参観授業 第1学年 算数科「たしざんのかあど」 授業者 教諭 坂本 明希子 1 1 2 4 上学年ブロック参観授業 第4学年 道徳科「ブラジルからの転入生」 授業者 教諭 清水 咲良 1 2 7 下学年ブロック参観授業 第1学年 音楽科「だしたいおとをみつけよう 授業者 教諭 荒井 美佳 1 2 8 上学年ブロック参観授業 第5学年 体育科「とび箱運動」 授業者 講師 野邊地 宏大 1 2 1 4 特別支援ブロック参観授業 おおぞら学級 自立活動「ていねいな言葉づかいで話そう」 授業者 講師 十文字 みずほ 1 2 1 9 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科 (保健領域)「生活習慣病の予防」 授業者 教諭 山下 淳 1 2 2 1 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	月	日	授業研究	
7 授業者 教諭 小林 望 助言者 八戸市教育委員会 教育指導課 日向端 聖 副参事兼主任指導主事 10 18 第2回研究授業 (要請訪問) 第4学年 算数科「面積」 授業者 教諭 中平 珠莉 助言者 八戸市総合教育センター 小向 一樹 主任指導主事 11 1 第3回研究授業 あすなる学級1組 自立活動「自分や友達のいいところを見つけよう」 授業者 教諭 田村 久美子 11 2 下学年ブロック参観授業 第1学年 算数科「たしざんのかあど」 授業者 教諭 坂本 明希子 11 24 上学年ブロック参観授業 第4学年 道徳科「ブラジルからの転入生」 授業者 教諭 清水 咲良 12 7 下学年ブロック参観授業 第1学年 音楽科「だしたいおとをみつけよう 授業者 教諭 荒井 美佳 12 8 上学年ブロック参観授業 第5学年 体育科「とび箱運動」 授業者 講師 野邊地 宏大 12 14 特別支援ブロック参観授業 おおぞら学級 自立活動「ていねいな言葉づかいで話そう」 授業者 講師 十文字 みずほ 12 19 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科 (保健領域)「生活習慣病の予防」 授業者 教諭 山下 淳 12 2 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	6	7		
10 18 授業者 教諭 中平 珠莉 助言者 八戸市総合教育センター 小向 一樹 主任指導主事 11 1 第3回研究授業 あすなろ学級1組 自立活動「自分や友達のいいところを見つけよう」 授業者 教諭 田村 久美子 11 2 下学年ブロック参観授業 第1学年 算数科「たしざんのかあど」 授業者 教諭 坂本 明希子 11 24 上学年ブロック参観授業 第4学年 道徳科「ブラジルからの転入生」 授業者 教諭 清水 咲良 12 7 下学年ブロック参観授業 第1学年 音楽科「だしたいおとをみつけよう 授業者 教諭 荒井 美佳 12 8 上学年ブロック参観授業 第5学年 体育科「とび箱運動」 授業者 講師 野邊地 宏大 12 14 特別支援ブロック参観授業 おおぞら学級 自立活動「ていねいな言葉づかいで話そう」 授業者 講師 十文字 みずほ 12 19 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科(保健領域)「生活習慣病の予防」 授業者 教諭 山下 淳 12 21 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	7	7	授業者 教諭 小林 望	
11 1 授業者 教諭 田村 久美子 11 2 下学年ブロック参観授業 第1学年 算数科「たしざんのかあど」授業者 教諭 坂本 明希子 11 24 上学年ブロック参観授業 第4学年 道徳科「ブラジルからの転入生」授業者 教諭 清水 咲良 12 7 下学年ブロック参観授業 第1学年 音楽科「だしたいおとをみつけよう授業者 教諭 荒井 美佳 12 8 上学年ブロック参観授業 第5学年 体育科「とび箱運動」授業者 講師 野邊地 宏大 12 14 特別支援ブロック参観授業 おおぞら学級 自立活動「ていねいな言葉づかいで話そう」授業者 講師 十文字 みずほ 12 19 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科 (保健領域)「生活習慣病の予防」授業者 教諭 山下 淳 12 21 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	1 0	1 8	授業者 教諭 中平 珠莉	
11 24 授業者 教諭 坂本 明希子 11 24 上学年ブロック参観授業 第4学年 道徳科「ブラジルからの転入生」授業者 教諭 清水 咲良 12 7 下学年ブロック参観授業 第1学年 音楽科「だしたいおとをみつけよう授業者 教諭 荒井 美佳 12 8 上学年ブロック参観授業 第5学年 体育科「とび箱運動」授業者 講師 野邊地 宏大 12 14 特別支援ブロック参観授業 おおぞら学級 自立活動「ていねいな言葉づかいで話そう」授業者 講師 十文字 みずほ 12 19 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科(保健領域)「生活習慣病の予防」授業者 教諭 山下 淳 12 21 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	1 1	1	第3回研究授業 あすなろ学級1組 自立活動「自分や友達のいいところを見つけよう」	
12 授業者 教諭 清水 咲良 12 7 下学年ブロック参観授業 第1学年 音楽科「だしたいおとをみつけよう 授業者 教諭 荒井 美佳 12 8 上学年ブロック参観授業 第5学年 体育科「とび箱運動」 授業者 講師 野邊地 宏大 12 14 特別支援ブロック参観授業 おおぞら学級 自立活動「ていねいな言葉づかいで話そう」 授業者 講師 十文字 みずほ 12 19 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科(保健領域)「生活習慣病の予防」 授業者 教諭 山下 淳 12 21 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	1 1	2	-	
12 授業者 教諭 荒井 美佳 12 8 上学年ブロック参観授業 第5学年 体育科「とび箱運動」 授業者 講師 野邊地 宏大 12 14 特別支援ブロック参観授業 おおぞら学級 自立活動「ていねいな言葉づかいで話そう」 授業者 講師 十文字 みずほ 12 19 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科(保健領域)「生活習慣病の予防」 授業者 教諭 山下 淳 12 21 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	1 1	2 4		
12 授業者 講師 野邊地 宏大 12 14 特別支援ブロック参観授業 おおぞら学級 自立活動「ていねいな言葉づかいで話そう」 授業者 講師 十文字 みずほ 12 19 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科(保健領域)「生活習慣病の予防」 授業者 教諭 山下 淳 12 21 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	1 2	7		
12 14 授業者 講師 十文字 みずほ 12 19 上学年ブロック参観授業 第6学年 体育科 (保健領域)「生活習慣病の予防」授業者 教諭 山下 淳 12 21 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	1 2	8		
12 投業者 教諭 山下 淳 12 21 特別支援ブロック参観授業 あすなろ学級2組 特別活動「友達とのよりよい関わり方を考えよう」	1 2	1 4		
	1 2	1 9		
o) - 約11.TT l分				

(2) 一般研修

月	日	内容・詞	講師・概要等
5	1	救命救急	講師 養護教諭 中村 睦恵
6	2 8	保護者への対応	講師 青森県総合学校教育センター 教育相談課 葛西 励 指導主事
8	2 3	対話場面における一人一台端末の活用	講師 八戸市総合教育センター 小向 一樹 主任指導主事
1 1	2 9	いじめへの対応	講師 青森県総合学校教育センター 教育相談課 佐藤 幸広 指導主事

6 研究の成果

- (1) 意見を比較して捉えさせるために、板書を工夫したり一人一台端末を活用したりすることにより、立場を明確にし共通点や相違点を意識して聞くことができるようになった。また、話型を示し少人数で話し合う場を設定したことで、友達の考えを受容的に聞くことができた。
- (2) 視点を与えて振り返らせることにより、自分自身の学習の様子について気付いたり、これからの学習への展望をもったりと、主体的に学習に向かう態度が育ってきた。

7 研究の課題

主体的に学ぶ態度を育てるために、対話を通して考えを広げたり深めたりすることができる指導の 在り方について、さらに研究を深めていく必要がある。また、学習内容に応じた振り返りの視点の在 り方や、振り返りを生かした授業展開の工夫についても研究内容として取り上げていきたい。

(記入者 近藤 純子)

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成

~つなぐ授業を通して~(3年計画の4年次)

校長 宍戸 義彦

1 研究主題について

今年度、本校では「生き生きと輝く子」~思いやりのある子、すすんで勉強する子、体をきたえる子~を教育目標と努力目標に掲げ、それを具現化するために種々の教育活動を展開している。教育目標具現化のためには、基礎的な学習ルールを徹底させ、授業においてユニバーサルデザインの視点を取り入れ、児童の学習への意欲や主体性を高めることが大切であると考える。

昨年度、本校では、「ともに学び合い、考えを深める子どもの育成」という研究主題のもと、主にしかけやファシリテーション・スキルなどの指導方法の在り方を研究してきた。教科を問わず、児童が問いをもつしかけの工夫、ファシリテーション・スキルを用いて、児童の考えをつなぎながら話し合わせる工夫を授業で実践し、検証してきた。研究の成果として、しかけの工夫により、児童の思考に沿って問いが生まれ、課題解決に向けて意欲的に取り組む姿が見られた。また、互いに認め合う雰囲気の中で、教師の共感的・受容的な態度、つぶやきを拾う、問い返す、適切な復唱などのファシリテーション・スキルを用いることで、児童の考えをつなぎながら話し合わせることができた。書く活動を効果的に取り入れることにより、児童の思考を整理したり、まとめたりすることができることも検証された。さらに、「話す・聞く」表を教室に掲示したことで、児童は共感しながら話を聞いたり、立場をはっきりさせて話したりすることができるようになった。一方、課題としてファシリテーション・スキルの検証がより明確になるように、教師は学習する児童の視点に立ち、児童の姿の変容を見ていく授業研究を行っていく必要があることが挙げられた。また、書く活動を取り入れる際、どこで何を書かせるのか、教師のねらいをはっきりさせる必要があるとの意見も出された。

そこで、今年度は、「子どもが問いをもつしかけの工夫と問いの共有」「子どもが考えをつなぐ対話の仕方の工夫(ファシリテーション・スキルの活用)」について研究していく。教科を問わず、これらの工夫を実践することで、子どもが考えをつなぎ、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができると考える。

2 研究のねらい

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成を目指して、しかけや対話の仕方の工夫などの指導方法の 在り方を授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

子どもが問いをもつようにしかけた上で問いを共有し、考えをつないで対話させることで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができる。

- (1) 子どもが問いをもつしかけの工夫と問いの共有(授業の導入場面)
- (2)子どもが考えをつなぐ対話の仕方の工夫(ファシリテーション・スキルの活用)
- 留意点・・・上記(1)(2)を進める上で次の点にも留意する。
 - ・実態に応じて「伝え合う姿」「考えをつなぐ姿」の表を活用する。

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	授業研究	
4	2 6	研究仮説・研究内容・研究方法、校内研修年間計画、指導案形式についての共 通理解	
	2 1	第1回授業研究(6学年)授業者 川村祐輝教諭 社会「むらからくにへ」	
	28	第2回授業研究(4学年)授業者 上山泰子教諭 社会「ごみのしょりと利用」	
	3	第3回授業研究(要請訪問・2学年)授業者 佐々木温子教諭 国語「ミリーのすてきなぼうし」 (八戸市教育委員会 教育指導課主任指導主事 中村 美穂 様)	
	1 3	第4回授業研究(3学年)授業者 月舘恵美子教諭 算数「分数」	
	2 0	第5回授業研究(1学年)授業者 奈良真優子教諭 道徳「ともだちのきもちをおもうこころ」	
	2 7	第6回授業研究(5学年)授業者 溝江翔教諭 道徳「いじめに負けないために」	
1 1	2 9	アンケート	
2	1 4	今年度の研究のまとめ・来年度に向けての共通理解	
	2 1	来年度の研究に向けての共通理解	

(2) 一般研修

٠.	12/1/19			
	月	日	内容・講師・概要等	
	5	0.1	・水泳指導(本校 溝江翔教諭)	
	5 3	3 1	・学級会をしよう~今さら聞けない特別活動~(本校 宍戸義彦校長)	
	6	1 4	・救命講習(尻内分遺所職員)	
	8	3 0	・青森県学習状況調査採点及び分析	
	1 1	1	特別支援教育(本校 特別支援学級担任)	
	1	1 2	・特別支援に係る講演	
	1		(八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 教授 野口和也 様)	

6 研究の成果

- (1) しかけの工夫により、子どもは問いをもつことができた。また、立場の表明で、ズレを生じさせたことにより問いが子どもに共有された。問いと子どもがつながり、問題解決的な授業となった。また、全員が参加することができ、子どもの意欲にもつながった。
- (2) ファシリテーション・スキルを活用して子どもと子どもの考えをつなぐごとに積極的に取り組んだことにより、話を聞く力が向上したとともに、課題解決に向かうことができた。また、教師の共感的・受容的な態度により子ども同士がつながり、よりよい人間関係づくりにもつながった。
- (3)「伝え合う姿」「考えをつなぐ姿」の表により、子どものつなげて話そうとする姿、注意深く話を聞こうとする姿が見られた。

7 研究の課題

- (1)問題解決的な学習に向かうために、今後も教師のしかけにより、子どもに問いをもたせる。さらに立場の相違を顕在化させ、考えることを焦点化し、問いを共有させる授業を継続して行う必要がある。
- (2) 話合いの場面で、子どもと子どもをつなぐことに積極的に取り組むことができた反面、「しゃべり合う」にとどまり、「考えを深める」に至ることが難しかった。今後も、考えを深める対話が成立するための工夫が必要である。
- (3)「伝え合う姿」「考えをつなぐ姿」の表が充分に活用されたとは言えない。内容を見直すか、表を活用するかどうかの検討が必要である。

(記入者 寺澤麻美)

主体的に学び、考えを深める子の育成

~対話的な授業づくりを通して~

(3年計画の1年次)

校長 出 貝 幸 浩

1 研究主題について

(1)教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「思いやりのある子」「考えを表す子」「きたえる子」の徳・知・体の柱を掲げ、「学ぶ意欲」と「豊かな心」の育成を目指している。この目標の具現化のためには、課題意識をもって主体的に学習に取り組み、他者と関わり合いながら協働的に学習を進め、自分の考えを深めていくことが必要になると考えた。

(2)研究の経過から

昨年度は、3年計画の3年次として「自分の考えをもち、主体的に学ぶ子の育成」〜学ぶ意欲を持続させるための手立ての工夫〜という研究主題のもと、教材や発問を工夫し、ネームプレートや挙手などで立場の表明をさせたことにより、一人一人に問いを意識させ、必要感をもたせて課題解決に向かわせることができた。また、導入で課題意識をもたせたことで、その後の学習過程においても意欲を持続させ、学びに向かわせることができた。さらに、実際の操作や文章へのしかけ、全体でやり方を確認するなど、様々な手立てを段階的に講じたことによって、自信をもって課題に取り組ませ、子どもの思考を活性化させることができた。

今年度は、昨年度までの研究を生かしつつ、対話的な授業づくりを通して、児童の考えを深めるための手立てについて研究を進めてきた。課題設定の場面では、自分自身の問いへとつなげるため、教材へしかけをすることによって立場の表明をさせ、児童を主体的に学習へ向かわせる工夫を授業に盛り込んだ。また、展開場面では児童の実態に合った対話的活動を通して、児童一人一人が考えを表し、自分の学びを深められるように手立てを講じ、実践を重ねた。

2 研究のねらい

主体的に学び、考えを深めようとする児童を育てるための指導の在り方を、授業実践を通して明らかにしていく。

3 研究仮説

課題設定や対話的活動を工夫することによって、自分の考えをもち、考えを深めようとする児童を育成することができる

4 研究内容

- ○主体的に学び、考えを深めようとする児童を育成するための効果的な指導の在り方
- ・課題設定の場面で子どもの思考から問いにつなげる工夫
- ・対話的活動の中で自分の考えを表す工夫

5 研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者・講師・授業の概要
		中学年ブロック 3 学年 国語:「すがたをかえる大豆」 教諭 秋元 晶子
1 0	18	前時に考えた問いがどこに入るのか発問することによって、児童に段落前後の内容や 根拠となる言葉を探す必要感をもたせることができた。また、立場の相違や変容を可視 化させたことで、意欲を持続させながら学習に向かわせることができた。

1 0	2 6	高学年ブロック 5 学年 国語:「固有種が教えてくれること」 教諭 永田 進斗
		資料のしかけによって、思考のずれを生じさせ、児童に文章を読む必要感をもたせる
		ことができた。また、段階的に対話的活動を組み込み、その都度考えを記入させたこと
		で、児童一人一人の考えを深めさせ、変容を見取ることができた。
		低学年ブロック(要請訪問)1学年 算数:「もののいち」 教諭 福田 新子
		講師:八戸市教育委員会 総合教育センター 小向 一樹 主任指導主事
1 1	1 6	問題を段階的に提示したことで、児童に本時のねらいとする視点に目を向けさせ、目
		的意識をもたせることができた。ブロック操作やジャムボードの活用によって、思考の
		過程や考えの相違が明確になり、対話が生まれ、自分の考えを深めさせることができた。

(2)一般研修

月	日	一般研修
5	2 4	個別な配慮を要する児童の理解及びいじめ対応に関わる研修 担当:本校教諭 熊谷 恵美子 小笠原 真一
5	3 1	問題解決的な学習について、今年度の重点と対話的な学習の授業展開について 講師:八戸市教育委員会 教育指導課 中村 美穂 主任指導主事
6	2 1	職員間の学び合い〜授業実践報告①〜 担当:本校職員
7	1 9	生徒指導と問題行動との関わり、特別な支援を要する児童への手立て 講師:八戸市教育委員会 教育指導課 青少年G 石田 純也 主任指導主事
9	5	通常学級における不適応児童に対する適切な対応について 講師:立教大学 教授 大石 幸二 氏
1 1	1	職員間の学び合い〜授業実践報告②〜 担当:本校職員
1 2	2 0	職員間の学び合い〜授業実践報告③〜 担当:本校職員

6 研究の成果

- (1) 教材、発問の工夫などの課題提示のしかけ、立場の表明をさせたことにより、友達とのずれや予想とのずれ、既習とのずれが生じ、一人一人に問いを意識させ、必要感をもたせて課題解決に向かわせることができた。また、立場の表明を複数回行ったことで課題解決に向かう意欲を持続させることにつながった。
- (2) 自分の考えをノートやワークシートに記入させてから交流させたり、実際に操作させたりと様々な手立てを講じたことによって、考えを表すことに自信をもたせることができた。また、段階的に対話的活動を組み込んだことによって、意欲的に課題解決へと導くことができ、児童の考えを深めさせることにつながった。

7 研究の課題

- (1)子どもの思考から問いにつなげるには、導入段階で立場の表明をさせ、問いを全体で共有し、展開へとつなげていくことが有効であると明らかになった。自分事の問いへとつなげるため、立場の表明のさせ方や問いを焦点化・明確化する工夫などについては引き続き検討していく必要がある。
- (2) ワークシートに記入させたり、実際に操作させたりすることで自信をもって自分の考えを表し、学習に向かわせることができると明らかになった。しかし、学習場面に応じた対話的活動のもち方や対話的活動から考えを深める手立てについては今後も研究していく必要がある。

(記入者 馬場 知里)

「自分の考えを豊かに表現し、共に学び合う子どもの育成」

~ユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫を通して~ ~(3年計画の1年次)

校長 古戸美登子

1 研究主題について

本校の教育目標は「たくましく生きる子」である。めざす児童像「夢や志の実現に向かって学び続ける人間性豊かな子ども」の育成に向けて教育活動に取り組んでいる。

この具現のためには、児童が主体的、創造的に学習に取り組む資質や能力、態度を育てるとともに、 積極的に他者と関わりをもち、学び合いながら問題を解決しようとする意欲を高めていく必要がある。 3年にわたり、国語科を中心に、本校における主体的に学び合う子どもの姿について共通理解を図 るとともに、児童に問いをもたせるための発問、学びを広げ深めるための学び合いのさせ方、活用に つなげるための振り返りについて、授業研究に取り組んできた。

その結果、

- (1) 判断のずれを生み出す発問をしたり効果的な導入の仕掛けをしたりすることで、主体的に問題を解決しようとする意欲が高まった。
- (2) 立場を明確にすることで、自分なりの考えをもって深く考えるようになった。
- (3) 活用場面を設定することで、今までの学習を生かしながら自分の力で問題を解決することができるようになってきた。また、単元以外でも活用して学習を進めることができるようになった。 一方で
- (1) 自分の考えをもって互いの考えを交流することはできるようになったが、友だちの考えを受けて自分なりに考えをより深め広げたり、相手の考えについて意見を述べたりできるようにする必要がある
- (2) イメージはできるが、それを言語化することを苦手に思う児童が多いため、表現力を身に付けさせることが必要である。

という課題が挙げられた。

これらの成果と課題を踏まえ、今年度は国語科を中心に、自分の考えを表現しながら児童が主体 的に学び合い、互いの考えを広げ深める授業づくりを目指すとともに、他教科でも学んだことを生か せることができる児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

2 研究のねらい

自分の考えを豊かに表現し、共に学び合う子どもの育成をする授業のあり方を国語科における授業 実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

自分の考えが相手に伝わるような話し方の指導をするとともに、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の工夫をすることによって、自分の考えを豊かに表現し、共に学ぶ子どもの育成をすることができる。

4 研究内容

(1) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導の工夫ア 「問い」や思考する必要感をもたせる手立て

- (2) 児童同士が考えを深め広げるための工夫
 - ア 話合いのもたせ方の工夫(話合い場面設定、ペア、グループ、全体)
 - イ 説明のさせ方の工夫

(図や資料を使って説明、 用語 [既習事項、教科の専門用語、本文からの引用など] を使って説明、 理由や根拠を明確にして説明)

5 研究の経過

(1)授業仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名・授業者	
9	2 7	第1回授業研究(6学年) 国語 作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう 「やまなし『資料:イーハトーヴの夢』」 教諭 山口 義始	
1 1	2 7	第2回授業研究(3学年) 国語 れいの書かれ方に気をつけて読み、それをいかして書こう 「すがたをかえる大豆」 教諭 粟津 綾子	

(2)一般研修等

月	日	内容	
6	2 8	不審者対応について (演習) 講師 八戸警察署生活安全課の方々	
8	2 1	AED の演習 講師 八戸市消防署桔梗野分遣所の方々	
1 1	1	特別な配慮を要する児童生徒の対応の仕方や支援の在り方について 講師 八戸市教育委員会こども支援センター 主任指導主事 横沢 吉則 先生	
1	1 2	1人1台端末の活用について (演習)講師 本校教諭 安井 康智本校教諭 山口 義始	

6 研究の成果

- (1) ユニバーサルデザインを意識して授業を組み立てたことは、学習課題に対して考える手立てとして有効であり、どの児童にも分かりやすかった。
- (2) 授業における「しかけ」を取り入れたことは、児童が必要感をもって意欲的に問題解決に臨むことができた。
- (3) 話合いの場面を設定したことは、様々な考え方に触れ自分の考えを広めたり深めたりすることに繋がった。

7 研究の課題

- (1) 自分の考えをもつだけではなく、豊かに表現させるための具体的な工夫。
- (2) 児童なりの考えをもたせる工夫。
- (3) 意見交流の活動のさせ方の工夫。

(記入者 金田 光子)

自分のこととして課題解決する子の育成

~解決の見通しをもたせるしかけや振り返りをさせる場の工夫~ (2年計画の2年次)

校長 長倉 一志

1 研究主題について

本校では、教育目標である「かしこく やさしく たくましく」の具現化のために、昨年度は「自分のこととして課題解決する子の育成~解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫~」という主題を掲げブロックごとに算数科の授業研究を行い、研究を進めた。その結果、次の3つの成果があがった。①解決の手がかりとなりそうなことを児童の気付きなどから確かめ、解決の見通しをもたせてから自力解決をすることによって、児童が意欲的に学習に取り組むようになってきた。②前時の振り返りを生かして本時との違いを見付けるなどし、本時のめあてを明確にしてから取り組むというパターン化した学習の流れを行うことによって、見通しをもって、安心して学習に取り組むようになってきた。③導入段階を前時の学習を振り返る場、展開段階をこれまでの学習を振り返る場、終末段階を本時の学習を振り返る場といった振り返りの捉え方の幅を広げた授業づくりをすることで、学びの確認を必要な時にすることができた。しかし、児童の実態として、「粘り強く取り組むことが苦手、集中が長く続かないなどの理由から、基礎的・基本的な知識・技能が定着していない。」ことと「自主性・自立心が弱く、自分の考えをもてない。自分の考えがあっても自信をもてず話せない。」ことが課題として残った。また、学力諸検査等においても、知識・技能の結果は高いとは言えない。「身に付いた」という実感をもてず、主体的に学習に取り組む態度も弱い児童が一定数みられた。

そこで、今年度は、解決の見通しをもたせるしかけや振り返りをさせる場の工夫をしていきたいと考えた。解決の見通しをもたせるしかけとして、①視覚支援、分割した提示、一部を隠すなど、問題把握の時のしかけ ②既習と未習のズレ等から問いをもたせ、めあてを明確にするしかけ③児童の気付きや思考を生かした、解決 の見通しをもたせるしかけを行い、自力解決のスタート時に全児童の手が動き出すことを目指す。また、振り 返りをさせる場の工夫として①思考が変化したことを視覚化する②振り返りを行い、自分の変容に気付いたり、互いに認め喜び合ったりできる場の工夫をする③児童のよい考えや態度を価値付けすることに取り組む。このような工夫をすることで、「自分のこととして課題解決する子の育成」に迫ることができると考える。

今年度の学校目標は「より良く変容し互いに認め喜び合える児童の育成」である。基礎的・基本的な知識・技能の定着に努め、学習における意欲の向上を図り、学力全体の底上げをしていきたい。

2 研究のねらい

よりよく変容し、互いに認め喜び合いながら、自分のこととして課題決する子を育成するために、解決の 見通しをもたせるしかけや振り返りをさせる場の工夫をすることが効果的であることを、授業実践を通して明 らかにする。

3 研究仮説

- (1) 解決の見通しをもたせる場面では、問題把握の時のしかけ、めあてを明確にするしかけ、児童の気付きや 思考を生かした解決の見通しをもたせるしかけを工夫することで、主体的に取り組むことができると考え る。
- (2) 振り返りの場面では、前時までの学習や生活経験、既習事項を想起させたり、できるようになったことや身に付いたことの確認をしたりする場を工夫することで、学習内容の習得や思考の価値付けを実感することができると考える。

- (1) 主体的・対話的で深い学びを実現する指導の工夫・改善
 - ア 問題解決的な学習を取り入れた授業づくり
 - イ 言葉で表現できる力を伸ばす授業づくり
 - ウ 特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり
 - エ 1人1台端末を活用した授業づくり

- (2) 基礎的・基本的な知識・技能の定着、表現力の育成
 - ア 家庭学習パワーアップ週間や算数科パワーアップテストの実施等による知識・技能の定着
 - イ 読書の充実
 - ウ 朝の活動を活用した基礎的・基本的な知識・技能の定着
- (3) 学習に向かう姿勢(集中力・粘り強さ)の育成
 - ア ねぎしっ子スタンダードを活用した基礎的な学習規律の定着

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要 等		
6	7	第1回 授業研究		
		4 学年「垂直・平行と四角形」 授業者 教諭 大嶋 和明		
7	1 1	第2回 授業研究(要請訪問)		
		1学年「ひきざん(1)」 授業者 教諭 古里 侑香子		
		講師 八戸市教育センター		
		主任指導主事 小向 一樹先生		
1 1	2 9	第3回 授業研究		
		6 学年「場合を順序よく整理して」 授業者 教諭 飯村 優希		

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等		
6	1 4	「AED等の使用方法について」		本校養護教諭 中山 夏子
8	2 3	「特別支援教育を取り入れた授業づくりについて」		本校教諭 中村 久美子
				宮崎 千登理
				堀 貴子
				本校講師 川井 和泉
1 0	2 5	「体育科・実技研修」		八戸市総合教育センター
				主任指導主事
				石井 利正先生

6 研究の成果

- (1) モニターを用いたり、身近な題材を使ったり、教師がわざと誤答をしたりするなど、問題把握時のしかけを工夫することで、児童が興味をもって、学習に取り組むようになってきた。
- (2) 既習事項等をもとにめあてを明確にし、解決の見通しをもたせるしかけを工夫したことで、同じスタートラインに立って自力解決に向かわせることができ、児童が学習に意欲的に取り組むようになってきた。
- (3) 様々な場面で振り返りをさせることができるようになってきた。終末だけではなく、導入時や展開時にも振り返りをしながら授業を進めていくことで、児童の実態に合わせながら、学習を習得させることができた。

7 研究の課題

- (1) 解決の見通しをもたせ、自力解決をスタートさせる際、全児童の手が動き出すことを目指していたが、上位の子には丁寧すぎたり、下位の子にはより丁寧な見通しのもたせ方が必要だったり、手ばなすタイミングが難しかった。
- (2) 終末の振り返りは、時間の確保が難しく、思考の価値付けを実感させるところまではたどり着けないことが多かった。導入・展開時の時間配分等のバランスを考えた授業の組み立てをしていきたい。また、書かせる際には、内容項目の吟味・系統性を示していきたい。

(記入者 岩城 裕美子)

主体的で対話的な授業づくり

~多様な考えをつなげて話す楽しさ~ (3年計画の4年次)

校長 新山 聡

1 研究主題について

本校では、教育目標「学ぶことの喜びと確かな力をもつ是川の子」、努力目標「考えを表現する子」を掲げ、主体的に学習に取り組む子供を育てることを目指している。そのためには、児童が「学びたい、話し合いたい」という意欲をもって学んでいける授業づくりをすることが大切である。問題解決的な学習の中で、対話を通して学ぶ楽しさを感じさせることにより、主体的に学習に取り組む子供を育てることができると考え、本研究主題を設定した。

昨年度までに、「主体的で対話的な授業づくり」という研究主題のもと、問題解決の必要感をもたせる発問や題材の提示の工夫を行い、児童が自分の考えをもって議論ができるよう促すことに取り組んできた。その成果は以下のとおりである。

- ○児童が身に付けるべき学びの力を明確にし、問題解決的な学習が成立するような授業づくりを行った。特に、解決しなければならない問題を児童自らが見つけられるように資料提示や発問などを工夫したことにより、児童は最後まで問題解決への意欲をもって取り組んだ。さらに、その意欲がきっかけとなり、自分の考えを友達の考えとつなげて話す様子も見られるようになった。
- ○他者の意見と自分の考えをつなげて話し合う力を高める指導を工夫した。その際、教師の働きかけ の工夫として、構造的な板書を含めたファシリテーションが有効だと分かった。ファシリテーショ ンの工夫により、比較、類推、言い換え、付け足し、仮定などのものの見方・考え方ができるよう になった。そして、児童同士の話合いがつながるようになり、「つなげて話す」ことへの児童の意 識が高まった。

今年度は昨年度同様に、つなげて話す意識をもたせる働きかけの工夫をして、主体的で対話的な授業づくりを行っていく。そして、みんなで話し合って解決する楽しさを繰り返し(日常的に)感じさせることにより、主体的で対話的な学びができるように育てようと考え、副題を「多様な考えをつなげて話す楽しさ」と設定した。

2 研究のねらい

児童が話合いを通して全体で課題を解決する楽しさを感じさせるため、授業づくりにおいて教師の働きかけを工夫し、主体的で対話的な学びの実現に向けた指導の在り方について、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

各教科等での授業及び日常の指導の中で、他者の意見と自分の考えをつなげて話し合う力を育成することを意識した日常の指導を行うことによって、主体的で対話的な学びを実現することができるのではないかと考える。

- (1) 教材の特性(価値)及び系統性や児童の実態、学習内容から、児童が身に付けるべき(育てるべき)学びの力を明確にし、児童に問題解決の必要感をもたせ、児童の思考を促す方法を工夫する。
- (2)各教科等での授業及び日常の指導の中で、他者の意見と自分の考えをつなげて話し合う力を育成することを意識した指導を行う。

4 研究内容

- (1)児童の問題解決への意欲を喚起する発問・提示の工夫
- (2)ファシリテーションを中心とした教師の働きかけの工夫(構造的な板書も含む)
- (3) 多様な考えを共有し、自分の考えを深めていくことができる話合いの工夫

5 研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等	本時の目標
6	26	第1回授業研究(要請訪問)	カードの点をつないで色々な四角形
		4年1組 算数「台形と平行四辺形」	をつくり、辺の平行関係に着目して分
		授業者 大沢 泰尚	類する活動を通して、台形と平行四辺
		講師:八戸市教育委員会教育指導課	形の性質について理解を深める。
		主任指導主事 小向 一樹 氏	
10	25	第2回授業研究	三角形の紙を2つに切って三角形や
		2年1組 算数「三角形と四角形」	四角形をつくり話し合うことを通して
		授業者 松村 典佳	切り方の共通点を見つけ、三角形や四
			角形についての理解を深める。
11	29	第3回授業研究	いくつか選んで組み合わせるときの
		6年1組 算数「場合を順序よく整理して」	場合の数が何通りあるかを、順序よく
		授業者 井沼 志穂	整理して求めることができる。

(2)一般研修

月	日	内容・講師・概要等
7	5	救命救急講習会(講師 八戸消防署 署員)
8	22	是川縄文遺跡文化についての研修会(講師 是川縄文館 副参事 小久保 拓也 氏)
9	6	校内研テーマ「多様につなげて話し考える子の育成」についての勉強会 (講師 是川小学校 校長 新山 聡)
9	27	先生対象の合唱指導法講習会 (講師 尚美学園大学大学院 名誉教授 竹内 秀男 氏)

6 研究の成果

- (1) 既習との違いに気付かせたり、上手く解決できない場面を提示したりするなど、児童の問題解決 への意欲を喚起する発問・提示の工夫に取り組んだ。前向きに課題に取り組む児童の姿が見られ、 主体的に問題に関わろうとする力が高まった。
- (2) 構造的な板書をもとにした話合わせ方として、児童の考えをホワイトボードに書き出させて比較する、出された児童の考えを黒板上で対比させて考えさせる、板書と児童のノートを一致させ個人・グループで思考させた上で、意味や良さについて学級全体で考えさせる、というように構造的な板書について提案性のある授業に取り組んできた。研究授業を重ねるにつれて、日常の授業でも板書を工夫し、話合いを活性化させる意識や力が高まった。また、授業の展開に合った板書や児童の意見を生かした板書の工夫は、児童同士で意見を聞いたり、自分の考えと比較して話したり、板書を見て考える場面が多くみられるようになり、つなげて話す力の育成に役立った。

7 研究の課題

- (1) 学習がスムーズに進展しない場面があった。原因の一つとして、対話の中での教師の発問による 焦点化が上手くいっていないことが考えられる。着眼点をはっきりさせて意見を引き出したり、 話し合わせたりするなど、授業者がその時間の目標をより意識しながら、その場に適した発問を 考え投げかけていく必要がある。
- (2)問題意識をもって課題に取り組む力は育ってきたが、自力で最後まで解決しようとする点に弱さがある。問題解決的な学習を繰り返すことで対話して学ぶことへの興味・関心を高めさせていくことが必要である。

(記入者 大沢 泰尚)

自分の考えをもち、進んで表現する子供の育成

~伝え合う場を大切にした授業づくりを通して~

(3年計画1年次)

校長 在家 正行

1 研究主題について

本校では、教育目標「自分をのばす」の達成に向け、教育活動全体を通して、自ら進んで自分の資質や 能力を伸ばす児童の育成を目指している。

昨年度の教育課程編成会議において「与えられた課題に対しては、素直に真面目に取り組むことができるよさをもっているが、よい考えをもっていながら自信をもって話すことができない」という児童の実態が確認された。

昨年度は、同様の児童の実態に対し、「主体的に学ぶ」という観点で、問いをもたせる授業づくりに取り組み、導入場面において知りたい・やってみたいという意欲をもたせることができた。しかし、共有した学習課題に対して、自分の考えを伝えながら児童が主体となって課題解決する学習活動において先のような実態にあり、改善の必要がある。

そこで、頭・心・体つくりの側面から児童の資質や能力を伸ばし、全人的な発達・成長を実現したいと考え、学校目標を「自分で考え、課題解決する力をもった子供の育成」と設定し、頭つくりの重点施策「自分の考えや立場を明らかにする授業づくり」とした。

本研究を頭つくりの重点施策を具現するための取組と位置付け、研究主題を設定した。

2 研究のねらい

伝え合う場を大切にし、主体的に課題解決ができるような学習活動を工夫することにより、自分の考えをもち、進んで表現する子供を育成できることを授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

伝え合う場や学習活動を工夫し、友達の考えのよさに共感する姿勢を大切にした授業づくりをすることにより、自分の考えをもち、進んで表現する子供を育成することができる。

- (1) 自分の考えを表現しようとする授業過程
 - ア 自分の考えをもつ時間や場を設定する。
 - ・立場の表明 ・立場の再表明 ・自力解決 ・考えをまとめる 等
 - イ 表現方法を指導する。
 - ・話し方 ・書き方 ・ネームプレート ・トークトレーニング ・反応の仕方 等
 - ウ 表現する場を工夫する。
 - ・ペア ・少人数グループ ・自由交流 ・ゲーム的な活動 等
 - エ 学習活動を工夫する。
 - ・話し合い ・教え合い ・読み合い ・感想交流 ・共同制作 等
- (2) 共感する力を高める指導
 - ア 自分の考えを安心して表現することができるように、友達の考えに共感する態度を育てる。
 - ・友達の考えを受け止める ・友達の考えに反応する ・友達の考えのよさに気付く

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者 等	
6	2 6	第1回授業研究【社会】(要請訪問) 授業者 3年3組 教諭 赤井理江 助言者 八戸市教育委員会 教育指導課 青木拓哉 主任指導主事 題材名「農家の仕事」	
1 0	2 5	第2回授業研究【道徳】 授業者 2年2組 教諭 岩村恭也 題材名「のこぎり山の大ぶつ」	
1 1	2 2	第3回授業研究【社会】 授業者 5年2組 教諭 河原木 怜奈 題材名「これからの工業生産とわたしたち」	

(2) 一般研修

月	日		内容・講師・概要 等
5	2 4	対話を生む学習活動について	講師 八戸学院大学 教授 木村 浩哉 先生
6	2 8	AED 講習会	講師 三条小学校 養護教諭 安田 陽子 先生
1	1 7	ネット情報モラルについて	講師 みらいクリエイド 代表 森 淑乃 先生

6 研究の成果

- (1) 自分の考えをもつまでの様々な手立て(時間の確保、自力解決、発問、学習形態など)を工夫したことにより、自分の考えをもち、それを伝えようとする態度が育ってきた。
- (2) 場の設定 (ペア、少人数グループ、同じ立場のグループ等)を工夫したことにより、学習への参加 意識が高まり、自分の考えを進んで表現する児童が増えた。また、子供同士の交流によって、安心 して自分の考えを伝えたり友達の考えを楽しく聞いたりすることができた。
- (3) ネームプレートや赤白帽子、〇〇メーターなどで立場の表明をすることにより、一人一人がはっきりと学習課題を捉え、その後の学習に主体的に取り組むことができた。

7 研究の課題

- (1) 自分の考えをもつことはできたが、進んで発表できない児童やどうやって表現してよいか分からない児童がいる。話すことが苦手な児童も自分の考えを十分に表現することができるように、様々な表現方法を試みていく必要がある。
- (2) 自分の考えを表現することはできるが、友達の考えを聴いてさらに自分の考えをもつことや伝えることに課題がある。目的意識をもって聴くことや自分の考えと比べたり友達の考えに共感したりしながら聴く態度を育て、自分の考えを広げられるような学び合いを充実させたい。

(記入者 西村 悦子)

「学びに向かう力の育成」

~課題を自分事にする授業づくりを通して~

(3年計画の1年次)

校長 楢 木 慎 一

1 研究主題について

(1) 教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「めあてをもって生き生きと学ぶ子に」、努力目標に「進んで楽しく学ぶ」を掲げ、教育活動に取り組んでいる。今年度は学校目標を「自ら課題に向かう 西園っ子(決めて挑戦)」とした。その具現化のために、課題解決に向けて共に考え、学習活動を振り返ることで身に付けた力を自覚したり、新たな課題を設定したりできる「学びに向かう子」の育成を目指している。

(2) これまでの研究経過から

本校では研究主題を「学びに向かう力の育成」と設定し、「学びに向かう力」を、「見通しをもって学習に取り組む力」「他者との関わりの中で、自分の考えを広げ、深める力」「学習活動を振り返って次につなげる力」ととらえ、授業実践に取り組んだ。

その結果、導入場面における課題の焦点化から、課題への必要感をもたせることができたことや、 振り返りの項目提示から学習した内容を意識させたり次時への意欲付けが図られたりしたことが成 果として挙げられた。しかし、課題の難易度によってあきらめたり、学習意欲を維持することが難 しかったりする姿が見られた。

そこで、今年度は学びを自分事としてとらえさせることを重点とし、研究を展開していく。児童が自ら課題を発見し、問題解決に向かうための「見通し」をもたせる手立てを意識した研究実践を積み重ねることで、学びに向かう力が育つと考えられる。

2 研究のねらい

児童が学びを自分事としてとらえるための手立てを工夫することにより、学びに向かう力を育成できることを、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

学習に対する見通しをもたせる際の手立てを工夫することで、児童一人一人が学びを自分事としてとらえることができ、学びに向かう力を育成することができる。

4 研究内容

研究のねらいを達成するために、支持的雰囲気の学級づくりを基盤に、次の3つの内容から学習 課題設定の工夫を選択し、取り入れた授業実践を通して検証する。

- (1) 既習事項を生かした学習課題設定の工夫
- (2) 生活場面と関連付けた学習課題設定の工夫
- (3) 立場や意思を明確にした学習課題設定の工夫

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名	概要
5	Ľ	第1回授業研究(4学年 算数科)授業者 教諭 太田 麻木	自分がかいた図形を用いたり、既習事項の 「垂直・平行」に目を向けさせたりすること
		題材名 垂直・平行と四角形	により、図形を仲間分けすることを児童から 引き出して、見通しをもちながら取り組ませ ることができた。
6	7	第2回授業研究(要請訪問 3学年 算数科) 授業者 教諭 木村 彩佳 題材名 あまりのあるわり算 助言者 小向 一樹 主任指導主事	実物のあめを提示したうえで、実生活で物を分ける場面を想起させることで児童に意欲をもたせながら取り組ませることができた。また、考え方を共有したうえで全員に選択させ、立場を表明させたことにより見通しをもって問題を解決することができた。
11	16	第3回授業研究(4学年 算数科) 授業者 教諭 加藤 愛理 題材名 面積	既習の長方形や正方形を複合図形の形に なるよう意図的に提示したり、なんのために 長さを知りたいか問い返したりすることに より、児童自身が考えていることを声に出さ せ、課題を自分の言葉にしたうえで取り組ま せることができた。

(2)一般研修

		* * * * *=	
月	日		研修内容
6	28	救急救命講習会	(講師 八戸消防署尻内分遣所職員)
7	19	QUに関する研修会	(講師 こども支援センター 原 寿 先生)
8	22	幼稚園訪問	(講師 尻内保育園職員 ことり保育園職員)
11	29	特別支援学級公開	本校教諭 いちょう学級 長野 晃子
			ゆりのき学級 木村 真由美
2	15	学力テスト分析	

6 研究の成果

- (1) 既習事項を生かした学習課題設定を工夫することにより、学習のつながりや思考のズレを意識させ、見通しをもちながら取り組むことのできる課題とすることができた。
- (2) 課題を生活場面と関連付けて提示することにより、経験をもとに考えることの容易さに気づかせ、より自分の言葉や考えを使った表現をさせることができた。
- (3) 立場や意思を明確にさせることによって、個々の考えを友達と交流することの良さに気づかせ、 学習への参加意欲の向上と主体的に学ぶ楽しさを実感させることができた。

7 研究の課題

- (1) 教師が教材の特性や系統性、児童の実態等の理解を深め、学びの過程を意識した学習場面の設定の仕方を検証することで、学びに向かう力の育成を図る必要がある。
- (2) 個々の考えの変容を明確にさせる手立て(ファシリテーション等)の研究を深め、実践・検証することで、他者との関わりの中で自分の考えを広げ、深める力の育成を図る必要がある。

(記入者 岩間 章吾)

主体的に学び、考えを深め合う子の育成

~学習方略(まなびかた)を活用した授業を通して~ (3年計画の2年次)

校長 八嶋 俊次

1 研究主題について

本校では、教育目標に「豊かな心と学ぶ意欲をもち、たくましく生きる子」、努力目標に「よく考え 学習する子、思いやりをもつ子、体をきたえる子」を掲げ、教育活動を展開している。また、今年度 の学校目標を「笑顔があふれ、生き生きと活動する学校~子どもが笑顔で家に帰る~」とした。

本校の児童は、明るく素直で、学習意欲の高い児童が多く、与えられた課題や指示されたことには 前向きに取り組んでいる。一方、基礎学力の個人差が大きいことや話を正しく聞き取る力、話す力が 不足している点、また、児童の主体性が十分ではない点に課題がある。そこで、児童が学び方を活用 し、人とつながりながら協働的に学ぶ授業づくりを研究していく必要があると考えた。

昨年度は、問題・教材との対話、他者との対話、自分との対話のある授業を工夫することにより、「主体的に学び、考えを深め合う子」の育成を図ってきた。それにより、やや抵抗感のある問題を提示すること、児童の表明した言葉をつなげて課題設定をすることが「主体的に学ぶ」意欲を高める条件になると分かった。また、学習方略(まなびかた)※を取り入れることにより、それまで受け身になりがちでアウトプットが得意ではなかった児童にとっても、考えを表明しやすくなったり、全体としても共有しやすくなったりし、それらが自分の考えを深めさせることにつながるということが分かった。しかし、課題設定の仕方や共有のさせ方によっては、児童の意欲を減退させてしまう場合もあり、課題が残った。

そこで、今年度は昨年度までの研究の成果の上に、何を提示して、何を考えさせるのか、どこまで話させるのかのバランスをとり、児童の意欲を持続させるとともに、児童自身が「こうすればできる」という学習方略を活用できるような授業づくりを進めていきたい。教科としては、国語、社会、理科、算数、生活とする。

※本校においては「まちがいを大切に」「なろうミニ先生」「一言コメントをしよう」「かこう図や絵」 「大切なことばは何」の5点の頭をとって、「まなびかた」とし、児童にも意識させていく

2 研究のねらい

児童の「主体的に学び、考えを深め合う力」を育てるための効果的な指導の工夫について授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

知的好奇心を高め、思考が動き出す動機づけから、課題設定へつなげる工夫をしたり、学習方略を活用して考えを深めさせるための工夫をしたりすることにより、「主体的に学び、考えを深め合う力」を育むことができる。

4 研究内容

- (1) 知的好奇心を高め、思考が動き出す動機づけから、課題設定へつなげる工夫
- (2) 学習方略(まなびかた)を活用して、考えを深めさせるための単元構成や展開の工夫

5 研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等	概要
6	2 2	3学年公開授業 まいごのかぎ 授業者 大嶌 禎子	出来事や主人公の気持ち、考え方が表れているところに 一人でサイドラインを入れたり、全体で大切な言葉につ いて話し合ったりする学び方を続けることによって、登 場人物の考え方などについて捉えることができた。

7	6	4学年授業研究 垂直・平行と四角形 授業者 中村 好秀	2直線に平行な補助線をかき加え、図から分かることや キーワードをかき込んだり、同じ大きさの角に印や色を つけたりする活動を行うことによって、角の大きさを求 めるまでの手順を説明することができた。
9	6	5 学年公開授業 倍数と公倍数 授業者 田村 享太	数の変化を数直線図に書き入れることや、公倍数から辺の長さが何 cm のとき正方形を作ることができるのかを説明させる学び方を取り入れることによって、数の構成について考察する力を養うことができた。
9	2 7	2学年公開授業 どうぶつ園のじゅうい 授業者 沼舘 優子	教材文に線を引くことにより、獣医がその仕事をするわけや工夫がどこに書いてあるか自分の考えをもたせることができた。友達にインタビューをすることよって、考えを確かなものにさせることができた。
1 1	1	1学年公開授業 じどうしゃくらべ 授業者 森山 優	「しごと」には赤線、「つくり」には青線を引かせることによって、接続詞をはさんで2つの問いに対する答えが書かれていることに気付かせることができた。また、自動車によって「つくり」が異なるのは、それぞれの「しごと」に関係していることを、視覚的に理解することができた。
1 1	7	6 学年授業研究 比とその利用 授業者 井畑八千代	単元を通して、一つ一つの場面に即して、自分の考えを図や絵で表現したり、筋道立てて説明したりしながら割合が比で表された問題を解決することを通して、割合の見方・考え方を深めると共に生活や学習に活用しようとする態度を養うことができた。

(2)一般研修

月	日	内容・講師・概要等	
7	2 8	「デジタル・シチズンシップ〜善き使い手になるための学び〜」 講師:メディア教育研究室代表理事 今度珠美氏	
1 1	1 5	「児童が自ら学習方略を活用する授業づくりについて」 講師:広島大学大学院准教授 深谷達史先生	
1 2	2 0	AI ドリルについて 講師:モノグサ株式会社 水野浩之氏	
1	1 1	デジタル教材について 講師:新学社 販売促進課 佐野氏	

6 研究の成果

- (1)問題提示を工夫するとともに考えをもつのに必要なポイントを先に出すことによって、主体的に 学ぶ意欲の高まりが見られた。また、課題が焦点化され、児童が何を考えればいいのかが明確に なることが分かった。
- (2) 学習方略活用を積み重ねることによって、個に応じた学びが可能になるとともに、一人では得られない学びの深まりにつながると分かった。

7 研究の課題

- (1) その気にさせる導入と学習方略の活用で実現した学びの楽しさや児童の主体性向上、考えの深まりが学力の向上につながっていく必要がある。
- (2) 子どもの実態の理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導、支援することを通して個別最適な学びを進める力を育成したい。

(記入者 大嶌 禎子)

関わり合い、考えを深め、解決する子の育成

~主体的に学び合う活動の工夫を通して~(3年計画の3年次)

校長 吉田 朝子

1 研究主題について

(1) 学校目標具現化の立場から

本校の今年度の学校目標は、「自分を大切に 友だちや身の回りも大切にする子の育成」である。主体的に問題解決に取り組むためには、問いに向かって自分なりの考えをもつことが重要となる。自分の考えや立場を明確にさせることは、「自分を大切に」することにつながる。また、学び合いの場面で対話的活動を設定し、関わり合いながら考えを深めさせるには、「友だちを大切に」する態度の育成が不可欠である。よって、本主題に取り組むことは、学校目標の具現に資するものである。

(2) 研究の経過から

これまで、「関わり合い、考えを深め、解決する子の育成〜主体的に学び合う活動の工夫を通して〜」という研究主題で取り組んできた。導入段階では具体的な問いや視覚に訴える問題提示を行うことで、児童が問いを意識して主体的に学習課題に取り組むことができた。さらに、対話的活動において教師の声がけや学習形態の工夫をすることによって、児童の考えの整理、理由付けが促された。「書く」「話す」を適切に取り入れた振り返りでは、学び合いの積み重ねや思考の深まりが見られ、問題解決能力が向上した。

このように、関わり合いの中で児童の主体性と問題解決力は向上したものの、個々のもつ問いの把握と対話的活動における「話す」力の個人差への対応は未だ十分とは言えない。自力解決から対話的活動への展開の時間的比重、話し合う内容の焦点化などについて研究を進める必要がある。

そこで、今年度は3年計画の3年次として研究成果を生かしつつ、すべての教科・領域の実践において、新たな学びのわざ「自分の考えをもつ 自分の考えを説明する 友だちの考えを取り入れる」を生かした対話的活動と、問題解決へ迫るための効果的な指導のあり方について研究を進める。また、すべての通常学級において研究主題を目指す授業を公開することによって、目的意識をもって問題解決に向かう授業づくりに、学校全体として取り組んでいく。お互いの意見を大切にした対話的活動への取組のもと、考えの広がりや深まりとともに問題解決に向かう目指す児童像に迫っていきたい。

2 研究のねらい

関わり合いの中で、考えを広げたり深めたりして、主体的に学ぶ児童を育てるための指導の在り方を授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

教師の働きかけや発問を工夫して、関わり合いの中で考えを広げたり深めたりする授業を日常化することにより、主体的に問題解決に向かおうとする児童を育成することができる。

4 研究内容

- (1) 主体的に問題解決に向かわせる指導の在り方。
 - ア 導入場面で、問いをもたせる課題(問題)提示の工夫。
 - イ 問題解決へ向かわせるための対話的活動の工夫。
- (2) 「新学びのわざ3」への取組による主体的に学ぼうとする態度の育成。
- (3) 学習用語などの掲示による、学習の手がかりになるような環境の整備。

5 研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等	全体会等
4	5		全体会(研究の概要、研究主題
			及び内容、年間計画などの確認)
6	2	授業公開①算数 3年1組 教諭 田島 結希子	協議会なし、視点表のみ
6	1 5	授業公開③算数 2年1組 教諭 國分 裕子	協議会なし、視点表のみ
7	1 1	授業公開④算数 6年1組 教諭 吉田 千春	協議会なし、視点表のみ
9	1	授業公開⑤道徳 5年1組 教諭 大村 陽奈	協議会なし、視点表のみ
9	2 0	授業公開⑥国語 1年2組 教諭 澤田 実希	協議会なし、視点表のみ

9	2 7	第1回授業研究(要請訪問)	協議会あり
		算数 2年2組 教諭 埓見 駿介	
9	28	授業公開⑦算数 3年2組 講師 中森 芳江	協議会なし、視点表のみ
1 0	3 0	授業公開⑧算数 1年1組 教諭 長谷部 幸恵	協議会なし、視点表のみ
1 0	3 1	第2回授業研究	協議会あり
		国語 6年2組 教諭 金枝 成弥	
1 1	2 1	授業公開⑨理科 4年1組 教諭 永田 柊子	協議会なし、視点表のみ
1 1	2 7	授業公開⑩保健体育 4年2組 養護教諭 井上 佳林	協議会なし、視点表のみ
1 1	3 0	授業公開⑪外国語 3年1組 教諭 桑田 勝護	協議会なし、視点表のみ
1	1 5		全体会 (成果と課題、来年度の確認)

(2) 一般研修

月	В	内容・講師・概要等	
4	2 6	道徳科に関しての研修 担当:本校校長 吉田 朝子 県外研修報告会 担当:本校教諭 吉田 千春	
5	2 4	「救急処置とAED実技練習」、一次救命処置、応急手当ての研修 担当:本校養護教諭 井上 佳林	
5	2 9	特別支援学級児童への理解深長、合理的配慮の在り方、通常学級における配慮 授業公開 楓学級 教諭 櫛引 恵 桔梗学級 教諭 川村 希代子	
5	3 1	個別の指導計画・支援計画について、生徒指導について 担当:本校教諭 櫛引 恵	
6	1 4	「通常の学級における特別な配慮が必要な児童への支援についての研究」 〜学びにくさのある児童の教育的ニーズの把握を通して〜 講師:白銀小学校 淡路 衣津季 先生	
6	2 0	水泳指導・プール使用に関しての研修 担当:本校教諭 金枝 成弥	
7	1 9	幼保こ小連携推進事業 こもれびの森保育園 公開保育参観	
8	2 3	県外研修報告会担当:本校教諭 吉谷 恵理子ICT活用に関する研修担当:本校教諭 桑田 勝護	
8	3 0	県学習状況調査の分析・考察	
1 0	1 2	問題解決的な授業づくり 講師:教育指導課 竹井 亮 主任指導主事	
1 2	6	幼保こ小連携推進事業 桔梗野保育園 参観	
2	1 4	県外研修報告会 担当:本校教諭 大村 陽奈・永田 柊子・金枝 成弥	

6 研究の成果

- (1) 導入場面において、身近な題材や写真を用いたり言葉を隠したりして多様な仕掛けを行うことにより、興味を引き出し問題解決に向かわせることができた。対話的活動では、形態やワークシートを工夫することで、話合いの充実と思考の深まりが見られ問題解決力が向上した。
- (2) 自分の考えを説明する際に、教師が意図してお互いの考えを補足させたり、柔軟な考え直しを促したりすることで、主体的な学びが深められた。
- (3) 学習内容の掲示により前時の確認や問題解決の手掛かりにできた。また、高学年では掲示をもとにステップアップして「分からないことを、さらに自分で調べる」という、学びの広がりにもつなげることができた。

7 研究の課題

- (1) 個人差を考えると、毎回、問題意識をもたせて同じスタンスで学習活動を行うのは難しいため、仕掛け作りの工夫を継続して行うとともに、対話的活動の際には、その目的を確認した上でペアやグループ、お散歩などの形態を効果的に取り入れ、授業展開していく必要がある。
- (2) 自分で考えをもつことが難しい児童のためには手掛かりを工夫して、また、個々の考えの変容を把握できるワークシートを作成したりして、「学びのわざ3」の流れを確実に踏んでいける研究をしていく必要がある。
- (3) 学年、学級の実態に応じて掲示場所や分量などを考慮して、集中を妨げないようにより学びやすい環境を目指していく必要がある。

(記入者 田島 結希子)

主体的に学び合う力の育成

~複式・少人数における問題解決の力を育成する授業実践を通して~

(3年計画の3年次)

校長 堤 司

1 研究主題について

本校では、教育目標である「いきいき学びあう子」「なかよくふれあう子」「ほん気できたえあう子」の具現化のために、「主体的に学び合う力の育成」を研究主題とし、解決の見通しをもたせるための課題提示の工夫と ICT の活用について研究を進めてきた。その結果、問題提示の方法を工夫したり学習の焦点化を図ったりするなどの手立てを講じることが、問題解決への意欲や見通しにつながり、一人一人に自分の考えをもたせることができた。また、学年の実態や学習場面に応じて ICT の活用方法を工夫したことで、児童が情報を整理したり考えを共有したりすることができた。

しかし、話合いの場面において、自分の考えを伝えることはできるものの、考えを広げたり深めたりすることが十分ではないことが課題として挙げられた。児童が考えを広めたり深めたりするためには、問いの意識や意欲をもたせたり、自分の考えや立場をはっきりとさせたりしながら、問題解決の必要感や切実感を高めることが必要であると考える。話合いの前段階において、自分の考えを伝えたい、友達の考えを聞きたいという気持ちの高まりが見られるように指導の工夫をしていかなければならない。

そこで、今年度は、導入場面でしかけを講じながら、児童が問いへの意欲を高めたり、課題解決までの見通しをもてるようにさせていきたい。また、話合いの場面において、児童の必要感や切実感を喚起し、互いの考えを広げたり深めたりすることができる指導の工夫をし、「主体的に学び合う力」を目指していきたい。

2 研究のねらい

自分の考えをもち、進んで問題解決するための効果的な指導の在り方を授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

進んで問題解決するための指導方法を工夫することにより、主体的に学び合う力を育てることができる。

- (1) 問題解決への意欲と見通しをもたせるための導入場面の工夫
- (2) 互いの考えを広げたり深めたりするための話合い場面の工夫

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年 ・ 授業者等 全体会等		
6	7	第1回授業研究(5・6年) 授業者 高島 庸		
		算数 5年「整数÷小数」 6年「逆数」		
6	2 3	八戸市教育委員会教育指導課・総合教育センター訪問		
7	1 9	第2回授業研究(1・2年) 授業者 山田 訓子		
		国語 1年「すきなもの、なあに」 2年「夏がいっぱい」		
1 1	8	八戸市小学校教育研究協議会(2)複式教育分科会		
		兼 三八へき地・複式教育研究大会		
		授業者 中川 健郎		
		算数3年「1けたをかけるかけ算の筆算」4年「がい数のたし算・ひき算」		
		授業者 高島 庸		
		算数5年「単位量あたりの大きさ」6年「拡大図と縮図のかき方」		
1 2	1 3	第3回授業研究(3・4年) 授業者 中川 健郎		
		算数 3年「分数のたし算・ひき算」 4年「見積もりを使って」		

(2)一般研修

月	日	内容 · 講師	
4	2 6	「算数科の複式指導について」	
		講師 八戸市総合教育センター 副所長 松橋 祐哉先生	
1 2	2 0	「複式指導について」	
		講師 八戸市立多賀台小学校 教諭 類家 直人先生	
1	1 0	AED心肺蘇生法に関する研修 講師 八戸消防署桔梗野分遣所	
2	8	県学習状況調査結果の考察 本校教諭 中川 健郎	

6 研究の成果

- (1) 導入場面での意図的な誤答、問題文や図の一部、短時間の提示等の工夫は、問題解決への意欲と見通しをもたせるには効果的だった。
- (2) 少人数のよさを生かし、全員が発表する場を設定して話し合わせることは、自分の考えを伝えようという意欲につながった。さらに多様な考え方に触れ、互いの考え方を比較することで、それぞれの考え方のよさや違いに気付くことにもつながった。

7 研究の課題

- (1) 学び合いにつなげるために、解決方法の見通しだけではなく、話合い場面のゴールのイメージができるような焦点化しためあてや見通しについても考えていきたい。
- (2) 考えの深め方や広げ方のイメージをはっきりさせながら、話合い場面の質を高めたい。さらに、互いの意見を交流しながら、話し合わせるための手立てについて考えていく必要がある。

(記入者 高島 庸)

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成

~一人一人が考えをもち、表現できる授業づくり~

(2年計画の2年次)

校長 安田 俊彦

1 研究主題について

本校では、教育目標「夢や志をもち、共に高め合う児童の育成」を掲げ、それを受けて努力目標を「考える子・やさしい子・すこやかな子」としている。また、めざす児童像を「主体的に学び合い考えを深める子・素直な心をもち自他を大切にする子・健康な生活を送り心身ともにたくましい子」とし、知育・徳育・体育の各部会が具体策を提案し、職員全体の共通理解の下、知・徳・体の調和のとれた児童の育成を図っている。

昨年度は、主体的な伝え合い・学び合いを支える手立てや工夫として、必要感のある課題 設定や思考の根拠をもたせる活動を設定することに取り組んだ。また、ネームプレートやジャ ムボードの活用など、自分の立場を表明させたり、一人一人に意見や考えをもたせたりするた めに各学級の実態に合った取り組みを共有してきた。

その結果、児童が必要感や問題意識をもち、主体的に学習に向かう姿が見られるようになった。また、共感的な態度で学び合う場の工夫を継続し、ペアや少人数で話す場を設定してきたことで、発表が苦手な児童を参加させることができ、共に学び合う姿に近づいてきた。

しかし、進んで考えを伝えたいという意欲が高まってきたと同時に、考えを整理して話すことができず、まとまりのない伝え方になってしまうという課題が挙げられた。内容を整理し、相手意識をもたせるなど、伝え方についても研究を深めていく必要がある。また、各学級に学習に困難さを抱える児童が多く、特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりについて研究を深めていく必要性も挙げられた。

そこで今年度は、昨年度までの研究を踏まえながら、表現する場の設定の工夫とUDに基づく授業づくりに取り組むこととした。学習上の困難さが見られる児童だけでなく、全ての児童の学習の意欲が高まり、学習の理解も深まる授業づくりについて実践を重ねていきたい。授業研究での成果を日常の授業実践に生かし、進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成に努めていきたい。

2 研究のねらい

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子を育成するための学習指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

表現する場の設定の工夫とUDに基づく授業づくりについて研究を進めることで、一人一人が考えをもち、表現することができ、「進んで考えを伝え合い、共に学び合う子」を育成することができる。

- (1) 表現のさせ方や場の工夫
 - ア 必要感のある課題設定
 - イ 伝える相手の明確化
 - ウ ねらいに応じた学習形態(ペア・グループ・全体)
 - エ 具体物・ホワイトボード・ICT等の使用
- (2) UDに基づく授業づくり
 - ア 焦点化(シンプル) 学習のねらいや活動を絞る。
 - イ 視覚化 (ビジュアル) 授業における情報を見えるようにする。
 - ウ 共有化(シェア) 話し合う、伝え合う、協力し合う場面を設定する。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名		
6	8	教育指導課・総合教育センター訪問 全学級授業		
9	1 3	第1回授業研究(3学年) 授業者 髙橋 祥子 社会科「よく行く店」		
1 1	8	第2回授業研究 (5学年) 授業者 横内 佑依 算数科「がい数とその計算」		

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等	
6	2 1	気になる子へのアドバイス 講師:八戸学院短期大学部 幼児保育科 教授 野口 和也 氏	
7	5	1人1台端末の活用 情報交換	
8	2 7	県学力状況調査の分析・考察	
9	2 7	特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり 講師:教育指導課 主任指導主事 青木 拓哉 氏	
1 1	1	「Khoot!」「Padlet」の体験とその活用 講師:本校教諭 横内 佑依	
2	2 8	県外研修報告会	

6 研究の成果

- (1) 選択肢を与える、クイズ形式にする、近くの人と相談させる等、表現のさせ方を工夫したことで、自分の考えを伝えられるようになってきた。また、ペアや小グループなど、ねらいに応じて学習形態を工夫したり、早く解き終わった児童同士が意見交流する場を設定したりすることにより、一人一人が考えをもち、表現できるようになってきた。
- (2) UDに基づく授業づくりについて研修を重ね、焦点化、視覚化、共有化を重点に授業づくりを行った。意図的、継続的に図や写真を活用をすることで、一人一人がイメージをもって学習に向かうことができた。また、ICTを活用することで、それぞれの考えを共有しやすく、話すことが苦手な子にとって表現しやすくなり、共に学び合う姿に近づいた。

7 研究の課題

- (1) 一人一人が考えをもち、表現できるようになってきたが、それを全員で共有する場や振り返りの時間がもてなかったという課題が明らかになった。今後は単元を通して、学習のねらいを明確にし、どのような学習活動に時間をかけていくかなど、導入や振り返り場面を含めた単元計画の作成の仕方についても研究を深めていく必要がある。
- (2) UDに基づく授業づくりについて振り返った際、「焦点化に関して意識をさらに高めたい。」「情報や説明が過多になりがちだった。」という課題が挙げられた。児童の学習意欲を高め、理解を深めさせる指導方法を工夫していくために、今後も情報交換や研修を継続していく必要がある。

(記入者 石塚 里佳)

自分の考えをもち、進んで表現する子の育成

~児童の思考に寄り添い、学び合う授業づくりを通して~

(3年計画の3年次)

校長 竹 花 剛 二

1 研究主題について

本校では、教育目標として「心豊かに たくましく」、努力目標として「進んで学ぶ子」「思いやりのある子」「体をきたえる子」を掲げ、物事を自分事として捉えたり、相手の立場になって考えたりする思考法を用いて行動できる児童、物事を関連付けて考えることができる児童の育成を目指している。

昨年度は、「児童が思考したくなる学習課題の設定」「深い学びにつながる対話の工夫」「自己の学びを確かめる振り返り」についての研究を進めてきた。児童が思考したくなるような学習課題設定を行うことにより、解決の必然性や意欲を引き出すことができた。また自分の立場を明らかにすることで、自分事として課題を捉える児童が増え、主体的に学習に取り組むことができるようになってきた。しかし、考えや意見を交流することによって、更によりよい考えや意見をつくり上げるまでには至らず、対話を通して深い学びにつなげていくことに課題が残った。

そこで、これらの成果と課題から、今年度は「児童の思考過程を大切にした授業づくり」を土台とし、児童の思考に寄り添い、学び合う授業づくりの研究を進めていく。そのために、まずは児童が自分の考えを可視化することができる手立てを講じ、互いの立場を明確にすることで、児童が問題解決に向けて必要感や切実感をもつことができるようにしたい。次に、深い学びにつながる対話の工夫をする。ペアやグループなどの形態や1人1台端末を活用する方法など伝え合う場を工夫したり、話合いの観点や目的など視点を明確にしたりする。その際に、理由や相違点を問うなど思考を深める発問を投げかけ、対話を通して深い学びにつながる授業を展開することにより、児童に「わかった!できた!身についた!」を実感させたいと考える。

2 研究のねらい

児童の思考に寄り添い、児童同士が互いに学び合うことを意識した授業づくりを行うことが、自分の考えをもち、進んで表現する子の育成に有効であるということを授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

児童の思考に寄り添い、学び合う授業づくりをしていくために、自分の考えを可視化できるような 手立てを講じ、互いの立場を明確にする。そして、伝え合う場を工夫したり話合いの視点を明確にし たりすることや、思考を深める発問を投げかけるなど、対話を通して深い学びにつながる授業を展開 することにより、自分の考えをもち、進んで表現する子を育成できる。

- (1) 自分の考えを可視化する手立て
- (2) 深い学びにつながる対話の工夫
 - ア 伝え合う場の工夫
 - イ 話合いの視点の明確化
 - ウ 思考を深める発問

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師		
7	18	授業公開 (6 学年) 福士 貴人 社会「貴族のくらし」		
9	27	教育指導課・総合教育センター訪問(計画訪問)		
9	28	第1回授業研究(要請訪問)2学年 久保田 遥 国語「お手紙」		
		講師:八戸市教育委員会 教育指導課 主任指導主事 中村 美穂 氏		
11	1	授業公開(1学年)吉田 彰子 国語「じどう車くらべ」		
11	13	授業公開(わかば)伊藤 直子 外国語「Unit6 Let's think about our food.」(6 学年)		
11	14	授業公開(3学年)類家 直人 理科「音を出して調べよう」		
11	15	授業公開(すずかけ)寺下 真彩子		
		国語「慣用句」(6学年) 「ともだちのこと、しらせよう」(1学年)		
11	22	第2回授業研究(要請訪問)6学年 T1佐々木 禅 T2福士 貴人		
		算数「比例と反比例」		
		講師:三八教育事務所 教育課 指導主事 前川原 泉音 氏		
11	27	授業公開(4学年)河原木 直美 国語「プラタナスの木」		
11	30	授業公開 (5 学年) 児玉 友絵 社会「工業生産を支える輸送と貿易」		

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等	
5	31	学力検査(CRT)の分析・考察	
6	28	水遊び・水泳運動についての研修 講師:本校教諭 類家 直人	
7	5	プール監視・安全指導についての研修	
8	22	特別支援研修 「『困り』の理解と支援について」	
		講師:八戸市教育委員会 こども支援センター 指導主事 川野輪 美穂 氏	
8	30	県学習状況調査の採点・分析・考察	
9	6	版画講習会 講師:本校教頭 種子 麻佐子	
10	25	1人1台端末の活用 講師:本校教諭 吉田 彰子 福士 貴人	
12	6	全国学力・学習状況調査の分析・考察	
2	21	県外研修報告会「筑波大学附属小学校初等教育研究会」「全国養護教諭連絡協議会」	

6 研究の成果

- (1) 自分の考えを可視化する手立てを講じたことにより、他者との類似点や相違点から互いの立場が明らかになり、課題解決への必要感が生じ、解決に向けて意欲をもって取り組むことができるようになった。
- (2) ペアやグループなど目的に応じた話し合う場の工夫や視点を明確にした話合い、問い返しやゆさぶる発問などの工夫を重ねたことにより、対話的な学びが生まれ問題解決に向かわせることができた。

7 研究の課題

- (1) 対話的な学びを促すことはできたが、考えを深めることには課題が残った。深い学びに繋げるために、互いの考えを比べながら聞き、考えを整理したり根拠をもって話したりする力をつけていく必要がある。
- (2) 児童同士の関わりから学びが深まり、「わかった!できた!身についた!」が実感できる授業を展開するために、教師の働きかけを更に工夫する必要がある。

(記入者 児玉 友絵)

主体的に学び合う子の育成

~少人数・複式学級における主体的・協働的な学びを生み出す授業づくり~

(3年計画の1年次)

校長 久保 亨

1 研究主題について

本校では、教育目標として「たくましく生きる子」を、知の努力目標として「自分の考えをもち、 学び合う子」を掲げている。昨年度までの3か年では、「主体的に学びに向かう子の育成」を目指し、 主に「自分の考えをもち、深める手立ての工夫」、「知的好奇心を高め、考える必要感がある課題提 示や発問の工夫」、「学びを深め、次への意欲を高める振り返りの工夫」、「児童が自ら取り組む日常 的な働きかけの研究と実践」について研究を進めてきた。

その結果、考える必要感がある課題提示や発問の工夫をすることにより、児童は主体的に学びに向かおうとする姿勢が身に付いてきている。また、自分の考えをもち、立場をはっきりさせ、さらに友達と意見交流をさせることで、表現したいという意欲を高めることができた。そして、振り返りの場面を設定し、「わかったこと」「次にやりたいこと」「疑問に思ったこと」などを書かせることで、児童は自分の到達度に気付き、教師は本時の定着度を図る手立てとなった。

しかし、課題として、発達の段階を考慮した振り返りのさせ方や、完全複式になることを見据え、 児童自身が主体的に学習を進められるような、効果的な支援の仕方や学習の手順について研修をし ていく必要があることが挙げられた。

そこで、今年度は、少人数・複式学級での授業の進め方の工夫や発達の段階を考慮し、観点を明確にした振り返りの工夫について研究していく。自分の考えをもち、主体的に学び合う子の育成を目指して、算数科を中心に研究を進めていきたい。

2 研究のねらい

自分の意見や考えをもち、主体的・協働的に課題を解決する児童を育成するための効果的な指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

少人数・複式学級において、自分の考えをもった上で比べ合い、よりよい考え方を見つけようと する学習過程や指導・支援の在り方を工夫することにより、主体的に考え、学び合う力を高めるこ とができると考える。

- (1) 少人数・複式指導のあり方
 - ア 複式学習の進め方
 - イ 学年に応じた間接指導の工夫
 - ウ 複式でも生かせる単式学級での授業の工夫
- (2) 自分の学びを実感し、次への意欲を高める振り返りの工夫
 - ア 発達の段階に応じた振り返りの仕方

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名		
1 1	2 1	教育指導課・総合教育センター訪問		
1 1	21	教育拍导味・総合教育センター訪问		
		第1回授業研究 4学年 算数 「小数のかけ算とわり算」		
		5 学年 算数 「平均とその利用」		
		授業者 木村 允一		
		指導助言:三八教育事務所 教育課 橘 宏卓指導主事		
1 1	2 4	第2回授業公開 2学年 算数 「三角形と四角形」		
		3学年 算数 「分数のひき算」」		
		授業者 佐々木 知佳子		
1 0	2 5	第3回授業公開 1学年 算数 「0のたしざんとひきざん」		
		授業者 松生 章乃		
1 1	1 6	第4回授業公開 6学年 算数 「表を使って考えよう(2)」		
		授業者 花田 貴光		

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等	
5	3 1	一人一台端末活用法	
		講師 八戸市総合教育センター 小向 一樹主任指導主事	
6	1 5	複式教育について	
		講師 三八教育事務所 教育課 橘 宏卓指導主事	

6 研究の成果

- (1) 前時までの学習内容や本時に関わる既習事項の掲示、課題を自力解決できるような問題提示の工夫をすることにより、児童は自分の考えをもち、課題解決に向かって主体的に学び合おうとする姿勢が身に付いてきた。
- (2) 発達の段階に応じた振り返りの視点表を作成することにより、どの児童も明確な意思をもって 振り返りをすることができた。また、タブレットを活用して振り返りを蓄積していくことは、 自分の考えの変容に気付いたり、友達の考えに触れたりする機会となり、自分の学びを実感す るための手立てとして有効だった。

7 研究の課題

- (1) 複式指導における、直接・間接指導場面のより効果的な学習の進め方や授業構成の在り方について研究を深める必要がある。
- (2) 振り返りを書くことはできるようになっているが、その内容にはまだ個人差がある。学びを深め、次への意欲を高める振り返りとしていくための研究に、継続して取り組んでいきたい。

(記入者 松生 章乃)

自ら課題へ向かい 共に学び合う子の育成

~問題解決的な授業展開を通して~

(3年計画の1年次)

校長 成田 明彦

1 研究主題について

本校では、教育目標に「夢に向かい 考え 行動する子」、努力目標に「考えぬく、なかよく、 がんばりぬく」、学校目標に「笑顔で登校し、笑顔で下校する学校」を掲げている。

昨年度まで研究主題「主体的・対話的で深い学びができる子の育成」のもと、児童の思考に沿った学習課題「問い」を生み出す工夫、児童の思いや考えを広げ深める場の工夫について研修を進めてきた。

「問いを生み出す場面」では、教材を工夫したり、発問・指示を工夫したりしたことで、児童の思考のずれが生まれ、解決したいという学習意欲が高まり、主体的に課題に取り組む児童の姿が見られた。その一方で、課題設定に時間がかかり、自力解決の時間や振り返りの時間など、個でじっくり考える時間の確保ができないことが課題となった。

「思いや考えを広げ深める場面」では、交流の場面を意図的に設けたことで、友達と積極的に 関わり合う児童の姿が見られた。しかし、友達の考えを聞くことで思考の広がりは見られたが、 練り合うことでの深まりまでには至らないことが課題となった。

課題はあるものの、問題解決的な学習を進めてきたことで、児童が主体的に取り組む姿勢が身に付いてきている。そこで、今年度からは研究主題を「自ら課題へ向かい 共に学び合う子の育成」とし、昨年度までの研究成果を生かしつつ、対話的な学習に取り組ませながら、問題解決的な学習の充実・改善を図っていくこととした。日常の授業実践の中で、目指す児童像の育成につなげていきたい。

2 研究のねらい

自ら課題へ向かい共に学び合う子の育成のために、問題解決的な授業展開をどのように工夫していけばよいかを、国語科・算数科の授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

問題解決的な授業展開の中で「課題設定までの教師の働きかけの工夫」や「児童の思いや考えを広げ深める場の工夫」を行うことで、自分の考えをもって共に学び合う子の育成をすることができる。

- (1) 児童の思考に沿った学習課題「問い」を生み出す工夫
 - ア 児童の興味関心を高める教材を工夫する。
 - イ 発問・指示を工夫する。
 - ウ 立場の表明をする。
 - エ 見通しをもたせる。
- (2) 児童の思いや考えを広げ深める場の工夫
 - ア 目的を明確にした交流の場を設ける。
 - イ 児童の思考過程を可視化(見える化)する。
 - ウ発問・指示を工夫する。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
6	2 8	第1回授業研究(4学年)	段落ごとに分かれたワークシートを並べ替
		国語「アップとルーズで伝える」	え、叙述を基に話し合う活動を通して、正しい
		授業者 講師 葛西瑠	段落構成について考えさせた。
1 1	1	第2回授業研究(1学年)	挿絵に描かれている風景について話し合う活
		国語「くじらぐも」	動を通して、くじらぐもにのっている子ども達
		授業者 教諭 近藤唯華	がどんな会話をしたのかを考えさせた。
1 1	2 2	第6回授業研究(6学年)	二枚の幻灯を比較させ題名について問いかけ
		国語「やまなし」	ることで、宮沢賢治の作品に込めた思いを考え
		授業者 教諭 小笠原舞花	させた。

(2) 一般研修

/ ///	73. 91 P			
月	日	研修内容	講師	
5	3 1	生徒指導における児童の共通理解について	本校教諭 昆春見	
		特別支援教育について(授業参観・情報交換)	本校教諭 階上明子	
7	1 2	緊急時の対応について(講話)	元養護教諭 原田久美子	
7	1 9	緊急時の対応について(実技)	八戸消防署	
8	2 2	特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり	総合教育センター	
			主任指導主事 青木拓哉	
9	2 0	問題解決的な授業づくり	教育指導課	
			主任指導主事中村美穗	
9	6	守ろう!私たちの健康を	ネット健康問題啓発者養成	
			全国連絡協議会	
1	1 2	新井田の歴史探訪	八戸市大館地区自治振興会	
			会長 髙橋芳久	

6 研究の成果

- (1) 「課題設定までの教師の働きかけの工夫」では、課題提示の仕方を工夫することによって児童の 学習意欲が高まったり、思考のずれが生まれたりした。また、立場の表明をすることによって学 習への参加意欲が高まり、主体的に課題解決に取り組む児童の姿が見られ、効果的であった。
- (2) 「児童の思いや考えを広げ深める場の工夫」では、交流の場をペアやグループから全体へと段階的に設けたことで、児童全員に自分の思いや考えを伝える機会を確保することができた。また、様々な考えに触れることで、考えを広げることができた。

7 研究の課題

- (1) 時間配分に課題が残った。課題設定までに時間がかかり、練り合いの時間や振り返りの時間が短くなってしまう傾向があった。短時間で児童に課題を共有させ、見通しをもって自力解決に向かわせることができるように工夫していきたい。
- (2) グループ交流では、話し合いをさせる内容や方法が不明確で、グループで話し合ったことが全体の交流につながらず、全体での練り合いが不十分だった。また児童の交流のスキルも未熟なため、お互いに自分の考えを伝えるだけで、相手との相違に気付いたり、よりよい考え方を模索したりと、考えを深めることが難しかった。今年度の課題を生かしながら、来年度の研修につなげていきたい。 (記入者 横沢深雪)

共に考え、創る学びの実現

~学ぶ基盤づくりを通して~

(3年計画の1年次)

校長 中奥 尚子

1 研究主題について

本校は、教育目標を「生き生きと 心も体もたくましく」と定め、子どもの明るい声が響き、学力・思いやりの心・体力・生活力を確実に育てる学校を目指している。昨年度までの3年間は、教育目標、これまでの研究経過と、「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点を踏まえ、研究主題を「関わり合いながら深く考える子の育成」と設定し研究を行ってきた。

昨年度は、児童の追究意欲を喚起する課題の設定と、思考と対話の機会の保障に取り組んだ。具体的には、「~しよう」という課せられためあてではなく「~はどうすればよいか」といった児童の疑問を基にした学習問題を児童との対話の中で作成したこと、4つの視点(学習課題の設定・言語活動・対話・振り返り)を基にした授業づくりを行ったことで、学習問題について深く考えさせ、研究主題である「関わり合いながら深く考える子の育成」に迫ることができた。また、特別支援的な視点での児童理解に関する研修を重点的に行うことによって、児童理解に基づいた効果的な支援がなされるようになった。

しかし、児童は課題解決に向けて意欲はもっているものの、自分の考えを書いたり、話したりする技能が十分に身に付いておらず、対話による学びの深まりが難しい傾向が見られた。また、課題を発見しようと自分と向き合う、粘り強く取り組む、自分や仲間の成長を認めるといった、学習に向かう態度についても課題が残った。これらのことから、授業づくりや指導方法の工夫だけでなく、言語能力や学習に向かう態度を含めた、学習の基盤となる力を身に付けさせることで、主体的に課題に向かい解決できる児童の育成を目指す必要性が確認された。そこで今年度からは、「共に考え、創る学びの実現」を研究主題とし、自他共栄のもと、主体的に課題を発見し、解決に向かって創造的に挑戦できる児童の育成を目指すこととした。3年計画の1年次となる今年度は、「共に考え、創る」ために必要となる技能や態度を「学習の基盤となる力」と位置付け、それを身に付けさせる手立てや指導方法を模索することを目標とする。また、創造的に挑戦できる児童を育成するためには、教師が創造的に挑戦できることが必要である。そのため、教師一人一人が研究に対して目標をもち、仲間と協力して課題の解決に取り組める研究体制を構築した。これらの試みにより、児童と教師が共に成長し、学習の基盤となる力が育成され、「共に考え、創る学び」の実現の基礎が整えられると考える。さらに次年度以降は、児童が身に付けた学習の基盤となる能力を生かし、「共に考え、創る学び」を具体的に実現していくことを目指す。

2 研究のねらい

「共に考え、創る」ための学習の基盤となる力を児童につけさせる手立てや指導方法について、日常の実践を通して明らかにするとともに、教師が創造的に挑戦できる態度を高める。

3 研究仮説

学習の基盤となる力の育成について教師が主体的かつ日常的に取り組める研究体制を構築し研究を進めていくことで、児童に学習の基盤となる能力を付けさせるとともに、進んで挑戦し改善し続けようとする教師の態度をより向上させる。それにより、皆が共に考え、創造する学びを実現させる基礎をつくることができると考える。

4 研究内容

- (1) 児童に付けさせるべき学習の基盤となる力(話す、聞く、書く、体力、学習に向かう態度等を含む)を定めた研究チームを組織し、育成する手立てを仮定する。
- (2) 全教員が日常の指導の中で仮定した手立てを実践する。
- (3) 実践の経過を全教員で共有し、改善策を協議した上で更に実践を進め、全校で取り組むべき「児童に付けせる学習の基盤となる能力」と、「そのための手立て」を決定する。
- (4) 6つのプロセス(しかけ、立場の表明、課題設定、対話的な活動、立場の再表明、変容の自覚)を基本とした問題解決型の授業づくりを行う。

5 研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究・全体会等		
4	26	全体会(校内研究について共通理解、チーム研究の進め方について)		
5	2 4	チーム研究会① 助言者 教育指導課 副参事兼主任指導主事 日向端 聖 氏		
6	2 1	チーム研究会② 助言者 教育指導課 副参事兼主任指導主事 日向端 聖 氏		
7	19	チーム研究会③		
8	2 1	全体会(中間報告の進め方)、チーム研究会④		
9	4	中間報告会 助言者 立教大学 教授 大石幸二 氏		
1 0	2 5	チーム研究会⑤		
1 1	22	チーム研究会⑥		
1 2	13	チーム研究会⑦		
1	1 7	研究報告会 助言者 教育指導課 副参事兼主任指導主事 日向端 聖 氏		

(2)一般研修

月	日	内 容・概 要	講師・概要等
9	4	認知機能トレーニングについて	講師 立教大学 教授 大石幸二 氏
0	7	検査分析を生かした指導の改善について	各種検査の結果を分析し、指導計画の具体的な
9	21	検重力例を生かした指导の以音について	改善案を検討、共有する。

6 研究の成果

聞く、書く、集中力・姿勢、認知機能の4つのグループに分かれて研究し、実践することを通して、集中力、 聴き方、自分の思考の整理の仕方など、子ともたちが学習の基礎となる力を身に付けることができた。教師一人 一人が研究に対して目標をもち、授業実践をすることで、児童と教師がともに成長し、学ぶ基盤づくりをするこ とができた。

7 研究の課題

- (1) 学習の基礎となる力の育成はできたが、聞いたことの内容理解が苦手な子が多く、対話的で深い学びには至っておらず、来年度は具体的な授業研究が必要である。
- (2) 教師一人一人が研究に対して目標をもって進めることができたが、グループの中での共有、また全体での共有が難しかった。今後、授業のどの場面に重点をおいて研究していくかなど焦点を絞った研究が必要である。 (記入者 下野 由佳子)

主体的に学び合う児童の育成

~話す意欲を高める対話活動を通して~

(3年計画の2年次)

校長 小笠原 一彦

1 研究主題について

本校では、教育目標に「豊かな心をもち、たくましく生きる子」、努力目標に「すすんで学習する子(知)」を掲げ、主体的に学習に取り組む児童の育成を目指している。また、学校目標を「かしこく、なかよく、たくましく」とし、学ぶ楽しさや喜びを感じることを通して、基礎学力の定着と主体的に学ぶ力や表現力を身に付けさせることを目標としている。

昨年度から国語科の研究に取り組み、授業実践を通して、課題の設定や提示の仕方、話す意欲を喚起する対話活動を工夫することで、児童が「解決したい」という意欲をもって学習に取り組む授業づくりを進めることができた。一方で、自分の考えを伝えるための話し方は身に付いてきたものの、話し合うまでに至っていない、問題解決に対して児童の必要感・切実感を持続させるのが難しいという課題が残った。

また、令和4年度のCRT学力検査の国語科における大領域「話す・聞く」に関する問題の得点率を見ると、「書くこと」「読むこと」の領域よりも低い学年が多く、「自分の考えを分かりやすく、伝わるように話す」力や「相手が伝えたい内容を的確にとらえて聞く」力が十分に身に付いていないことが分かった。このことについては、教科指導に限らず、日常生活においても本校の大きな課題となっている。

そこで、今年度は、対話を通して考えを広げ、自らの考えを再構築する対話活動に力を入れることで、問題解決への必要感を持続させたいと考え、本主題・副題を設定した。まず、毎週1回朝の活動で「話すこと・聞くこと」のトレーニングを継続し、話す力を身に付けるための基礎づくりを図りたい。また、授業においては、導入での発問や教材提示等、教師のはたらきかけを工夫して、問いの意識をもたせる。児童全員の考えや立場の相違を可視化し、思考に沿った課題設定を行うことにより、対話する意欲と必然性を生み出したい。更に、対話活動を通して考えを広げた上で各自が立場を再表明することで、自己の思考の変容を自覚させ、振り返らせたい。このように、児童が自分の考えの変容を自覚できるような対話活動を行うことによって、主体的に学ぶ児童を育成できると考える。

2 研究のねらい

児童が興味・関心、見通しをもって主体的に学び、対話的な活動を通して考えを広げたり深めたりするための授業づくりの在り方について、国語科の授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

学習課題の設定の仕方や話す意欲を喚起し考えを広げる対話活動を工夫することで、主体的・対話的に学び合う児童を育成することができる。

- (1)問題解決的な授業づくりの工夫
 - ア 導入でのはたらきかけの工夫(発問や活動指示、教材や問題の提示、教材へのしかけ等)
 - イ 立場の表明(立場の相違の可視化・顕在化)
 - ウ 立場の再表明(立場の振り返り、思考の変容の可視化)
- (2)話す意欲を高めるための対話活動の在り方の工夫
 - ア 問いの共有(追究したい、解決したいと思わせる学習課題の設定)
 - イ 学習場面に応じた対話活動の内容や形態の工夫

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・授業の概要
7	1 2	第1回授業研究(2学年) 授業者:教諭 渡邊 尚美 単元名 しつもんをしあって、くわしく考えよう 「あったらいいな、こんなもの」 (授業の概要) 導入で前時のペアでの話合いを振り返り、教師によるデモンストレーションを行ったことで、質問をすることの必要感をもたせることができた。対話活動では、話型を示したことでスムーズに話すことができた。また、ペアを意図的に替えることで質問や助言の視点が変わり、考えを広げることにつながった。
9	1 3	第2回授業研究(特別支援学級) 授業者:【あおぞら学級】教諭 後村武雄、【わかくさ学級】講師 上田公子単元名 【あおぞら学級】へんとつくり(3学年)敬語(5学年) 【わかくさ学級】いちばん大事なものは(6学年) (授業の概要) 【あおぞら学級】学年の異なる二人に活動の流れや時間配分を示して見通しをもたせ、つまずきを予想した手立てを講じることで迷わずに活動ができた。 【わかくさ学級】話型や役割を視覚化して司会を交代しながら対話活動を繰り返すことで、付箋を付け足しながら考えを広げていくことができた。
1 1	15	第3回授業研究(要請訪問・4学年) 授業者:教諭 大高 麻莉乃 単元名 気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう 「ごんぎつね」 (授業の概要) ごんに対する兵十の気持ちを考えて自分の立場を再表明する際、スケールを 用いてネームプレートを動かし可視化したことが、考えの変容をとらえるのに 効果的であった。また、同じ立場の人、違う立場の人と、相手を替えて複数回 対話活動を行ったことで、自らの考えを広げたり深めたりすることができた。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師			
5	3 1	JS組織会			
6	2 8	AED講習会			
8	2 2	出前講座 国語科における授業づくりについての研修 講師 中村美穂先生			
8	3 0	県学習状況調査 採点·分析			
1 0	2 5	体育科の指導に関する研修 講師 小笠原一彦校長			
2	1 4	生活科・総合的な学習の年間指導計画についての研修			
2	2 1	県外研修等報告会			

6 研究の成果

- (1) 赤白帽子や付箋、登場人物の気持ちを表すスケール、ネームプレート等を活用することで、 自他の立場を顕在化させた。また、それらのツールの色や数を変えたり、動かしたりするこ とによって、立場を振り返り、思考の変容を可視化することができた。
- (2)週に一度話す・聞くスキルの基礎をつくる取組を行ったことで話す意欲の向上が見られた。 対話活動における観点を明確にし、人数や相手、回数など、形態を意図的に工夫することに よって、話す意欲が高まり、考えを広げることのできる児童が増えた。

7 研究の課題

(1)話す・聞くスキルを向上させる取組を継続し、苦手意識のある児童にも、言葉で交流する楽しさを味わわせたい。対話活動において、教師と児童の双方が目的と観点を明確にもつことで、話し合う必然性と意欲を高め、主体的に学び合う児童の育成へとつなげていきたい。 (記入者 上柿 拓子)

主体的に学び合う子どもの育成

~聞く力の育成を目指した指導の工夫~ (3年計画の1年次)

校長 久保 慶喜

1 研究主題について

昨年度は、研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」として研究実践を通して研究を進め、次のような成果が得られた。

- ① 「島守スタンダード」に全校で取り組んだ結果、複式学級、単式学級どちらでも発達段階に応じて学習リーダーを全員が経験することができた。また、振り返りを記入することで自分の学びを客観的に見ようとする習慣が定着してきた。
- ② 同時間接指導を取り入れたことにより、自力解決の時間を確保するとともに、教師が子どものつまずきに気づいて個別指導にあたることができたため、どの児童も意欲をもって次の練り合いの活動に関わっていくことができた。
- 一方、課題として次のようなことが挙げられた。
- ① 課題把握の場面だけではなく、児童が終末時まで問題解決に向けて深く考えていくことができるような手立てや発問、板書の工夫を図る必要がある。
- ② 振り返りを書くことはできるようになっているが、その内容に個人差が出たり、次の授業に生かし切れていなかったりする側面が見られるようになってきた。内容の充実をさらに図るためにも、自分の考えの変容を意識できるような授業展開の工夫が必要である。

そこで、今年度は主体的な学びをより確かな学力につなげていくために聞く力の育成や授業展開の工夫、振り返りの生かし方について研究していく。昨年度、間接指導時における学習の進め方や振り返りの観点を「島守スタンダード」という形にまとめ、研究を行ってきた。今年度はこの「島守スタンダード」に聞き手の姿を追加し、相手の話をしっかりと聞く力を身に付けさせていく。そのために、授業展開において教師が聞く視点を与え、聞いた内容を自分なりに解釈する場を設定する。また、自分の意見を表明することができた児童を認め、安心した居場所づくりに努める。こうすることで、子どもの学習に対する主体性が育まれると考える。そこで、今年度は相手の話をしっかりと聞き、学習の振り返りを充実させることにより、確かな学力の定着を目指す。

以上のことから、本主題を設定した。

2 研究のねらい

主体的に学び合う子どもを育成するために、相手の話を聞き、自分なりに解釈しながら考えることができる学習指導のあり方を各教科の授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

各教科の授業において、「島守スタンダード」に則った聞き方や振り返りの仕方などの基礎的・基本的な学び方を身に付けさせ、互いに考えを解釈する場を取り入れた授業展開の工夫をすることにより、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

- (1) 自分の考えを確実にもつための基礎的・基本的な学習指導のあり方
 - ア 島守スタンダードに則った授業の充実(聞く)
 - イ 学習リーダー、フォロワーの育成
 - ウ 同時間接指導を取り入れた授業の工夫

- (2) 自分の考えを深めることのできる手立ての工夫
 - ア 振り返りの内容の充実と活用
 - イ 問題解決的な学習を進めるための教師のはたらきかけ
 - ウ 主体的に問題解決を図るための一人一台端末

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業の概要		
5	3 1	第1回授業研究		
		第1学年 授業者:中川原 友美		
		題材名 1学年『やぶいた かたちから うまれたよ』		
7	1 2	第2回授業研究		
		第3・4学年 授業者:田名部 純一		
		題材名 3学年『ぼうグラフ』 4学年『小数のたし算・ひき算』		
9	2 0	第3回授業研究		
		第5・6学年 授業者:佐々木 耕造		
		題材名 5 学年『分数 (1)』 6 学年『比とその利用』		
1 2	6	第4回授業研究		
		第2学年 授業者:須藤 有祐美		
		題材名 2学年『モムンとヘーテ』		

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
7	1 9	島守の歴史を知る講話
		講師 八戸市博物館 古里 淳 様
8	3 0	器械運動に関する実技研修
		講師 島守小学校講師 佐々木 耕造 先生
9	2 7	特別支援に関する研修講座
		講師 こども支援センター 指導主事 三浦 祐子 様

6 研究の成果

- (1) これまでの「島守スタンダード」に「聞く」という視点を加え、共通理解を図り全校で取り組んだ結果、最後までしっかり話を聞くことやうなずきながら話を聞くこと、相手を見つめて話を聞くことができた。また、振り返りを書く習慣が定着してきた。さらにその振り返りをさらに活用することで次の学習への意欲を高めることができた。
- (2) 同時間接指導を取り入れたことにより、両学年を客観的に見ることができ、進度を確認するとともにつまずいている児童への個別指導にあてることができた。

7 今後の課題

- (1)相手の話を聞くことができるようになってきた。その聞いたことをもとに解釈し、自分の考えをしっかり相手に伝えることができるような指導や友達同士で助け合えるようなフォロワーの育成にも努めていく。「島守スタンダード」に「聞く」だけでなく、「伝える」という視点も取り入れ、全校で取り組む必要がある。
- (2) 基礎基本の定着を図るために一人一台端末を活用してきた。児童がさらに問題解決に向けて、一人一台端末を使用できるような授業展開の工夫を図る必要がある。

(記入者 須藤 有祐美)

中学校

1	第一	8	白 銀	1 5	北稜	2 2	東
2	第二	9	白銀南	1 6	是 川	2 3	中 沢
3	第三	1 0	鮫	1 7	三条	2 4	島守
4	長 者	1 1	南浜	1 8	明治		
5	小中野	1 2	根 城	1 9	市川		
6	江陽	1 3	白山台	2 0	豊崎		
7	湊	1 4	下長	2 1	大 館		

主体的・対話的で深い学びを実現する生徒の育成

~対話的な学習場面の工夫を通して~

(3年計画の1年次)

校長 佐々木 敏文

1 研究主題について

本校の努力目標の1つである「基礎学力の確実な定着と確かな学力の保証に努める」に迫るため 上記の研究主題を設定した。

昨年度までの3年間の研究成果として、生徒同士で課題解決を目指す学習を多く設定することにより、コミュニケーション能力を高めることができた。また、生徒の主体性を高めるにはどのような授業の流れが大切なのか、ということを考えた授業実践ができ、研修主題に迫ることができた。 課題としては、以下の2つが挙げられた。

- (1) 個々の思考や小集団での話合い活動では活発に意見交換できるが、集団の場で発表できる力が 不足していること。
- (2) 生徒が自ら課題を探究し、自分の言葉で表現する力を高めるためのよりよい課題設定の研究が必要なこと。

今年度は、昨年度からの研究テーマは継続し、副題を変更して、研究主題に迫っていく。具体的には、次の内容を充実させていく。

- (1) 本質的なねらいを明確にする。
- (2) 生徒の目的意識や必要感、話したい、聞きたい、伝え合いたいなどの思いを引き出す学習課題や発問を工夫する。
- (3) ねらいの実現状況を適切に評価し、授業改善に生かす。

このことを共通理解した上で研究を進めることは、生徒の確かな学力の保証への一つの方策であるとも考える。そのことを踏まえて、生徒のよりよい変容を目指した研修を行う。

2 研究のねらい

本質的なねらいに即した対話的な学習場面を工夫しながら、継続していく。そのことによって、生徒と教師、生徒同士の対話に多様な表現が生まれ、生徒自らが思考を広げ深めていくということにつながる。このことを念頭に置き、教師が共通理解のもと実践し、生徒の変容を明らかにする。

3 研究仮説

教育活動全般において、ねらいを明確し、何のための話合いなのか、何について話し合うのかなど、 目的や内容を生徒と共有しながら学習場面を組み立てることで、生徒が学ぶことに興味や関心をもつ こと、つまり生徒の深い学びの実現につながると考える。

- (1) 対話的な学習場面の工夫と生徒の変容を中心とした話合いの時間を確保する。
- (2) 年2回以上の教科の枠を超えた授業参観を行う。
- (3) 年2回(7月と11月)、生徒への意識調査を実施する。
- (4) 成果を数値化し、課題を明確にする。

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要等
5	31	計画訪問
6	1~30	授業参観月間① 研究仮説に関わる視点をまとめた「授業参観シート」をもとに全教員で授業を参観した。
1 1	6~22	授業参観月間② 6月と同じ内容で授業を参観した。
	7	授業研究(国語) 1年3組 授業者 教諭 紀伊綾香 「対話的な学習場面」、生徒の様子を中心として授業研究を行った。
1	11	授業参観月間の様子をもとにした話合いと今後の進め方について話し合った。

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
4	5	校内研修① 「研究主題と研修計画について」 研究主題と研究計画についての共通理解を図った。また、教科ごとの研究 計画書の様式についても提案した。
8	21	校外研修② 「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり」 講師 八戸市教育委員会教育指導課 主任指導主事 青木拓哉氏
1	24	校内研修③ 「今年度の振り返りと来年度の校内研究主題について」

6 研究の成果

- (1) 生徒の変容に焦点を当てた授業参観月間を設定することによって、1時間における生徒の学びの様子を細かく観察することができ、各自の授業改善に生かすことができた。
- (2) ねらいを明確にした話合い活動を継続することで、生徒同士の対話に多様な表現が生まれるようになったことが授業参観を通してわかるようになった。

7 研究の課題

- (1) ねらいを明確にすることで、主体的・対話的な学びに近づくことができたが、生徒が学ぶことに興味や関心をもち、深い学びの実現までには至っていない。
- (2) 毎時間の授業において、何を学ばせ、それをどのように次につなげていくか、という見通しをもった授業づくりを行い、評価につなげていかなければならない。

(記入者 細山 美栄子)

思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫

~特別支援教育の視点を生かして~ (3年計画の2年次)

校長 管 宏

1 研究主題について

本校の生徒は、明るく優しく、人懐っこいという長所がある一方で、やや気持ちが弱く、自主・自立への意識が低いという課題がある。また、年々個別の支援を必要とする生徒が増えており、学力差が大きいという問題点がある。

そこで、本年度は本研究主題の2年次として、すべての生徒が分かる授業を目指して、授業のユニバーサルデザインを推進する。各教科・領域の特性を生かしながら、特別支援教育の視点を踏まえた「分かる」授業を実践することが、課題解決に向けて主体的に学ぼうとする生徒の意欲を生み、思考力・判断力・表現力の向上につながると考える。生徒一人一人の思考力・判断力・表現力を高めることで、自主・自立の意識の向上を目指したい。

2 研究のねらい

各教科・領域の特性を生かしながら、特別支援教育の視点を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることによって、主体的に学ぼうとする意欲が高まり、思考力・判断力・表現力の向上につながることを明らかにする。

3 研究仮説

本校は授業のユニバーサルデザイン化として、①見やすい板書・構造化された板書、②ねらいや授業の見通しの明確化、③目で見てわかる手がかりの活用、に重点をおき、全職員で共有し実践してきた。その取組を継続しながら、デジタル教科書・ICT機器の活用や生徒自らが探究し、互いの考えを伝え合う活動等を取り入れることで、生徒一人一人の思考力・判断力・表現力を高めることができるであろう。

- (1)「授業のユニバーサルデザイン」について研修し、具体的な取組について共通理解をする。
- (2) ICT 機器の活用を通した授業実践と、互いの実践について学び合うための授業参観や研究協議を 行う。
- (3) 生徒理解や授業改善のために、外部講師 (八戸学院大学短期大学部 教授 野口和也氏) をお招きし、研修する。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

(Ι,		火祝 に左	- 基づく 技業研究				
	月	月	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要など				
	各学期		思考力、判断力、表現力を高める授業の実践 ユニバーサルデザインの授業実践				
	5	30	教育指導課・センター計画訪問				
	7	19	要請訪問 領域研究授業(特別活動)授業者 教諭 向井 勇樹 3学年「これまでを振り返り、さらによい中学校生活の締めくくりにするための 計画をしよう。」 助言者 八戸市総合教育センター 佐々木 亮子 主任指導主事				
	10	3	市中教研領域等研究協議会 集中授業(特別活動) 授業者 教諭 相馬 花純 3学年「後期学級目標を達成するために 〜全員で取り組む実践課題を決めよう〜」 集中授業(キャリア教育) 授業者 教諭 藤田 翔平 2学年「これからの時代に求められる力を伸ばすために、今の自分にできる 目標を立てよう。」				
	10	12	初任者研修 教科研究授業(音楽) 授業者 教諭 伊藤 未祐 2学年「みんなで創る混声合唱~合唱祭に向けて~」混声三部合唱「COSMOS」				
	11 月		授業参観週間				
	1	18	初任者研修 道徳研究授業 授業者 教諭 伊藤 未祐 2学年 「自分らしさ」とは何だろう 〈内容項目〉A(3)向上心、個性の伸長				
(n)							

(2) 一般研修

(4) 川又	10月19	
月	日	内容・講師・概要等
4	5	「思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫」の共通理解
8	18	一般研修(出前講座) 「中教研キャリア教育の集中授業についての進め方や指導案へのアドバイス」 講師 八戸市教育委員会 教育指導課 馬渡 正仁 主任指導主事 指導案作成者 教諭 藤田 翔平
9	22	心のケア研修支援事業 「通常学級における特別な支援が必要な生徒への対応の仕方 〜全体指導と個別支援〜」 講師 立教大学 現代心理学部教授 大石 幸二 氏
12	7	JS推進事業 特別支援教育に係る校内研修会 「特別支援教育の視点での専門家によるスクリーニングと担当教員への指導・助言」 講師 八戸学院大学短期大学部 教授 野口 和也 氏

6 研究の成果

(1) 授業のユニバーサルデザイン

今年度は中教研の授業発表に向けて、全教員で指導案検討やプレ授業参観を行う機会を設定した。 その中で、すべての生徒が議題を自分事として考える発問や板書の工夫について話し合うことができた。また、毎月の職員会議で、特別支援教育の視点での授業の仕方や生徒との関わり方について情報共有をすることができた。

(2) ICT 機器を活用した授業実践と授業参観

すべての生徒が分かる授業を目指して、各教科でICTの活用が行われている。また、11月の授業参観週間や日々の教員同士の情報交換を通して、板書の工夫や見通しのもたせ方について良い実践例を共有することができた。

(3) 特別支援教育の視点を生かした生徒理解や授業改善

今年度は大石先生と野口先生にそれぞれ来校いただき、スクリーニングと助言・指導をいただいた。日頃教師が困り感をもつ生徒に対して、その要因や関わり方について的確にアドバイスをいただき、日々の授業改善や実践につなげることができた。

7 研究の課題

- (1) 特別支援教育の視点を踏まえた授業実践と改善は日常的に行われている。しかし、学校評価アンケートを見ると、生徒の「主体的に学ぼうとする意欲」の項目が昨年度よりやや低下した。学習意欲を向上させ、思考力・判断力・表現力の育成につなげるためには、授業規律と学習習慣の確立も課題であることが見えてきた。
- (2) 個々の生徒の、文字を書いたり文章をまとめたりする能力差を補うために、一人一台端末の活用は有効であり、教師側の授業改善の必要性を感じる。また、個別の支援が必要な生徒に対して、教員が個々の持ち味を生かしてチームで対応する体制づくりも考えていきたい。

(記入者 加藤彩子)

自ら課題を見つけ、自ら学ぶ生徒の育成

~「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業づくりを通して~(3年計画の1年次)

校長 前田 篤志

1 研究主題について

「主体的な学び」の実現のためには、生徒自身が目的意識をもち、考えることを楽しいと認知したり、学びの 必要性を感じたりする授業づくりが必須である。

この「主体的な学び」を促すために、昨年度は生徒それぞれの疑問や考え、感想を共有し、そこでの気づきを 元に自己の学習に意欲的に取り組む生徒の育成のために、学習活動場面の設定や一人一台端末の活用を意識した 授業づくりに取り組み、一定の成果を得た。

今年度は、生徒それぞれの疑問や考えを「問い」とし、解決に必要な知識を得ながら、「問い」の解決のために 見通しをもって粘り強く取り組むことと、学習活動の振り返りを通して生徒自身の学びを深めることができる授 業づくりに取り組む。

「問い」をもつためには内発的な動機が必要である。授業においてその動機を喚起させ、解決に向かわせることによって「主体的な学び」が実現される。その学びに実感が伴うことで「社会に存在する課題を発見し、的確に捉える力」「1 つの結論を導き出してもその先にある新たな課題に向かっていく力」と言った自ら問いを立てる力が育成されると考える。

2 研究のねらい

課題提示の文言や指導方法を工夫することにより、生徒自身の内発的な動機を根拠とした問いを、対話することを通して解決したり、自己の考えを広げたり深めたりすることができる生徒の育成を図る。

3 研究仮説

授業における学習課題提示や対話的な学習場面を工夫することによって、必要な知識を習得しながら知識的裏づけをもって問いを立て、その「問い」を探究心をもつて解決し、さらに「問い」繰り返すことで、問いと探究が相互に関わって生徒自身の学習内容に高まりがみられる。それらを積み重ねることにより、「何かわからないことや困ったことがあったときに、どこに問題があるかを主体的に考え、対話を通して解決し、学びへの意欲をもつことができる」生徒が育成されると考える。

- (1) 授業における取組
 - ア 授業の中で、生徒が自ら「問い」を見つける課題設定や発問の文言を工夫する。
 - イ 問いに対しての答えを導くために必要な情報収集を意識して授業を設計する。
 - ウ 対話場面を活用し、 自身の問いの最適解や学習の深まりを確認する場を設定する。
- (2) 校内研修による検証
 - ア 教科部会で、「問い」の場の設定にむけた発問の文言や授業設定を研究し、授業研究を通して検証する。
 - イ 各教科の「見方・考え方」や教科の特性を生かした授業の相互参観を行い、その学びを自己の指導に取り 入れる
- (3) 効果的な「問い」の立てさせ方、ファシリテーターとしての視点の持ち方などについて、外部講師を招いての研修を行う。

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	例)学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要 等
5	29	第1回小・中ジョイントスクール推進事業授業公開
9	26	第1回授業研究(要請訪問) 2学年 授業者 教諭 佐々木昌彦 「蒸散量の測定」
11	22	第2回授業研究(要請訪問) 3学年 授業者 教諭 藤田亜実 「中学生に必要な栄養を満たす食事」

(2) 一般研修

月	日	例)内容・講師・概要等
5	26	「生徒が自ら課題を見つけ、自ら学ぶための手立てについて」 八戸市立白銀南中学校 教諭 葛西良子 氏
8	21	・青森県中学校教育課程研究集会「1人1台端末の活用場面について」 ・「1人1台端末操作研修」 株式会社ビジネスサービス 西股和仁 氏
8	22	「思春期という時期を踏まえた特別な教育的ニーズのある生徒への理解と対応」 八戸学院大学短期大学部 教授 野口和也 氏
2	21	「個々の特性の強い生徒への対応」 八戸学院大学短期大学部 教授 野口和也 氏

6 研究の成果

- (1) 授業研究を2回実施し、授業研究の際には、教科部会および研修部会でよりよい課題設定について研究を行った。授業後の研究協議では、問いを生む課題提示や課題設定や発問について研修し、授業改善に生かすことができた。
- (2) 白銀南中学校葛西良子先生を講師に招き、生徒が自ら課題を見つけ自ら学ぶための手立てについて研修した。授業や単元の振り返り、テストの自己分析等について、講師の実践発表から学ぶことができた。また、主体的に学習に取り組む態度の評価については、実践だけでなく生徒の変容の具体例を示していただいたことで、より実感を伴った研修をすることができた。
- (3) 特別支援教育について、特別な支援を要する生徒の理解と対応について研修した。発達障害本来の特性とそうでないものについて再確認し、思春期にある生徒への関わり方について研修することができた。

7 研究の課題

- (1) 自ら課題を見つけ自ら学ぶ生徒の育成を目指して取り組んだが、生徒自身が問いを見つけて解決に向けて 取り組ませるには、生徒が問題を発見するようなしかけについてさらに研究が必要である。また、生徒に 解決に向けた必要感や切実感を自分事としてもたせ、粘り強く課題解決に取り組ませることについても研 究を深めたい。
- (2) 特別支援教育の視点を生かした生徒との関わり方について研修したが、発達障害の特性が強かったり、本人の学びにくさが目立ったりする生徒への言葉がけや支援のしかた、環境づくりについてはさらに研修を進めたい。

(記入者 大橋 忍)

進んで課題解決に向かう生徒の育成

~ 「主体的・対話的な学び」の実現を図る授業づくり~

(3年計画の1年次)

校長 蔦 川 誠

1 研究主題について

学習指導要領では、加速度的に変化し、複雑で将来を予測することが困難となることが予想されるこれからの社会を生きるために必要な力として、「生きる力」が新しく定義された。「生きる力」とは、『自分たちが幸せに生きるために必要なことを、自ら考え、自ら行動する力』である。そして、その力を育むために、学校現場では主体的・対話的で深い学びの実現が求められている。

本校生徒の実態は学年によって異なる。落ち着いた態度で学習に取り組むことができても、主体性や思考力・判断力・表現力等の育成に不十分な面が見られ、生徒同士が更に進んでコミュニケーションをとり、主体的に協力して自他を高め合う学習をつくる必要がある学年があれば、反応がよくても、その場限りで合わせた発言をしているだけで真の意味では理解しておらず、学習後に個人で課題に取り組ませた時の正答率が低いため、より深い理解につながるような学習活動を必要とする学年もある。共通しているのは、授業における達成の喜びが、次の活動への意欲に十分に結びついているとは言い難く、学習後の達成感が家庭学習も含め次の活動につながるような工夫をする必要があるということである。

そこで、今年度からは、「進んで課題解決に向かう生徒の育成」を校内研究主題とし、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うこととした。各教科・単元の特性を踏まえながら、学校教育における質の高い学びの実現を目指して、授業づくりの研究を進めていきたい。

2 研究のねらい

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業展開の工夫を、教員が共通理解のもと同一 歩調で実践し、生徒の学習意欲、学習習慣、思考力・判断力・表現力に関する変容を明らかにする。

3 研究仮説

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業展開の工夫により、生徒一人一人が主体的に 学び、思考力・判断力・表現力を向上させることができる。

- (1) 授業改善に関わる取組
 - ア 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業の構想 (今年度の重点項目:『主体的・対話的』な学び)
 - イ つながりを重視した取組
 - ・授業形態の工夫(級友とのつながり)
 - ・板書の構造化(知識同士のつながり)
 - ICTの効果的な活用(教材とのつながり)
 - ・家庭学習課題の効果的な設定(授業とのつながり)
 - *3人1組のグループによる相互公開授業において、授業改善の工夫について研究する。
- (2) 校内研究を支える力としての共通実践
 - ア 教師側の「授業の視点」を取り入れた授業実践
 - *年2回のアンケートで取組状況を確認する。
 - イ 生徒側の「学習の約束」に対する意識の向上
 - *学習委員会による取組及び年2回のアンケートの実施により、変容を確認する。
 - ウ キャリア教育の視点に立った支援
 - *生活記録ノート「私のあゆみ」を活用して、各教科学習の意義の理解や日常的な自己管理能力の育成を図る。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等
7	7	教育指導課・総合教育センター計画訪問
1 0	2 5	授業研究 授業者:進藤
	2 6	授業研究 授業者:栗橋
	3 0	授業研究 授業者:松田
1 1	2 1	授業研究 授業者:小山内
	2 2	授業研究 授業者:馬場
	2 9	授業研究 授業者:立場
	3 0	授業研究 授業者: 庄内
1 2	1 3	授業研究 授業者:三浦直
1	2 2	授業研究 授業者:館
	2 9	授業研究 授業者:鈴木久
	3 1	授業研究 授業者:大久保
2	1	授業研究 授業者:須藤
	7	授業研究 授業者:鈴木隆
		授業研究 授業者:三浦留、泉山、沼岡

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
8	1 8	特別支援学級の授業づくり及び特別な配慮を要する生徒の支援について
		講師 特別支援アドバイザー 上澤 司 氏
8	2 1	保護者への対応
		講師 青森県総合学校教育センター指導主事 根城 亮輔 氏

6 研究の成果

- (1) できる限り同じ教科または技能教科の教員同士で3人1組を作って相互公開授業を実施することで、「主体的・対話的な学び」の授業改善に向けて、より深い話合いができた。
- (2) アンケートの実施により、教師の授業改善や生徒の変容の状況を把握できた。
- (3) 学習委員会の取組により、「学習の約束」が昨年度よりも生徒に浸透した。

7 研究の課題

- (1) 早めの計画・実施により効果的な実践研究を進めたいが、行事と日々の業務に追われ、公開授業がどうしても後半に集中してしまう。
- (2) 生活記録ノート「私のあゆみ」でタイムマネジメント能力を身に付けさせる取組を継続したが、 学級での指導が徹底されないため、定着しなかった。そこで、教員間で話し合い、来年度は「私の あゆみ」に ToDo リストを導入し、やるべき作業に優先順位をつけて整理させる取組を実践する。
- (3) 授業とのつながりをもたせた家庭学習課題の出し方の工夫については、教科担任も様々な工夫をしており、学びの連続性を意識しながら宿題や自主学習に取り組む生徒も若干増加している。しかし、課題の提出率は教科や課題の内容によって差が大きい。家庭学習に取り組ませるための工夫は来年度も継続する。

(記入者 立場 里香)

主体的に学ぶ生徒の育成

~話合い活動や学んだことを表現する場の工夫を通して~ (3年計画の1年次)

校長 佐々木 宏恵

1 研究主題について

本校生徒の実態として、これまで「学習意欲・学力の差の拡大」が課題として挙げられたため、「課題解決に向け、主体的に授業に取り組む生徒の育成」を目指し、身に付けた知識・技能を生かし、協働的に活動する学習を意識し3年間継続的に取り組んできた。教師による導入の働きかけの改善や一人一台端末の有効的活用、生徒個々による授業目標の設定や振り返りの仕方の工夫などを通し、課題解決に向け意欲的に学習に向かう生徒も徐々に増え、積極的な意見交換や生徒同士で教え合う場面も見られるようになった。一方で教科の得意・不得意やコミュニケーション能力の違いにより、一部の生徒のみが積極的に話合い活動に参加し、苦手意識のある生徒はなんとなく話合いに合わせているような場面や、身に付けている知識や技能に個人差があるため、課題解決に至るまで、全員が毎時間主体的に取り組めた訳ではなかった。以上のことから生徒全員が主体的に学習に取り組めるような授業を目指し、研究や研修を重ね、学年、学校全体で対策をたてる必要があると考えた。

そこで今年度は「主体的に学ぶ生徒の育成」を目標とし、話合い活動や学んだことを表現する場面を工夫することで全員が主体的に授業に参加できると考え、取り組むこととした。全校で話合いの基本的な流れやルールを設定し、どのような場面、集団でも話合い活動ができるようにした。「出し合う→比べる→まとめる」を基に、自分の立場を表明し、多種多様な考えに触れながら意見を変容させ、学んだことを生かしながら考え抜くことで、全員が授業に参加できる授業づくりを目指したい。また、授業だけではなく短学活等も利用し、社会のニュースや身近な話題にも目を向けさせ、話合い活動に慣れさせるとともに、視野を広げたり、考えを深めたりする機会を創出したい。生徒の実態を把握し、必要な手立てを講じるべく、さらなる校内研修の充実を図り、研修主題の実現に向けて教師一丸となって取り組みたいと考え、課題を設定した。

2 研究のねらい

課題に対して、生徒に必要感や切実感をもたせる導入を工夫し、見通しをもたせたり、自分の立場を表明してから話合い活動に参加させたりするなど、主体的に課題に取り組ませる。また、立場を再表明する場面を設けることでスモールステップで自分の立場を振り返り、思考の変容を自覚する過程を通して、生徒のさらなる学習意欲の向上に努める。

3 研究仮説

- (1) 各教科及び学級活動、総合的な学習の時間において、話合い活動を取り入れ、自分の立場を表明 し、意見を出し合い、比べ、考えを再構築することで追究意欲の喚起や集中力の持続につながり、 学習意欲の向上が図られる。
- (2) ユニバーサルデザインを意識した板書、ワークシート、端末での振り返りの仕方を工夫することで、学びの過程を生徒自身が理解し、学習内容の定着及び学力の向上が図れる。

4 研究内容

(1)主体的に学習課題に向かわせるための工夫

ア 導入の工夫

- ①課題に対して自分の目標(見通し)を立たせる。興味や関心・見通し・自分と結び付ける。
- ②生徒が疑問や必要感、切実感を得られるよう発問や活動の指示、教材の提示等を工夫する。
- イ 話合い活動の充実
 - ①話合いのルールの統一「出し合う→比べる→まとめる」。
 - ②立場の再表明など意見の変容を感じられる場面の設定。
- (2) 学んだことを表現する場面の工夫
 - ア 学んだ知識や技術をつなげる力、取捨選択する力の育成。
 - イ 既習事項や教科横断的な知識を想起できる工夫。 ウ 個人、ペア、グループでの表現の場の工夫。
- (3) 評価の工夫と積み重ね(指導に活かす評価・記録に残す評価)
- (4) お互いの指導技術を学ぶ機会の設定
- (5) 諸検査の結果を生かす授業の工夫

5 研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	П	授業研究 全体会等
4	12	第1回校内研究 研究についての共通理解 、ローテーション道徳(~2月)
7	6	教育指導課・総合教育センター学校訪問 第4回校内研究:授業研究(要請訪問)道徳 授業者 講師 松森大輝
10	5	三八管内小・中学校道徳教育研究協議会 授業者:市川達弘教諭、一ノ渡正人教諭、小笠原純子教諭

(2) 一般研修

4	19	第2回校内研究 生徒に関する情報交換(生徒指導・健康面など)
5	31	第3回校内研究「指導と指導の一体化」講師:八戸市教育委員会教育指導課副参事 日向端聖指導主事
8	21	第5回校内研究 hyper—QUの結果分析、授業の振り返り(グループ別)
11	29	第6回 小6による授業参観及び中学校の授業体験
1	9	第7回校内研究 特別支援研修 講師:八戸市こども支援センター副所長 小林真由美指導主事
		h y p e r —QUの結果分析、ローテーション道徳振り返り

6 研究の成果

- (1) 全職員で道徳科の授業に取り組み、授業参観や研究協議をすることにより、話合い方法や授業の組み立て方についての理解を深め、各教科の授業でその手法を生かすことができた。
- (2) 生徒自身による授業の振り返りを活用したり、生徒の実態や個々の理解度に合わせて課題を設定したりすることで、主体的に学習課題に取り組む生徒が増えた。

7 研究の課題

- (1) 話合い活動を通して意見を交換し合い、学びを深める場面は増えたが、その内容が定着、向上に結び付いていない部分もある。学んだことがきちんと定着する指導の工夫が必要である。
- (2) 学習を苦手とする生徒の学習意欲の向上や学習内容をアウトプットさせる場面の工夫など全員が主体的に授業に参加できるための、さらなる工夫が必要である。

(記入者 土川 真紀子)

「自分の考えをもち、共に学び、深め合う生徒の育成」

~協働的に学ぶ場面の工夫~

(3年計画の1年次)

校長 岩舘 昇

1 研究主題について

本校では以前八戸市学校保健会研究指定校として『ピアサポート活動』に数年間継続的に取り組んできた。この活動は、他者には言いづらい悩みや心配事がある時に、生徒同士という「気がねのない仲間」が相談にのったり、サポートしたりする『温かい関係づくり』を推進する取組だった。そして、この下地をもとに生徒自らが主体的に考え、発言する態度や意識を引き出すために、生徒同士のコミュニケーション能力の向上を目指して研究に取り組んできた。しかし、数年間続いたコロナ禍で授業での協働的な学びの場面が制限されることが多くなり、その結果、生徒同士がお互いの考えや学びを共有することが減少し、自らの考えに固執しがちになり深い学びに繋げることが難しくなった。そこで、昨年度の教育課程から本校生徒の課題として研究主題中の『共に学び』が特に必要と考え、話合いを通して自分の意見をしっかりと述べることや相手の立場を考え共感することの大切さを認識し、安心して自分の考えを述べ、仲間と認め合える集団の形成ができるようにする「ピアサポート活動」の精神に立ち返り、改めて取り組むこととした。また、生徒自身の思考の表現や、その発信・伝達手段の一つとしての効果的なICTの活用も本校の課題である。

以上のことから、協働的に学ぶ場面を多く取り入れることでコミュニケーション能力の向上による学びの深まりを目指していく。自分の意見が仲間に認められ、互いに磨かれる経験を積み重ねることにより、そのことが自信につながると考える。そして、それが共に学び、深め合う態度を更に強化することにつながり、一層の学力の定着・向上が図られると考え、本研究主題を設定した。

2 研究のねらい

「仲間と認め合い、支え合い、高め合う」ピアサポート活動の手法の見直しと学習活動への応用を図り、各教科や各領域において生徒が主体的に自分の考えや意見をもち、共に学び、深め合う学習への意欲を高めるための活動や授業形態などについて実践を通して研究する。

3 研究仮説

授業の導入から課題設定の段階で生徒自身が自分なりの考えをもち、その解決のために協働的な学びの場面を多く取り入れ、生徒が相互にアウトプット作業を行えるような場面を授業に設定することで、基礎・基本の定着を図り、かつ自ら学びを深めることができる生徒の育成につながると考える。

- (1) 「学習六則」を徹底させる。また、取り組み状況を定期的、継続的に評価し、改善に努める。
- (2) 各教科や各領域において、協働的な活動場面を効果的に設定する。
- (3) 問題解決的な学習のための導入や課題設定を工夫する。
- (4) 教員間の授業内共通理解項目を設定し、指導技術の向上を図る(相互授業参観の実施)。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日		内 容
4	5	第1回校内研修	全体会 (研究についての共通理解)
4	2 6	第2回校内研修	研究テーマ及び研修計画について
6	2 8	第3回校内研修	指導案の書き方の共通理解
7		相互参観授業	一人一授業
1 2		相互参観授業	一人一授業
2	2 1	第6回校内研修	研修のまとめ (今年度の成果と課題)

(2) 一般研修

月	日	内 容
7	2 1	一般研修等支援「問題解決的な授業づくり」 八戸市教育委員会 教育指導課主任指導主事 馬渡 正仁様
1 2	2 2	第5回校内研修 防災教育・安全教育に関しての研修 避難所開設に関する共通理解等について 本校教頭 佐々木 克昌

6 研究の成果

- (1) 学習六則や指導上の共通事項を確認し、2年生では、毎時間、毎日教科担任に授業への取り組み 状況を継続的に評価してもらい、改善に努めることができた。各教科の授業で教え合いや学び合 い等の対話や意見交換の場面を積極的に取り入れることで、生徒対象の授業アンケート「対話や 話合い活動を通して、お互いを尊重・受容する態度が向上したか」において100%となり成果 が認められた。
- (2) 全校でリーダーの生徒を主体として、PSC 活動を行うことができた。生徒会を中心とした活動だけではなく、各生徒の強みを生かした活動を取り入れた。そのことで各学年単数学級という小規模校の強みを生かすことができ、上級生が下級生を指導する「縦の繋がり」をもつことができた。地域の方々を交えてのグループでの話合い活動の場で、PSC 活動の取組が発揮されて、生徒のコミュニケーション能力の成長を促すことができた。

7 研究の課題

新型コロナ感染から対話や協働作業が制限されることが多かった生徒の世代であり、学年によっては意見を交換しにくい雰囲気がある、発表のスキルがわからないなどの課題があったが、授業に繰り返し取り入れることで協働的な学びの場面の確保が実現するとともに、生徒の話合いのスキルが向上し、深い学びにつなげることができた。しかし、生徒1人1台端末の有効な活用法や授業形態について、特に個別最適化された学びの実現と、不登校生徒への有効的な活用方法については、更なる研修及び工夫が必要である。

(記入者 佐々木 信也)

湊中

問題解決的な学習を通しての主体的・対話的で深い学びの研究

~展開部分での学習活動の工夫~ (3年計画の3年次)

校長 川村 隆憲

1 研究主題について

新しい学習指導要領では、教育課程全体や各教科などの学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力など」「学びに向かう力、人間性など」の三つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育んでいくことを目指し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を重要視している。

昨年度本校では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、まとめ・振り返り場面における評価の工夫をテーマとして研究と実践に取り組んできた。はじめはどのように進めていくよくわからないところがあったが、講演を聴いて徐々に、毎時間であったり単元であったりと様々な場面においてより具体的な取り組み方を学ぶことができた。生徒に「まとめ」「振り返り」をさせることで生徒の理解度を確認し疑問点を知ることができた。

本年度は3年計画の3年目となる展開部分での学習活動の工夫について研究し、授業改善及び学習 指導に生かしていきたい。

2 研究のねらい

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、展開部分での学習活動を工夫した授業づくりに取り組むことで、問題解決的な学習の充実を図り、各教科等で目指す生徒の資質・能力の育成を目指す。

3 研究仮説

各教科等で、授業の展開部分での学習活動を工夫すれば、生徒への指導に生かし、学習すること への意欲を高めることができる。

- (1) 単元で育成を目指す各教科で考える資質・能力を明確化
- ① 各教科の年間指導計画に単元ごとに3観点の評価規準を明記する。
- ② 各単元で最低1時間は問題解決的な授業を行う。
- (2) 展開部分での学習活動の工夫
- ① 思考・判断・表現する場面を設定する。
- ② ICT 機器を効果的に活用する。

- (3) 校内研チェックシートによる教師の自己評価 (Plan Do Check Action)
- ① 月ごとに校内研チェックシートを活用して自己評価を行う。
- ② 学期に1回、生徒から授業アンケートをとる。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者 等	全体会等
4	5	・今年度にかかわる研究主題の共通理解	全体会(共通理解)
4	1 9	・校内研の流れについて ・指導課訪問に向けて	全体会(共通理解)
5	15-19	・指導案検討会	各教科ごとで話し合い
6	2	・教育指導課訪問 (課題と対策)	各教科ごとで話し合い
1 1	2 2	・展開部分での学習活動の工夫について	全体会 (実践発表)
1	2 2	・授業参観週間(~26日)	各教科ごと
1	3 1	・今年度の成果と課題について	全体会(共通理解)

(2) 一般研修

月	月	内容・講師・概要 等
5	15-19	・NRT 分析/考察
7	1 1	・講義(展開部分での学習活動の工夫)講師 馬渡正仁
8	2 1	・小中JS講演(脳の成長に適した教育法と学力を伸ばす生活習慣)
		講師 大黒達也
1 1	7	・キャリア教育講演(夢見る力・夢を形にする力)講師 土屋敏男
1	3 1	・講義 (特別支援教育の視点を取り入れた授業作り)講師 青木拓哉

6 研究の成果

本校ではペア学習やグループ学習、ICT の活用など展開部分で様々な工夫をしてきた。生徒の習熟度はかなり差があるが、これらの工夫によって多くの生徒が進んで授業に参加し、自分の考えを深め、表現できるようになったり、学習意欲を高めることができるようになったりした。

7 研究の課題

教師が授業の内容を深めるためにいろいろな工夫をしているが、思うように学力向上につなげられない面がある。やはり授業だけでは限界があるので、いかに授業で内容に興味をもたせながら、家庭学習につなげていくかの手立てを考えていく必要がある。

(記入者 坂井 恵美子)

主体的に課題を解決する生徒の育成

~基礎的・基本的内容の定着に向けて~

(3年計画の2年次)

校長 太田 成人

1 研究主題について

今年度の研修主題、副題共に2年目である。令和4年度の各種アンケートより、昨年度の学校目標の「新しい自分に会いに行こう」で「出会えた」が82%、「白中生であることを誇りに思う」が95%と学校行事等で積極的に参加している生徒が多いことが分かる。反面、学習に対する意欲が低く、すぐにあきらめてしまい、家庭学習が定着しない。その背景には、家庭環境が不安定という面と、基礎知識の低さが考えられる。学校評価アンケートの結果から、生徒につけさせたい力で最も多かった「主体的に取り組む力」を育むために、「気づく・つながる・創り出す」を意識した教育活動を全職員で展開してしいく。このことから、継続して主体的に目の前にある課題と向きあい、それを解決していく能力を育成していくことが必要と考えられ、主題に設定した。

今年度は、他の教科での学習の仕方を学び合うことで、生徒一人一人の実態に合わせた学習が進められるよう、学年内での授業参観を進めていく。また、生徒の生活のリズムや学習の取り組み方のアンケートを継続して生徒自身の課題に気付かせるとともに、生徒の実態に合わせて基礎的・基本的な知識及び技能を定着していく。授業では、発問や課題の研究を深めて授業展開を図り、生徒が課題解決に向けた必要感や切実感を持続して、主体的に課題に取り組めるよう、生徒の学力向上及び教師の授業力向上を図っていく。

2 研究のねらい

各教科・領域の特性を生かしながら、授業における発問の仕方やICTを活用した課題提示などの工夫及び、課題に対する立場の表明を明確にして、生徒の学びに対する意欲を喚起させる。特別支援教育の視点を取り入れた授業を展開し、共通実践を進めていくことで、基礎的・基本的内容の定着につなげていく。

3 研究仮説

各教科・各学年において、基礎的・基本的な内容を定着させ、その知識を基に、立場を明確にした活用を図る学習に取り組ませることで、主体的に課題に取り組む自信をもてると考えられる。

- (1) ア 各教科・領域ごとに、導入における発問の工夫と基礎的・基本的内容の定着に向けての工夫を行い、日々の授業実践を通して検証する。
 - イ 学年間での教員相互の授業参観(6月・7月・11月、全員参加)の際に、指導案検討 や授業研究を通して、他教科の様子を知ることで指導力の向上に努める。また、教 員相互の同僚性を高め、アの方法についての検証を深める。
 - ウ 授業では、その日学習する課題や目標の可視化を全教員で進めていく。
- (2) 研究テーマに沿った内容のアンケートを生徒及び教員に行い、その結果を共有し実践に つなげていく。また、生徒の生活実態についても調べ、学習に向かう生活態度の形成に つなげていく。
- (3) 一般研修では、授業において一人一台端末を活用していけるよう、それぞれの実践内容を発表し合い、スキルアップを図る。

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

, ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	列加区間に至って技术列加可			
月	日	研究内容	対象	
4	3	校内研修についての共通理解	全体会	
5	1 9	計画訪問・要請訪問に向けての指導案検討	教科部会	
	3 1	校内研に関わるアンケート実施・集計①	生徒・教員	
6	5	教育指導課・総合教育センター・こども支援センター中学校訪問 ◎校内研究テーマに向けての各教科の授業(研究授業参観1回目)	教科部会	
		要請訪問〈研究授業支援〉 2学年 社会 山内 典剛教諭	全体会	
7	1 0	教員相互授業参観 2回目	教科・学年	
	6	教員相互授業参観 3回目	教科・学年	
1 1	2 9	領域部会 (今年度の研究成果と課題)	領域部会	
	3 0	教科部会 (今年度の研究成果と課題)	教科部会	
1 2	5	校内研に関わるアンケート実施・集計②	生徒・教員	
1	2 5	本年度の研究のまとめと次年度に向けて	全体会	

(2) 一般研修

月	日	内容
5	2 3	NRT分析
8	2 1	総合学習についての勉強会(探究プロセスを明確にした学習計画や評価等)

6 研究の成果

- (1) 各教科の授業においては、計画訪問や要請訪問を通して、指導案検討会を複数行うことで、各教科の研究を深めることができた。特に、導入における発問の工夫や立場の再表明について、研究協議等で話合いも活発にできた。学年間の授業参観においては、他教科での生徒の様子を知ることで、自分の教科では気づかない生徒の得意な部分を知り、生徒の一人一人の実態に合わせた学習の手立てを知ることができたり、教科の特性を生かした授業展開を知れたりと学びが多かった。
- (2) 授業や各学年における学習コンテストの実施やテスト週間中の学習会など、基礎的・基本的内容の定着に力を入れて取り組んだ。授業では集中して取り組もうとする姿勢が見られた。
- (3) 授業における一人一台端末の活用では、教科や学級活動だけでなく、総合的な学習の時間や行事など、積極的に使用することができた。

7 研究の課題

- (1) アンケートを通して、同じ項目で生徒の実態について調べて2年目であるが、学習に向 う態度の形成につなげていくことが課題である。継続したアンケート調査と、具体的な 施策を進めていく必要がある。
- (2) 学年間の授業を見合うことは効果的であった。教科間での学びあいを学年ごとに進めていくことで、より生徒の実態に合わせた学習に向けたスキルアップができるのではないかと考える。

(記入者 竹内 明美)

生徒が主体的に学習に取り組む授業の工夫

~生徒が自ら問いをもてる課題設定の工夫をとおして~

(3年計画の2年次)

校長 沼上 進一

1 研究主題について

本校は昨年度「生徒が主体的に学習に取り組む授業」とはどうあるべきかを主題として掲げ、「必要感をもって問題解決に取り組ませる指導をとおして」を副題として設定し、研究を行った。授業におけるICTの活用や、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、本校職員が講師となり、主題に迫るための研究機会を設けた。「授業見せ合い週間」では、全教員が互いに授業を見せ合うことで、教科を越えた学び合いの機会が得られた。

年度末に行ったアンケートでは、職員の70.6%が研究主題に対して高評価であった。自由記述では、「生徒が興味をもてるような課題提示の仕方や文言の工夫ができた」、「ICT・1人1台端末・視覚的教材の積極的な活用ができた」、「学習の見通しと振り返りの習慣づけができた」、「教え合いや学び合いの時間を設定することで生徒の意欲が向上した」、「場面設定や学習形態を工夫することで活発な活動につながった」、などの回答が寄せられた。副題については、「理由を考えさせると意見が活発に出た」、「目的・場面・状況を必ず設定して言語活動を行ったことで、主体的な生徒の活動につながった」、などの回答があった。一方、「必要感」の捉えについて教員間で共有できていなかったために、具体的な実践まで到達できなかったという反省点もあり、主題に比べて評価が低い結果となったと考えられる。

そこで今年度は、授業における「課題設定の工夫」に重点を置き、副題を「生徒が自ら問いをもてる課題設定の工夫をとおして」として授業改善に取り組む。生徒が自ら「問い」をもてるような課題設定や、導入部分におけるはたらきかけの工夫を行うことで、生徒の「主体的な学び」の実現を目指す。「生徒の学びを支援する」という視点をもち、指導の仕方を刷新していくことで、研究主題に迫っていきたいと考える。

2 研究のねらい

授業の中で生徒が自ら問いをもち、主体的に学習に取り組むためには、生徒の学ぶ意欲を喚起するような課題提示の仕方やそこに至るまでの導入におけるはたらきかけが重要である。そのため、生徒を主語にした指導観をもつことや学びの自律を促すための支援を行うことなど、教員の意識改革が必要になる。したがって、各教科及び領域において授業における課題設定とそこに至るまでの導入におけるはたらきかけについて、実践をとおした研究を行う。

3 研究仮説

各教科及び領域において、授業の中で生徒が自ら問いをもつような課題設定を工夫することで、 学びに対する興味・関心を喚起し、主体的に学ぼうとする態度を育てることができる。

4 研究内容

以下の視点に基づいた授業研究を複数回実施することにより、教師の指導観の再考や授業力の向上を図る。

- (1)生徒が自ら問いをもてるような、課題設定の工夫。
- (2) 生徒に問いの意識が芽生えるような「導入におけるはたらきかけ」の工夫。

(1)研究仮説に基づく授業研究等

月	日	内 容
4	3	全体会 (研究についての共通理解)
6	1	小中ジョイントスクール推進事業 小学校職員による、本校の授業参観
9	2 7	計画訪問指導案検討会
1 1	1	見せ合い授業週間 (~11/15)
1 1	9	小中ジョイントスクール推進事業 本校職員による、小学校の授業参観
1 1	1 6	見せ合い授業の振り返り
1 1	2 4	領域・教科部会(今年度の成果と課題)
1	1 8	全体会 (成果と課題、次年度の研究主題について)

(2)一般研修

月	日	内容・講師・概要等
4	2 6	配慮を要する生徒に関する情報交換・共通理解
6	1 2	「『みんなの学校』を作るために自分ができること」
0		講師 大阪市立大空小学校 元校長 木村 泰子氏
7	5	「生徒自ら問いをもち、主体的な学びを実現するための手立て」
'		講師 葛西 良子
7	2 6	「特別な支援を要する生徒への対応について」講師 第二中学校 佐藤佳子氏
1	1.0	「個と集団の理解を活かした学級経営」(QU分析)
1	1.0	講師 こども支援センター 学校体制支援アドバイザー 原 寿氏

6 研究の成果

- (1) 研究主題についてアンケートを実施したところ、職員の88%が高評価であった。具体的には、「時間の使い方や課題解決方法などを生徒自身に決めさせる時間を全授業最大限とった」(英語)、「子どもたちで解決できる場と時間を与えること、教えすぎないことを意識した」(数学)、「問いに対して課題を解決するための手立てをいくつか準備し、個人やグループで取り組めるように工夫した」(国語)などの生徒の主体性を尊重する取組についての回答や、「『自己調整シート』を活用し、授業中に理解が不十分なことを家庭学習などで取り組めるように促した」、「毎時間の終わりや定期試験ごとに振り返りシートを活用し、自分の学びを振り返られる工夫をした」(どちらも英語)などの生徒の自己調整力を育成する取組についての回答があり、各教科で活発な取組が行われたことが見て取れた。
- (2) 副題については、80%の職員が高評価であった。「生徒が問いをもてるような材料・用具を選択させ、作ってみたいと思うような課題の文言選びをするようにした」(美術)、「導入部で既習事項とのズレに着目させ、解決方法を考えさせた」(数学)などの回答があり、教材や課題提示の工夫などの導入部におけるはたらきかけに注力した教員が多かった。また、生徒に対して行った「問いをもって授業を受けることができたか」というアンケート結果も85%が高評価だった。

7 研究の課題

今年度は各教科において積極的な取組が行われた一方で、それらの手立てが生徒の主体性にどう結びついていくのかについては、今後さらに検証の必要があると考える。また、教員からは「生徒一人一人に問いをもたせること」や「個に応じた授業内容を工夫すること」の難しさが課題として挙げられた。来年度は、「見通しを立てられる力」の育成に重点を置き、生徒一人一人が自分に合った学習計画の立て方やその振り返り方を工夫し、より主体的に自分の学び方を調整できるような学習支援の場面設定や授業の在り方を研究していきたい。 (記入者 葛西 良子)

生徒の言語能力を高め、学びに向かう力を育成する指導の研究

~互いの考えを深め合う活動を中心として~

(3年計画の3年次)

校長 富樫 克輝

1 研究主題について

本校生徒は、「生活をよりよく向上させる意識」、「学ぶ意欲」、「コミュニケーション能力」の低さが課題である。そこで生徒が生活を見直し、学習意欲を高めることができるように、「課題の提出」・「1分前着席」・「授業道具の準備」から成る「学習三原則」を定めており、日頃から教師が声を掛けたり、生徒会や学年プログラム委員会などと連携して達成状況を調べたりしながら、生徒に対し意識づけを図ってきた。また、コミュニケーションの活性化を目指して、各種調査や面談を通じて良好な人間関係づくりに努めるとともに、授業ではグループ活動や対話活動を重点的に取り入れることで、発言しやすい雰囲気づくりを心掛けてきた。特に年間6回の「学級話合い活動」では、自分の意見を表現しようとする生徒が増えてきている。

一方で、特に教科の授業においては自分の考えに自信がもてないことや、考えを伝えるための言語能力が 乏しいことから、なかなか意見を表現できない生徒がみられる。さらには基礎・基本の定着が不十分である ことから、意見をもつことができない生徒も少なくない。これらの点を改善し、主体的に学ぶ姿勢を育むこ とが急務である。

そこで、令和3年度から3年計画で「自分の考えをもつ」、「自分から表現する」、「互いに深め合う」と段階を設けながら、学びに向かう力を育成する指導の研究を進めることとした。昨年度は考えを表現する場面の設定などの取組を通じて、生徒が授業の中で自分の意見を表現しようとする意識が以前に比べてみられるようになった。

今年度は昨年度までの取組に加え、考えを深め合う場面を多く設定することで、生徒全員が互いの考えを 尊重し、主体的に学びに向かうことを目指して、実践を行っていきたい。

2 研究のねらい

生徒に基礎・基本を定着させるとともに、言語能力の向上を図り、生徒自身の「学びに向かう力」を育成する指導法の確立を目指す。

3 研究仮説

授業における導入場面や学習形態の工夫、授業と家庭学習との連携を図る取組を通じて、生徒に基礎・基本を定着させることや、授業などで考えを深め合う場を取り入れながら、生徒の言語能力の向上を図ることで、生徒が自信をもって発言したり考えを深め合ったりできるようになり、ひいては主体的に学習に臨むようになるのではないか。

- (1) 基礎・基本の定着や考えを深め合う場面の設定など、教科の特質に応じた授業改善の推進
- (2) 家庭学習の充実につながる「学び方」指導
- (3) 特別支援教育の視点や、ICTの効果的な活用などを土台にした学ぶ環境づくり
- (4) 自主的な態度を育てる学級・学年経営の推進

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容	
9	1 3	授業参観月間開始 (対象者:全員)	
1 0	4	授業参観月間終了	
1 1	1 3	指導課・センター訪問	

(2)一般研修

月	日	内容
1	1 7	拡大校内研
		「特別な支援を要する生徒に対する、学級における配慮のあり方について」
		講師:八戸学院短期大学部 幼児保育学科 教授 野口和也氏
		〈概要〉
		・ 14:20~15:10 5 校時 授業参観 (7学級)
		気になる生徒の様子と教師の対応についての参観
		① 1 − 1 →②知的→③ 2 − 2 →④ 2 − 1 →⑤自・情→⑥ 3 − 1 →
		⑦ 3 − 2
		・15:25~16:25 それぞれのクラスについて助言
		生徒の様子、教師の関わり、質疑応答
		・16:25 謝辞(校長)

6 研究の成果

授業参観週間を設定し、教員同士でお互いの授業を参観し合った。その際に、授業参観シートと称して「導入の工夫」「互いの考えを深め合う活動のための学習形態の工夫」「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりについて」の3点について、授業者に記入してもらった。参観者には、参観後にその観点について感想を記入してもらい、授業者へのフィードバックを図った。感想として、「教材の提示の工夫や、言葉掛けの仕方などを改めて考え直すきっかけになった」や、「他教科の授業を参観することで、自分の授業とは違う生徒の様子を見ることができ、刺激になった。」などといったものがあった。また、課題の提示の仕方を動画で行うなど導入の仕方にヒントを得た職員もいた。これらのことから、授業を見直すきっかけとなり、授業改善や授業力向上に役立ったのではないかと考える。

7 研究の課題

研究主題が3年目であり、これまで段階的に行ってきたことが十分に浸透しているかといえば、そうではない部分もある。来年度の研究主題についてのアンケートによると、半数以上が主題を継続したいという考えであった。生徒に付けたい力としては、「基礎・基本の学力」「自主的な態度」といったものを望む声が多かった。これらの点については、生徒の実態と、求められる生徒像とをすり合わせながら来年度開始までに、吟味して決めていきたい。また、出張・校務の都合もあるが授業参観やアンケートの100%参加に至っていないことも含め、職員の参画意識を高めていくことも課題である。

(記入者 戸田 香)

志をもって、主体的に学ぶ生徒の育成

~問題発見につながるための導入と学力を保証するための まとめや振り返りの工夫~(3年計画の2年次)

校長 佐藤公一

1 研究主題について

本校では校訓に「自主」「協同」を掲げ、主体的に、なおかつ個々の役割や個性を尊重しながら、お互いを高め合える集団づくりに取り組んできた。本校生徒は、小・中学校ともに小規模校で学年を超えて協力し合いながら生活しているため、自然と助け合いの精神が身に付いており、教室内や異学年との人間関係も良好である。授業での教え合いや課題解決に向けた取組など、学びの場面での協調性は高い。

しかし、その反面、ほとんどが小学校からの顔見知りであることから、お互いの能力もよく知り得ており、それが切磋琢磨する気持ちに結びつきにくい要因となっているとも考えられる。

生徒は総じて素直であるが、その素直さゆえに、与えられた仕事に対して責任をもって取り組むことができる傍ら、自主的かつレベルアップした活動や、場に応じた表現については消極的である。そのため、もてる力を発揮しきれていない傾向があり、学習内容の定着も低い。

昨年度は、主体的な学びの実践として、授業の導入部に力点を置いた問題解決的な学習と、授業のまとめの段階で「まとめ」または「振り返り」の活動を取り入れることを大きく2本柱とし、つまずきの共有化を図ったり、生徒が自らの課題に気づいたりすることで、自らの学習を調整し、主体的に学ぶ生徒の育成を目指した。継続して「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」の研究を進めることで、よりよい学習環境を実現できると考える。今年度は、導入の工夫を継続しつつ、まとめや振り返りの活動の工夫により、主体的な学びが充実し、生徒一人一人の学習意欲を高めることをねらいとして本研究主題を設定した。

2 研究のねらい

- (1) 生徒のもつ疑問や「ズレ」を拾い上げ、ともに学習課題を設定し、問題解決に向かうことが生徒の学習に対する切実感・必要感を強めると考える。また、生徒の疑問を共有することでつまずきの共有化を図ることをねらいとする。
 - さらには、授業づくりにおいては、教師や生徒による UD チェックの評価も参考にしながら、「様々な指導の工夫や手立て」「個に応じた適切な支援」に重点をおき、進んで学ぶ生徒の育成や基礎学力の向上を目指す。
- (2) まとめや振り返りの活動を充実させ、学習者自身が本時のねらいの達成や予習・復習の課題を明確にする。学習者自身が振り返ることで学びと評価が一体となり、より主体的な学びが充実する。さらに、指導者が小テストや口頭などで定着度を確認し、個に応じた課題を与えたり、添削指導などを行ったりすることで、生徒はより深く学び、学力向上につなげることを目指す。

3 研究仮説

- (1) 問題解決的な学習により、自ら疑問を抱き、もちえた仮説が理にかなうかどうか自分で考える過程の中に学習の目的があることに気づくことができる。また、ユニバーサルデザインとキャリア教育の視点も継続して取り入れることで、基礎的・汎用的な能力を高めることにつながり、主体的に学習に取り組むことができる。 (2) まとめや振り返りの段階で、自分の意見を伝えたり、他人の意見を聞いて自分の意見と比
- (2) まとめや振り返りの段階で、自分の意見を伝えたり、他人の意見を聞いて自分の意見と比較したりすることで学びが深まるとともに、友人のよさや共に学ぶことのよさに気づくことができ、さらには、課題も明確になる。分からないことに気付くことも大切な学びであり、新たな課題を発見することができれば、自主学習ノートや家庭学習の取組に反映させることができ、次の学習に生きる自己評価となる。また、日常生活とどのように関連するか考えたり、学びの価値や楽しさを実感したりすることにもつながる。

4 研究内容

(1)問題解決的な学習の工夫

生徒が自ら問題を発見し、主体的に問題解決に向かえるよう、授業の導入から課題設定までにおいて教師の働きかけを工夫する。そこで生徒に「ズレ」の問いをもたせることにより、主体的・対話的な学びの実現につなげていく。

流れとしては、問いの意識こそが対話を活性化させ、興味をもつことが学ぶ意欲につながる。また、自分以外の人の意見を聞くことで思考も変容していく。さらに、間違えるとリベンジしたい気持ちにつながり、生徒は自らの知識と経験を駆使して、問題解決に努めようと意欲的に取り組むようになる、ということである。

よって、以上のことを念頭に置きながら、授業の導入部の教師の仕掛けを工夫した授業づくりに取り組みたい。また、学習課題、流れ、まとめについてはユニバーサルデザインの視点を生かして効果的に提示することとする。

(2)まとめや振り返りの工夫

授業のまとめの段階で、自分の意見を伝えたり、他人の意見を聞き自分の意見と比較したりする機会を設ける。また、学習内容を定着させるために、小テストや振り返りの活動を取り入れる。小テストの解答状況や理解したことを言葉で表すことによって、学習内容のつまずきや定着度を把握する。

(1)研究仮説に基づく授業研究

(1/4/	(1) 切先仮説に基づく反表切先			
月	H	研修予定(学年・授業者・講師等)	全体会等	
4	4	教科研究主題 共通理解	全体会(共通理解)	
5	1 7	教育指導課・センター訪問	授業参観・協議	
8	2 1	校内研 まとめや振り返りについての実践発表 吉田教諭	全体会(共通理解)	
9	6	校内研 まとめや振り返りについての実践発表	全体会(共通理解)	
1 0	1 1	校内研 まとめや振り返りについての実践発表 スワンソン教諭	全体会(共通理解)	
1 1	1 5	JS 小学校授業見学(大久喜小学校)	授業参観・協議	
1 1	2 2	校内研 まとめや振り返りについての実践発表 沖野教諭	全体会(共通理解)	
1	2 4	校内研 伝達講習(視聴覚)フォームを使った振り返り	全体会(共通理解)	
2	2 1	校内研 まとめや振り返りについての実践発表	全体会(共通理解) 全体会(成果と課題)	

(2)一般研修

(_//	71X P/1 11/2		
月	日	研修予定内容 (担当等)	
4	4	一般研修 八戸市立南浜中学校 校長 佐藤 公一	
		「まとめと振り返りの工夫された授業づくり」	
7	5	盲導犬キャラバン講演会 日本盲導犬協会 仙台訓練センター 豊田 氏	
		盲導犬1頭(PR犬) 「盲導犬の仕事とは(盲導犬の訓練等紹介)」	
7	1 2	参観日講演会 八戸市立市川中学校 養護教諭 片岡 千帆子 氏	
		「脳とメディアの初耳学」	
9	2 2	南浜中学校の歴史を知る講演会 種差観光協会 会長 柳沢 卓美 氏	
		「南浜中学校の歴史について」	
1 0	1 3	いのちを育む教育アドバイザー事業 三戸中央病院 片桐 清一 氏	
		「思春期のこころとからだ」	
2	1 3	薬物乱用防止教室 講演 函館税関八戸税関支署	

6 研究の成果

(1) 今年度の研修は、校長からの「まとめや振り返りが工夫された授業づくり」の講話で始まった。その後、校内研で教師の実践を発表してもらい、「まとめや振り返り」の方法について情報共有した。ワークシートに記入させる方法やタブレットに入力させる方法など、それぞれで生徒の変容を確認する材料になり、授業改善に役立っていた。

また、教師はほぼ毎月一回、生徒は1学期と2学期末にUD(ユニバーサルデザイン)チェックを行い、校内研で成果や課題など発表し、良いところは継続できるよう呼び掛けている。

(2) 生徒の学校評価アンケートでは、「授業での学習課題が提示され、まとめや振り返りのある授業」についてA「そう思う」の評価が50%、B「どちらかといえばそう思う」の評価が30%で、全体の8割である。教師の回答では、A評価とB評価を合わせて100%であり、授業のほぼ毎時間に、まとめや振り返りの活動を取り入れ、学んだ内容を再確認している。生徒は自分の言葉でまとめたり、また、自分と他者の意見を比較したり、他者の意見を取り入れたりすることで学習内容を深めることにつながっている。

7 研究の課題

- (1) 授業を全員で参観し、研究協議等を行う校内研を実施することができなかったので、来年度は全教員で授業を参観しての校内研を計画し、全体での共通理解を図りたい。また、「まとめや振り返り」を中心に校内研での実践発表を行ったが、生徒は授業直後に授業内容を振り返ると理解していても、次の授業の始めには定着していないことが少なくない状況である。また、前時の復習に時間がかかることもあり、本時の授業の目標に迫る時間が少なくなることがある。
- (2) 小中ジョイントスクールでの目標学習時間の達成率は1学年87.5%、2学年75.0%、3学年42.9%であり、全校的に学年が進むにつれ減少傾向にある。まとめや振り返りの活動が、学習の達成感を味わうことや次時につながる学習意欲と見通しをもつことまでに至っていない。生徒のまとめや振り返りの活動から、成長が見られた生徒を褒めたり、個別の指導を行ったり、効果的な学習方法を具体的にアドバイスしたりするなどして、生徒自らが学習の調整を図りながら、ねばり強く取り組む力の育成を目指した授業づくりが必要である。

(記入者 坂 剛)

主体的に学ぶ生徒の育成

~課題設定の工夫と振り返りを通して~

(3年計画の3年次)

校長 竹 花 和 人

1 研究主題について

本校では、主体的に学ぶ生徒の育成を目指し、「課題設定」と「振り返り」について、新学習指導要領に沿っての研究を進めてきており、具体的な研究目標を、①問題解決的な授業づくりのための「課題設定」、②メタ認知能力を働かせた「振り返り」とその活用であるとした。

今年度は特に、研究目標②を中心に研究し、「振り返り」をさせるだけではなく、「振り返り」によって得た気づきや、浮き彫りになった自身の課題を次の授業へと生かし、学びを深めていくことをゴールに研修を進めた。また、教師同士も主体的・対話的に学び合える風土を大事にし、教員間でその手法や生かし方を共有することで、継続的・効果的に「振り返り」とその活用を実践していくことができ、主体的な生徒の育成へとつながると考えた。

2 研究のねらい

主体的に学ぶ生徒を育成するために、課題設定と振り返りの場面を工夫して授業実践を行う。

3 研究仮説

問題解決的な課題設定と、生徒の振り返りを次の授業につなげさせる働きかけを工夫することで、 生徒のメタ認知能力が高まり、主体的に学ぶ生徒を育てることができると考える。

4 研究内容

- (1) 「課題設定」と「振り返り」の工夫
 - ア 「思考のズレ」を生み出し、生徒自ら「問題発見」につながるような「しかけ」作りを考え、実 践する。
 - イ 生徒のメタ認知能力を高めるための「振り返り」のさせ方と、「振り返り」そのものを以下の3 つの視点で考え、実践する。
 - ・生徒の学びの質の向上につながる
 - ・生徒の実生活における活用につながる
 - ・教師による生徒の見取りと次の学習課題の設定につながる
 - ウ 実践したことを教員同士で対話を通して共有し、互いの取組を振り返り今後の実践に生かす。

(2) その他の研修

ア 教師の意識を変える命最優先研修

市民病院の今明秀医師を招いて、学校現場における救急事例の紹介とそれぞれの事例において取られた具体的対応について講義してもらい、生徒の命を守るための予備知識やスキルを学ぶ。

イ ファシリテーション研修

長崎純心大学の水畑順作氏を招いて、生徒の主体性を引き出すためのファシリテーションスキルを学ぶ。

ウ 心のケア研修支援事業

八戸学院大学短期大学部幼児保育科の野口和也教授より、支援等が必要な生徒の実態把握と適切な手立てや対応等について学ぶ。

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要等		
5	31	対話の会		
		「振り返り共有会		
		~振り返りの生かし方・引き出し方・つなげ方~」		
8	28	教育指導課 計画訪問		
		校内研修 要請訪問 技術科		
1	11	今年度の校内研究のまとめと振り返り		

(2) 一般研修

	, , , ,	• •	
月	日	内容等	
7	26	「教師の意識を変える命最優先研修」 講師:八戸市民病院事業管理者 今明秀氏 AEDを用いた救急救命法の演習と、学校現場での救急要請の事例についての講演を 通して、自分事として救命に関わることの大切さを学ぶことができた。	
8	21	「ファシリテーション研修」 講師:長崎純心大学 水畑順作氏 主体的・対話的で深い学びの実現させるための「振り返り」で大切なことは、真の要 因に迫り本音を引き出すことであり、そのためのファシリテーションスキルを学ぶこと ができた。	
12	14	「心のケア研修支援事業」 講師: 八戸学院大学短期大学部幼児保育科 教授 野口 和也氏 支援等が必要な生徒の授業参観、参観後の情報交換会の中で、適切な手立てや対応等 について指導助言をいただき、研修を深めた。	

6 研究の成果

- (1)「振り返り」における成果
 - ・大分県教育センター作成の『「振り返り」の充実に向けて』における13の視点を全教員で共有し、参考にしたことで、各授業者が「振り返り」の目的・ねらいを明確にして授業に臨むようになった。その継続により、見通しをもって授業を組み立てること、発問の質の向上、より深い生徒の実態把握へとつながった。
 - ・「振り返り」によって、自身の成長や学習の取組状況等を客観的に分析する視点が生徒の中に育ってきたため、次の学びへの新たな目標やビジョン、意欲をもつことにつながり、 学習における望ましい循環が生まれた。また、「振り返り」によって生徒自身の自己理解 が進み、学習を進める上での自己調整へと役立っている。
- (2)「課題設定」における成果
 - ・生徒の疑問点を吸い上げて課題に設定する、結果の予想から入る、二択三択による立場表明をしてから結果を確かめる学習に入る等、「思考のズレ」を取り入れた「課題設定の工夫」を各教科の特性を生かして実践することができた。

7 研究の課題

- (1) 今年度「振り返り」を中心に研究した中で、生徒の「振り返り」の内容から、学びが自分事になっていないことが見受けられるケースがあり、教師から与えられた課題ではなく、様々な仕掛けによって生徒に切実感・必要感をもたせるような課題設定がなされるからこそ、主体的な学びにつながると改めて認識した。
- (2) 今年度の取組 (課題設定の工夫と振り返りを意識した授業づくり) を進めていく中で、本校生徒の「学ぶ意欲」や「学びに向かう態度」に課題があることが浮き彫りになった。それらを改善し、「深い学び」を実現するために、「対話」をどう活用していくかが来年度の課題である。

(記入者 豊川 志麻)

白山台中

主体的に思考・判断・表現する生徒の育成

~「問い」をもち、主体的・対話的に探究する学習活動の研究を通して~ (2年計画の1年次)

校長 伊崎 己治

1 研究主題について

本校では、昨年度まで2年間「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を目指し、「主体的に思考・判断・表現する生徒の育成」を研究主題に定め、研究を進めた。特に昨年度は、「学習評価、評価結果の分析、それを前提とした学習活動を効果的に連携・循環させて、生徒の学習改善、教師の指導改善を図る」ことをねらい、「指導と評価の一体化」についての研究を推進した。

「指導と評価の一体化」についての理解を深め、「評価を工夫し主体的・対話的な学習につなげることの実践」については一定の成果を得たが、「前段階の評価結果を分析し、次段階の課題を発見させる働きかけの工夫」、「生徒の自己評価や相互評価から課題を見出させ、その解決を図る探究の工夫」が課題として残った。

以上のことから、今年度から2年間「主体的・対話的で深い学び」を深化させるために、生徒の「問い」を引き出すことを主眼として、教師側のしかけの工夫や生徒への支援の工夫、評価の充実について追究する。

2 研究のねらい

昨年度までの研究副題でもある授業と評価の一体化を意識しながら、生徒が自らの学びに今以上に主体的に取り組めるよう、教師による効果的な"しかけ"の工夫や、生徒の「探究」を支援する教師側の手立てと指導法の工夫によって、生徒の学習意欲向上につなげる。

3 研究仮説

前段階の学習評価を受けて、生徒が「問い」をもつような教師側の"しかけ"を工夫することによって、生徒が意見をもつとともに、他者との対話を通して探究に向かえるよう支援する。これらに継続して取り組むことで、生徒の「主体的に学習に向かい探究する力」を高めることができると考える。

- (1) 年間指導計画における長期的な「指導と評価の一体化」の工夫
 - ア 1単位時間の授業、単元指導計画等における短期的な指導と評価の一体化の工夫。
 - イ 日頃の継続的な実践から、次単元や次年度の指導につながる問題点の共通理解。
- (2) 学びに向かうための教師側の"しかけ"の工夫
 - ア 「主体的な思考・判断・表現につながる発問・活動指示・教材提示・課題提示」の工夫。
 - イ 「課題に気づいたり、共有した課題を解決したりするための話合い活動」の設定の工夫。
 - ウ 「相手を尊重して話し合う態度」、「根拠を明確にした意見の述べ方」等について教師間の 共通認識と情報共有。継続的な指導のための学区内小学校との連携。
- (3) 特別支援教育の視点を踏まえたユニバーサルデザインに基づく授業づくり
- (4) ICTを活用した思考力、発信力、自己表現力の育成

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究(内容)	
7	上旬	・授業相互参観週間(教科・領域部会)	
9	4	・教育指導課訪問参観授業(教科・領域)	
1 0	中旬	・授業相互参観週間(教科・領域部会)	
1 1	1	・中教研教科部会授業発表 国語授業者:工藤史奈・数学授業者:目時沙織	
1 1		美術授業者:大前彩香(中堅研後期授業研究を兼ねる)	
1 2	初旬	• 中堅研前期授業研究 英語授業者: 佐藤茉衣	

(2)一般研修

月	日	一般研修 (内容)	
4	4	・校内研修計画についての共通理解(研修主任)	
$\frac{4}{2}$	4	・危機管理研修(教頭 栁谷貴広、養護教諭 田中亜紀)	
4	2 0	・1 人 1 台端末(Chromebook)を使用した授業の活用実践事例の交流研修	
4		主担当 視聴覚部担当:菰田聖一 教諭	
8	3	・ 救急救命法講習 (養護教諭 田中亜紀)	
0	9	・「主体的に思考・判断・表現する生徒の育成」についての共通理解	
8		教育指導課 中村美穂 主任指導主事	
8	中旬	・授業研究週間に向けた指導案検討会2(国・数・美部会)	
0	中旬	・教育指導課訪問に向けた指導案検討会(教科・領域部会)	
9	上旬	・授業研究週間に向けた指導案検討会3(国・数・美部会)	
2	下旬	・次年度の校内研修について	

6 研究の成果

- (1) 授業実践における教師側のしかけについての講話から、「教師のはたらきかけ」と「対話的活動」「指導と評価の一体化」について、校内での共通理解を図ることができた。
- (2)「主体的・対話的な学習につながる評価活動」の実践的研究のまとめとして、中教研での研究授業において、日々の授業実践の中での主体的・対話的な学習活動の展開の一例を提案できた。
- (3) 授業における ICT 機器の活用事例をについて交流研修したことで、プレゼンテーションソフト を使用した学習活動や、映像資料の提示など、使用頻度や活用法が昨年度より充実した。

7 研究の課題

- (1)対話的・探究的な問題解決をより充実させ、互いの意見や考えを交流させ学び合える効果的な場の設定の工夫が今後も必要と考えられる。また、生徒と教師、生徒間でのやりとりの中で用いる語彙を増やすことなど、「正しく伝える力」の向上が新たな課題として浮かび上がった。
- (2)生徒が課題解決を終えた後も、新たな課題の発見や探究に向かう意欲を高め、自ら課題解決に取り組めるよう、発展的な探究や知的好奇心を育む課題の設定が今後も求められる。
- (3) ICT の活用にあたり、備品機器の保管場所や現有数・使用状況など、管理運用面で職員間の共通理解が今後必要になる。また、活用事例の共有など授業実践の蓄積を継続していく必要がある。

(記入者 大久保 俊行)

「主体的・対話的に活動する生徒の育成」

~ I C T を活用し、合理的配慮に基づく指導の工夫~ (3年計画の1年次)

校長 高橋 健

1 研究主題について

令和元年度から4年度まで「意欲的・主体的・協力的に活動する生徒の育成~自ら学び考え表現できるための教師のはたらきかけの工夫を通して~」の主題のもと、学習課題(ねらい)を板書等で明示するとともに、ねらいに迫るための発問や明確な指示等、導入段階における教師の働きかけを意識した授業実践を行ってきた。

今年度は、昨年度までのはたらきかけの工夫等の実践を踏まえ、主題を「主体的・対話的に活動する生徒の育成」とし、1年次は「主体的な学び」に焦点化して実践を進めることとした。3年間の中で、段階的に「見通し」「振り返り」「多様な他者との学び合いの場を設定」「考えることを通じ、自己の考えを広げる」場面を工夫すること必要があると考える。その際、多様な生徒の興味・関心を一斉授業の中で高め、主体的に学習に向かわせるためには、ICT機器の活用と、合理的配慮が不可欠であると考える。これまでも、ICT機器の活用に関する研修会を実施し、板書やグループ活動の工夫などの特別支援教育の視点を取り入れた授業実践を行ってきたため、その実践内容を生かし、発展させることで主題に近づいていきたいと考える。

2 研究のねらい

「見通し」の場面において、生徒に学習活動のゴールをイメージさせることにより、前向きな取組につながるとともに、学びが連続し、知識や技能をつなげて関連付けることができるようになると考える。そのための方法として、課題の焦点化や板書の仕方、学習形態の工夫など、ICT機器の活用や合理的配慮を教師が行うことで、生徒が学ぶことに興味・関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組む主体的な学びを実現させることができると考える。

3 研究仮説

「見通し」をもたせるための授業を行う上で、次の3点を実践することにより、主体的に学ぶ生 徒の育成ができるものと考える。

- (1)「はたらきかけの工夫」として、発問、活動指示、教材・問題提示の仕掛けを行う。
- (2) ICT機器を活用した授業形態を取り入れる。
- (3) 学習課題の焦点化、板書の仕方、学習形態等の合理的配慮を意識した授業実践を行う。

4 研究内容

- (1) 研究主題に関わる研修を「研修A」、主題以外の研修については「研修B」として実践する。
 - ① 「研修A」について
 - ア 研究授業 (要請訪問) の実施

授業者 : 教諭 板垣 千里 美術(1年)

イ 授業参観月間の実施(第1回:5~6月、第2回:10~11月)

各グループにおいて、授業を参観し、テーマについて実践を確認する。授業者は参観者からの視点表をもとに、授業を振り返る。グループでの意見交換を夏休み中に行い、第2回の参観月間につなげる。

- ② 「研修B」について
 - ア 情報モラル講演会

「安心・安全なネット利用~スマホ・タブレット・オンラインゲームの正しい使い 方~」(4/27実施 講師:青森県教育委員会、青森県警察本部)

イ QUの活用方法研修会

(1) 研究仮説に基づく授業研究

	7 - P. 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1				
月	日	内容	形態		
4	5 (水)	第1回 校内研修	全体会(共通理解)		
4	5 (水)	第2回 校内研修	教科部会(教科での進め方)		
5~6月]	第1回 授業参観月間	グループごと		
8	9 (水)	授業参観検討会	全体会、グループごと		
1 0~	1 1月	第2回 授業参観月間	グループごと		
1 0	31 (火)	教育指導課センター(計画)訪問	分科会		
1 1	9 (木)	研究授業 (要請訪問)	校内研修(集中授業)		

(2) 一般研修

_			
	月	日	内容
	4	27 (木)	「情報モラル研修」
			講師 青森県教育委員会 中村 永 氏
			青森県警察本部 長利真至 氏
	5	24 (水)	NRT学力調査の分析
	8	21 (月)	QU活用についての研修会

6 研究の成果

(1) 10月に行われた教育指導課センター(計画)訪問では、「見通し」の場面において、学習活動のゴールをイメージさせるために、ICT機器の活用や合理的配慮を取り入れた授業を行った。見通しをもって授業に臨むことができることで、主体的に粘り強く課題に向き合う生徒の姿が随所に見られ、学習に効果的であることが分かった。

11月に行われた研究授業(要請訪問)では、鑑賞の内容を端末に入力することで、互いの意見をスムーズに共有することができた。また、Googleフォームを使ってアンケートを即時に集計して提示するなど、生徒の意欲や関心を主体的に引き出す手段として有効であることが分かった。

(2) 4月に行われた「情報モラル研修」では、使うことが当たり前になっているスマートフォンホ やインターネットを使用する場面において、禁止するのではなく、危険を理解した上で正しく使 うことの大切さを生徒及び教職員が自分事として学ぶことができた。

8月に行われたQU活用については、QUに現れる学級の傾向、対処すべき考え方などを教職員全員で学ぶことができた。

6 研究の課題

- (1) 授業において参考となる点や改善点についての意見交換の場になるように、授業を見せ合う期間を設けた。教員一人一人の授業時数が多く、計画が立てづらかったことから、予定どおりに実施できなかった。そのため、訪問時に実施する教科が多かった。
- (2) ICT機器の活用をより広めていくために、個々の教員が自分の必要性に合わせた活用の仕方 を共有できるよう、視聴覚部会とも連携して進めていく必要がある。
- (2) 主体的に学習に取り組もうとする生徒の意欲を継続させるとともに、基礎的・基本的な知識を 身に付けさせるための振り返りを工夫する必要がある。

(記入者 百目木 恵子)

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方 ~生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面のエ夫~

(1年計画の1年次)

校長 豊島 匡生

1 研究主題について

中学校学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」がうたわれており、「対話的」な学習を通して「深い学び」を実現することが求められている。本校ではそれに向けて、令和4年度までの3年間、「主体的・対話的で深い学び」を主題に掲げて授業改善に取り組んできたが、その成果として、「主体的な学び」「対話的な学び」については、ある程度の成果が得られたものと思われる。しかし、「深い学び」については、まだ不十分な面があると言わざるをえない。

「深い学び」が実現しない要因としては、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を意識した授業づくりができていないことが挙げられる。学習指導要領解説において充実を図るよう配慮することが求められている学習活動等は、いずれも「見方・考え方を働かせること」が前提となっているため、「深い学び」を実現するためには、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を意識した学習場面を設定することが必要である。

以上のことから、令和5年度からの3年間も継続して「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方」を研究主題とし、副題を「生徒が『見方・考え方』を働かせる学習場面の工夫」として研究を進めていく。特に本年度からの研究では各教科に共通して取り組む具体的な手立てを模索し、「見方・考え方」を働かせる学習場面づくり、「深い学び」の実現に主軸をおいた授業づくりを進めていきたいと考える。

2 研究のねらい

生徒が主体的に参加する対話的な学習場面の中に、生徒が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる学習場面を効果的に設定することを通して、深い学びを 実現する。

3 研究仮説

各教科・領域において、生徒が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる学習場面を設定することにより、深い学びを実現できる。

- (1) 生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面の設定の工夫
- (2) 生徒が「見方・考え方」を働かせる学習場面を意識した指導計画の工夫
- (3) 生徒が自ら課題を発見できるような問題提示の工夫
- (4) 授業の流れと到達目標を明確にした授業の工夫
- (5) 授業アンケート結果を踏まえた指導法の改善

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容	全体会・備考
6	1~9	第1回授業研究(授業参観週間)	
	13	NRT の分析(各教科)	
6 / 7	22~2	授業アンケートの実施①	
7	3	第2回授業研究 (教育指導課・センター訪問)	・各教科,領域の指導案作成
9	2 7	第1回校内研修 「特別活動の指導案について」 八戸市総合教育センター 講師 主任指導主事 佐々木亮子氏	
1 0	2 6	第3回授業研究 初任研特活研修講座 授業者 1年 教諭 成田亜侑美 2年 教諭 小島友依子	
1 1 11/12	13~30 24~4	授業アンケートの実施② 第4回授業研究(授業参観週間)	
2	1~9	授業アンケートの実施③(3学)	
3	1~15	授業アンケートの実施④(1,2等)	

(2) 一般研修

月	日	内容	
8	1~11	授業アンケートの分析・考察① 1学期の取り組みの反省と年間計画の見直し	
1 1	1 7	今年度の課題,来年度に向けての改善点の洗い出し	
1	1 9	授業アンケートの分析・考察② 2 学期の取り組みの反省と年間計画の見直し	
2	1 5	授業アンケートの分析・考察③ 3 学年のみ 今年度の反省と来年度の研究の方針についての話し合い	
3	1 5	授業アンケートの分析・考察④ 1,2学年 今年度の研修のまとめ	

6 研究の成果

・初任研特活研修講座の会場校となったことで、全校体制での特別活動への取り組みが 活性化した。また、発表に向けた要請訪問により、特別活動のねらいを踏まえつつ、 授業の進め方などを話合うことができた。

7 研究の課題

・本年度の校内研究は特別活動の発表が中心となった。各教科における「見方・考え方」 を働かせる学習場面の設定は、主体的・対話的で深い学びの実現のために非常に重要 な課題であり、来年度以降も継続して研修を進めていく必要がある。

(記入者 接待 裕行)

基礎・基本を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成

~生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定の工夫~

(3年計画の1年次)

校長 鎌田 康由

1 研究主題について

本校の学校目標は、「夢と志をもち、未来に向かって学び続ける生徒の育成」~キャリア学習の充実を通して~である。それを具現化するための重点的施策の1つとして、ひとりひとりの生徒が「授業がわかる、楽しい」と実感でき、自分から学習に取り組むことができる授業づくりを行うことを掲げている。しかし、昨年度の学校評価アンケートにおける生徒の自己評価を見ると、学習に対して受け身の傾向が強く、主体的に学んでいるとはいえないことが分かった。また、本校が以前から抱えている課題として、発達障害やそれに類した特性を示す生徒が年々増加しており、学ぶことに困難を感じている生徒が少なくないこと、苦しいことや辛いことへの耐性が弱く、頑張りがきかない生徒の割合が高いことなどが挙げられている。従って、昨年度まで実践していた特別支援教育の視点に立った生徒理解と、授業のユニバーサルデザインによる分かる授業づくりを継続するとともに、問題解決学習を積極的に取り入れることで、能動的に学習に取り組む態度を身に付けさせ、主体的に学ぶ生徒を育成していきたいと考える。

学習指導要領によると、「主体的な学び」とは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」と示されている。問題解決学習において、生徒が学ぶことに興味や関心を持ち、授業への参加意欲を高めるためには、生徒の必要感や知的好奇心を引き出すような課題設定の工夫が必要である。そして、自分で調べて考えて、問題を解決するためには、学習方法を工夫しながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげようとする態度を育てることが大切である。そこで、今年度は、知りたい・できるようになりたいという意欲を引き出すような課題設定はどうあるべきかを重点的に研究することとし、「基礎・基本を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成~生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定の工夫~」を本校の研究主題として設定した。

2 研究のねらい

生徒の必要感や知的好奇心を引き出す課題設定の工夫をすることによって、授業への参加意欲が高まり、主体的に学ぶ生徒の育成につながることを明らかにする。

3 研究仮説

生徒の必要感や知的好奇心を引き出す課題設定の工夫について研究することにより、学習課題に対する生徒の興味・関心や解決しようとする意欲が喚起され、主体的に学習に取り組もうとする態度を育成することができる。

- (1) 問題解決学習を通した生徒の主体性を引き出す工夫
 - ア 生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定の工夫
 - イ 生徒の自己調整力を高めるための振り返りの工夫
- (2) 基礎・基本を定着させるための指導の個別化
 - ア 学ぶことに困難さを抱えている生徒に対する支援の工夫
 - イ 生徒が学習方法を選択・模索する場面での支援の工夫
- (3)特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり
 - ア 授業のユニバーサルデザイン化
 - イ 短学活での認知トレーニングの導入

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容・概要等
5	23	教育指導課訪問
7	5	授業参観週間①(~7/20) 全教員が授業参観シートを準備し、授業を公開。お互いに授業を参観し合い、参観 後は授業参観シートに感想等を記入して提出。
11	27	授業参観週間②(~12/15) 1回目と同様に実施。

(2)一般研修

月	日	内容・講師・場所・概要等	
4	27	小・中ジョイントスクール研修会① 中学校の授業の参観、全体会、分科会	
8	2	要請訪問(一般研修等支援) 講師:教育指導課 馬渡 正仁 主任指導主事 内容:問題解決的な授業づくりについて	
8	18	小・中ジョイントスクール研修会② 講師:是川縄文館学芸員 場所:是川縄文館 内容:是川石器時代遺跡についての講義および展示見学	
11	20	小・中ジョイントスクール研修会③ 小学校の授業の参観、全体会、分科会	

6 研究の成果

- (1)生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定については、毎時間設定することは難しいものの、先生方が 発問の仕方を工夫するなどして取り組んだ結果、生徒の「課題に取り組んでみたい」という意欲を、 少しずつではあるが引き出すことができた。
- (2) 授業のユニバーサルデザイン化については、スライドを作成してモニターに表示したり、実物投影機を用いて説明したりして、生徒が視覚的に確認できるよう工夫した。また、生徒が活用しやすいワークシートづくりや形式のテンプレート化によって、どの生徒も授業に取り組みやすくなるようにした。

7 研究の課題

- (1)生徒の自己調整力を高めるための振り返りの工夫については、時間の確保が難しく、十分に行うことができなかった。来年度は、効果的な振り返りのあり方について先生方が学ぶ機会を作りたい。また、生徒の自己調整力を高めるために、別のアプローチはないか探っていきたい。
- (2) 学ぶことに困難さを抱えている生徒に対する支援については、スモールステップで取り組ませたり、 教え合いやTTを活用したりしたが、困難さにかなり上下の幅があり、どうしても作業が遅れてしま う生徒がいたため、十分とは言えない。全体指導が多く、なかなか個別への支援ができなかった。
- (3) 短学活での認知トレーニングは、全校で取り組むことができたが、トレーニングでできたことを日常生活で生かすことが難しい。一定の効果を得るためには、今後も継続して取り組むことが必要である。

(記入者 増田 美保子)

自分を律し、課題に向き合う生徒の育成

~探究的な (課題解決) 学習活動を通して~

(2年計画の2年次)

校長 米田 裕子

1 研究主題について

昨年度までの三年間は「自ら課題を見つけ、主体的に取り組む生徒の育成」を目標に掲げ、「課題を見つける力」や「主体性の育成」を目指してきたが、本校生徒は、与えられた課題には取り組むものの「自己管理力」や「課題に向き合う粘り強さ」に欠け、学力の二極化が浮き彫りとなった。また、改訂の方向性の一つである「カリキュラム・マネジメント」については、「探究」を核として取り組んできたが、未だに教師主導型の課題設定場面が見受けられる。生徒の学習アンケートからも、授業中の反応、発言、質問が少ないといった積極性の低さが課題としてあげられ、学習内容が習得できていないことへの不安感や危機感をもつ自己肯定感の低い生徒が増加傾向にあるという実態も浮かび上がってきた。

そこで、今年度は、"主体的な学びを促す"ために、生徒の実態や発達段階に応じた学習方法・スキルを丁寧に指導し、「やれそうだ」といった課題に対する見方や「分かりたい」といった欲求の側面、やる気が喚起される感情の側面など、動機付けの諸側面を踏まえた学習指導の研究をし、指導力の向上に努めたいと考え本研究主題と副題を設定した。それとともに、「主体的に学習に取り組む態度」の評価はどのように行えば良いのか。「自ら学習を調整しようとする態度」と「粘り強く学習に取り組む態度」を評価するには、どのような手段が考えられるのか。各教科の特色にあった評価の仕方について研究を深めていきたいと考える。「知・徳・体の調和を図り、夢や目標の実現に向けて努力する生徒」という学校目標の達成に向け、生徒には学ぶことの意味、進歩・発展することの意味を改めて問いながら取り組んでいきたい。

2 研究のねらい

自ら課題に向き合う生徒を育てるために、一人一人の実態を踏まえ、「学び方」を指導するとともに、効果的な指導法や導入の工夫等をすることによって、授業改善を図り、探究的な学習活動を設定し取り組ませる。

3 研究仮説

生徒一人一人が「学び方」を理解し、探究的な学習活動に取り組むことにより、主体的に課題解 決に向き合うことができる。

- (1)探究的な学習活動の工夫
- (2)探究意欲を向上させる手立ての工夫
- (3) 学び方の指導

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等	全体会等
4	5	第1回校内研	全体会(経営方針・研究主題
			の共通理解、授業開き、三条
			中生の「話し方・聞き方」
6	1	第2回校内研	
		小・中ジョイントスクール推進	
		事業:公開授業(三条中)	
10	12	第5回校内研	
		授業研究(計画訪問)	
10	12	第6回校内研	
		授業研究 (要請訪問)	
		2 学年 国語科	
		授業者 教諭 佐々木 大輔	

(2) 一般研修

月	日		内容・講師・概要等
8	21	第3回校内研	心肺蘇生・AEDに関して研修
			講師 八戸消防署尻内分遣所職員
9	22	第4回校内研	三条中生の「話し方・聞き方」に関する生徒
			アンケートの考察①
1	17	第7回校内研	三条中生の「話し方・聞き方」に関する生徒
			アンケートの考察②
2	14	第8回校内研	今年度の成果と課題
			~来年度の校内研究に向けて~
3	13	第9回校内研	三条中生の「話し方・聞き方」に関する生徒
			アンケートの考察③

6 研究の成果

- (1) 「要請訪問」や「初任者実地研修」を参観することにより、他教科の先生方からの忌憚のない 意見をいただくことや授業に対する意見交流を行うことなどによって、生徒のために授業力を 向上させようという機運を高めることができた。
- (2) 「三条中生の『話し方・聞き方』」は、毎学期末に行い、本校生徒の課題を把握する機会となっている。また、小中ジョイントスクールの中でも話題に挙げ、小学校の先生方と共通理解しながら進めることができている。
- (3) スコラ手帳を活用し、スケジュール管理をしようという生徒を育てることや、マイバトンノートに行事ごとに感じたこと、学んだことを記入することによって自分の気持ちを整理すること大事にしようとする生徒を育てることができた。

7 研究の課題

- (1) 次年度は学校目標が変更される予定であり、その学校目標にあった研究主題や副題を考えていく必要がある。本校の方向性に見合った校内研を行っていけるよう、研修部を中心に精査していきたいと考える。
- (2) 今年度も消防署の方、赤十字の方をお招きして「防災教育」に関わる授業を行ったが、再来年度、本校が領域の発表校(「総合的な学習の時間」・「視聴覚」・「特別支援」)となっているため、次年度は校内研に位置付けて行うことも視野に入れる必要がある。
- (3) 教科、領域に関わらず、今年度は職員会議の資料等で本校職員が学んできたことを全体に周知 する機会をつくることができなかった。誰がどのような研修に参加しているのかを確認するこ と、研修会の資料を預けていただき、情報提供することを欠かさず行いたいと考える。

(記入者 佐々木 大輔)

明治中

問題解決的な学習を取り入れた授業の研究

~課題設定と協働的な学習の工夫を通して~ (3年計画の1年次)

校長 松 倉 知 秀

1 研究主題について

自然に恵まれ、歴史ある土地柄で育った本校の生徒は、素直で純朴である。教師の指導を受け入れ、生徒同士の人間関係も温かく良好に築かれている。その一方、小学校からの単級編成による固定化された人間関係の中で過ごしており、物事を多面的・多角的に見ることや、自ら課題を発見しようとする態度に乏しい。また学力差も大きく、学習内容の理解に特別な支援を必要とする生徒が各学級に複数存在する。

これらの課題の解決に向け、1 学期に国語、2 学期に数学、3 学期に英語の「基礎力コンテスト」を実施し、事前・事後指導を計画的に行うことで基礎学力の定着を図ってきた。また、各教科・領域の授業においては、学習形態を工夫すること、教え合い学習を取り入れることに取り組み、理解をそろえて学びに向かう基盤を整え、意見を交流・発表しやすい環境づくりに努めてきた。加えて特に学力差の解消のために、全体指導の中で行う個別指導の機会の確保を進めてきた。

しかし、学力診断テストの結果等を見ると、成果が現れたとは言えない状況にあり、更なる授業 改善に向けた取組が必要であることが明らかとなった。

そこで研究初年度となる今年度は、「問題解決的な学習を取り入れた授業」を研究することで、 改めて授業づくりに取り組むこととした。具体的には生徒が自ら問いをもてるように導入を工夫す ることにより課題設定につなげることを通して単位時間や単元の指導を見直し、授業改善を進める。 また、意見の交流につながる協働的な学習の場面を取り入れ、学習内容の定着やより深い学習への 意欲付けを図りたい。

2 研究のねらい

生徒の主体的な学びにつながるよう、課題設定の場面を工夫し、単位時間・単元の学習を通して 課題解決を図れる授業づくりを目指す。また協働的な学習の場面を取り入れることで、学習内容の 定着や探究的な学習の実現を図る。

3 研究仮説

授業の中に、生徒が自ら問いをもてるような課題設定の場面を工夫し、単位時間や単元を通して 解決に向かう見通しがもてるように授業を構成すれば、生徒の主体的に学ぶ態度を育成することが できる。

また、協働的な学習の場面を意図的・計画的に設定することで、相互に疑問点を解決したり意見を交流したりする機会が確保され、学習内容の定着や深化を図ることができる。

- (1) 生徒が自ら問いをもてるよう、課題設定場面を工夫する。
- (2) 生徒の主体的な学習につながるよう、協働的な学習の場面を工夫する。

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年 ・ 授業者 ・ 題材名 ・ 講師 ・ 成果 ・ 授業の概要 等
4	4	全体会(共通理解) 「研究主題・副題」
6	7	第1回授業研究(相互授業公開) 3年道徳 授業者 髙橋由香里 「三年目の「ごめんね」」
7	3	第2回授業研究(要請訪問) 1年道徳 授業者 木村 拓実 「席を譲ったけれど」
	4	第3回授業研究(相互授業公開) 2年道徳 授業者 太田也主志 「許せないよね」
	13	第4回授業研究(相互授業公開) 1年道徳 授業者 古舘佳代子 「ひまわり」
	21	全体会(授業改善チェックシート結果の共有と授業改善の方向性の検討)
8	21	全体会(共通理解) 「学習指導案の作り方・様式の確認」
	31	第5回授業研究(相互授業公開) 3年道徳 授業者 夏坂久美子 「私がピンク色のキャップをかぶるわけ」
9	11	第6回授業研究(相互授業公開) C組自立活動 授業者 北山 鈴子 「自分を知ろう(人と個性)」
	14	第7回授業研究(相互授業公開) 2年音楽 授業者 沢森真奈美 「浜辺の歌」
10	3	中教研領域発表(全学年 道徳)
11	8	計画訪問(国語、社会、数学、理科、音楽、道徳、自立活動)
1	29	全体会(授業改善チェックシート結果の共有と授業改善の方向性の検討)
2	21	全体会(今年度の成果と課題、次年度の副題の検討)

(2) 一般研修

月	日	内 容 ・ 講 師 ・ 概 要 等
6	21	NRT及び知能検査の結果の分析・考察、共通理解
	26	学校体制支援「ハイパーQ-U分析」 原寿 学校体制支援アドバイザー
1	9	学校体制支援「ハイパーQ-U分析」 原寿 学校体制支援アドバイザー

研究の成果

- (1) ペアやグループで話合いや意見交流を行うことや、他の人と同じ意見であっても自分の言葉で発表することで、自分の意見の根拠を挙げられるようになってきた。
 (2) 教科によっては、立場をはっきりさせ、自分の考えをもたせることで、自分とは違う意見をよく聴くようになり、自分の意見も自信をもって発表できるようになった。
 (3) 相互公開授業についての話合いをその日の放課後に設定した。参加できる教員は限られていたものの、授業のよかった点や改善案などの話題が豊富に出る充実したものとなった。

研究の課題

- (1) 授業改善チェックシートの集計結果から、「根拠をつけて自分の意見を発表させる」指導が難
- (1) 授業改善チェックシートの集計結果から、「依拠をつけて自分の息見を発表させる」指導が難しいと教師が感じていることが分かる。根拠となる事項が知識として身に付いていることや、発表の仕方や話合いの深め方の例示も大切であり、今後も根気強い指導の継続が必要である。 (2) 生徒が問いをもつような課題設定の工夫について、教科の特性を生かしながら研究を進めてきたが、それぞれの教員が悩みを抱えながら日々の授業に取り組んでいる様子が見られた。 今後は、各教科の授業において、生徒への課題のもたせ方を更に工夫し、集中して学習に取り組めるような授業づくりを目指していく必要がある。

(記入者 髙橋 昭)

市川中

見方・考え方を働かせながら、 自分の考えを広げ深める学習指導の在り方

~言語活動と振り返りの場の設定の工夫を通して~

(4年計画の4年次)

校長 老久保 智

1 研究主題について

本校は、新学習指導要領において、学習内容を学ぶことで「何ができるようになるか」という視点を重視するとともに、「資質・能力」を育むための、各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすのが「見方・考え方」と捉え、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んできた。4年計画の3年次である昨年度は、振り返りの場を効果的に取り入れたことが、①生徒がより良い表現方法を模索することにつながった、②理解が不十分なところを自覚し、復習する生徒が増えた、③教師の見取りや助言を元に、生徒が自分の学びを客観的にみることができたなどの成果があった。一方で、「思考を広げ深める」ために、各教科でどのような取組をしているのか、授業の導入か

一方で、「思考を広げ深める」ために、各教科でどのような取組をしているのか、授業の導入から課題設定までの教師の働きかけがどうなのかといったことに関して、全教員で共通理解が不十分だったことが課題として残った。

4年計画の4年次である今年度は、授業を相互に参観して授業研究会を行うことを通して授業改善に努め、生徒に身に付けさせたい「資質・能力」を育んでいく1年にしたいと考え、本主題を設定した。

2 研究のねらい

自分の考えを広げ深める学習指導の在り方を、各教科ごとに「見方・考え方」を働かせやすい学 習課題や場面をどのように設定していくかを授業で工夫すること、言語活動を取り入れ論理的な 思考場面を取り入れること、生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活 動を工夫して設けることを通して明らかにする。

3 研究仮説

- (1) 各教科ごとに「見方・考え方」を働かせやすい学習課題や場面をどのように設定していくかを授業で工夫することと、言語活動を取り入れ論理的な思考場面を設定することで、知識・理解の質を高め資質・能力を育むことができる。
- (2) 生徒が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動を工夫して設けることで、目標をもって学習に向かう姿勢や多面的、多角的にものごとを捉え考える力を養うことができる。

- (1) 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせやすい学習課題を設定した授業を実践する。また、言語活動を取り入れ、論理的な思考場面を設定する。
- (2) 授業の中に振り返りの場を設定し、「何ができるようになったか」を明確にし、次への意欲につなげるようにする。教科部会や他教科から得られた振り返りシートなどを参考に活用し、 変容を見取る評価の方法を工夫する。

(1)研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要 等
4	1 2	○全体会
		・校内研究についての説明
		・生徒に身に付けさせたい資質・能力についての話合い
7	5	○第1回授業研究
	\sim	・論理的教科グループ、言語教科グループ、技能教科グループに分かれて、
	1 4	授業参観。感想等のメモを提出。
1 1	3 0	○第2回授業研究
		・1年社会 授業者 山端 研人
		題材名「なぜアフリカ州には国際的な支援が必要なのか」

(2)一般研修

月	日	内容・講師・概要等
6	7	○授業における ICT 活用ワークショップ
		講師 山端研人教諭 中村鴻作教諭
8	1 8	○教育指導課・総合教育センター訪問の指導案の書き方に関する研修
		○特別活動、キャリア教育の研究授業の方向性についての意見交換
1	3 1	○言語活動、振り返りの場の設定の工夫に関する情報交換

6 研究の成果

- (1) 授業のねらいに即した言語活動を取り入れることが、以下のことにつながった。
 - ①課題を解決する際に話合い活動をすることで、生徒同士で考え方を共有、深化させることができ、知識・技能の定着につながった。
 - ②授業の各場面でICT機器を効果的に利用することを積み重ねてきた結果、調査活動、まとめ活動、振り返り活動など、生徒自身が主体的にICT機器の使い方を選択して、効果的に言語活動を進めることができるようになった。
 - (2) 振り返りの場を効果的に取り入れることが、以下のことにつながった。
 - ①小テストや振り返りシートを組み合わせて活用することで、授業のねらいの達成に迫ることができた。
 - ②生徒自身の振り返りが適切なものであるかどうかを教師がフィードバックすることで、生 徒が自分の理解度を再認識することにつなげた。
 - ③振り返りを積み重ねることで、生徒が身に付いた力を自覚できるようになり、別な単元や 他教科、領域等の授業でその力を生かす姿が多く見られるようになった。

7 研究の課題

生徒の「読解力」が多くの教科で問題点として挙げられた。ある程度、読解力のある生徒は、ICT機器等身の回りにあるものを活用して、学習に役立てている。一方で活用するために必要な知識の習得まで至らない下位生徒が一定数いる。4年間の取り組みを終えて、この「二極化」の解消を目指した授業改善の必要性を強く感じている。 (記入者 菊池真樹子)

「確かな学力の向上を目指し、見通しをもって学習に取り組む生徒 の育成はどうあればよいか」

(3年計画の2年次)

校長 鈴木 悟

1 研究主題について

前年度の研究の成果と課題は以下のとおりである。

- (1) 研究の成果
 - ①「発信し、つなげる」をキーワードに、全教員が道徳の授業と教科の公開授業を実施することにより、教師間の指導力の向上と授業改善が見られた。
 - ②自力解決と対話交流の場や To Do リストの活用により、生徒たちの学び合いと気づきを大切し、 お互いの自己有用感を高め、見通しをもちながら校内行事や探究学習に取り組んだ。
 - ③導入や発問の工夫、課題設定の工夫、ICTの活用等により、生徒は「わかった、できた、身についた」を実感し、主体的に学習に取り組むようになった。
- (2) 研究の課題
 - ①個別の学習支援が必要な生徒に対して、全職員で個々の生徒の特性を生かして、段階的に支援体制を築き、基礎的な知識・技能を習得させる必要がある。
 - ②「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を図るために、1人1台端末の効果的な活用法が主体的・対話的で深い学びにつながるよう具体的な取組について研修を深める必要がある。
 - ③将来の夢や志の実現に向けて、生徒たちが目標を抱き、具体的に行動しようという意識を高める ために、3年間を見通したキャリア教育の実践の必要がある。

2 研究のねらい

確かな学力の向上を目指し、見通しをもって学習に取り組む生徒を育成するため、各教科・領域の特性を踏まえた授業改善を具体的に進め、生徒が主体的に学びに向かうための指導法を研究する。

3 研究仮説

- (1)発問の工夫と見通しをもったわかる授業を展開することにより、基礎的な知識・技能を身につけることができる。
- (2) 学習課題を明確にし、協働的に学び合う場面を設定することにより、表現力や思考力を高めることができる。
- (3)生徒間で話合い活動をさせることにより、自ら主体的に学ぼうとする意欲や態度を育成できる。

- (1)確かな学力を育むために、教師の授業力の向上を図る。
 - ア 授業の導入や教師の発問を工夫することで生徒の気づきを喚起する。
 - イ ユニバーサルデザインについて、全教員が実践内容を共通理解して授業を行う。
 - ウ ICTを活用し、わかる授業づくりを推進する。
- (2)話合いを基に一人一人の考え方や意見をつなげ、お互いの「自己有用感」を実感させる。
 - アーインプットとアウトプットを積極的に行わせ、自分の考えを確かなものにさせる。
 - イ 興味・関心を高め、問いをもたせるしかけを工夫し、探究的学習に取り組ませる。
 - ウ 自力解決の場と対話・交流の場を通して、他との調和を図りながら自分の考えを述べること を意識させる。
- (3) 夢や志の実現に向け、自己の未来を創り出すことができる生徒の育成を図る。
 - ア 全校道徳やキャリア教育を推進することにより、将来の理想の実現に向けた具体的な目標を考えさせる。
 - イ 個々の特性を生かした学習がなされるように、全職員で個別支援の充実を図る。
 - ウ 基礎的な知識・技能を生かし、自ら問題解決に取り組もうという意識を育てる。

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等	全体会等
6	2 1	授業研究・全校道徳 (3学年担任)	
9	1 4	授業研究・全校道徳 (2学年担任)	
9	2 7	授業研究 (計画訪問)	
1 0	2 5	授業研究・全校道徳(1 学年担任)	
1 1	下旬	授業公開(オープンクラスウィーク1)	
1 2	上旬	授業公開(オープンクラスウィーク2)	
1	下旬		授業公開全体会 (成果と課題)

(2) 一般研修

月	日	例)内容・講師・概要等
4	3	校内研修:今年度の校内研修について
4	2 5	「研修主任会」にて示された「授業づくり」について
5	1	市教育研究指定授業 特別支援教育講演会 講師:山形大学大学院教育実践研究科 教授 三浦 光哉 氏
5	3 1	要請一般研修:「個の『問い』の探究を深めるための対話的学習活動・振り返り活動」 講師:主任指導主事 馬渡 正仁 氏
1 0	2 3	要請一般研修:「基礎的基本的な知識技能の習得のための個別の学習支援」 講師:主任指導主事 馬渡 正仁 氏

6 研究の成果

- (1) 教育指導課要請訪問一般研修支援を活用した校内研修を2回実施し、教育指導課主任指導主事馬渡正仁先生より講義をいただいた。「問題解決的な授業を展開するために、ズレを意識させること」、「個別の学習支援の在り方や自立した学習者を育てる働きかけ」について、教師全員が見識を深め、授業力向上につなげることができた。
- (2) 日々の研究を集約する場の一つとして、教育指導課・市総合教育センター訪問での授業に焦点を定め、各教科において、「『ズレ』を意識させる導入」、「『立場の表明→対話的活動→立場の再表明(思考の変容の自覚)』というながれの展開」を可能な限り取り入れて授業を行うことができた。また、オープンクラスウィーク(相互授業参観週間)について、授業者の了解のもとに自由に授業参観し合える体制を整え、気軽に研鑽し合える機会とすることができた。

7 研究の課題

- (1) 問題解決的な学習において、生徒が自分自身の変容を自覚し、「わかった、できた、身についた」と実感できるような学習活動・授業展開の在り方を探究していく必要がある。「『問い』を引き出す工夫」、「『問い』の意識を持続させる学習活動の工夫」、「支援の手立ての工夫」、「生徒個々の考えを深める対話的・協働的学習活動の在り方の模索」などを通して、生徒の「確かな学力」の形成につながる授業の実践を図っていかねばならない。
- (2) 学習課題に対して、生徒自身が解決に到る道筋を思い描き、段階を追って探究する「見通しをもった学習」のなされる授業を展開し、生徒の「主体的に学習に取り組む姿勢」を高めていかなければならない。また、その学習の動機となる「問い」をもたせるために、授業の導入部分において「ズレ」を感じさせるように働きかける工夫をしていかねばならない。
- (3) 「基礎的・基本的な学習内容」を確実に理解・定着させていくために、特別支援教育の視点に立って生徒の学習状況を把握し、生徒のつまずきに対する支援を適切に行っていく必要がある。そのために、学習評価の方法や評価結果の学習指導への反映のしかたを研究していかねばならない。
- (4) 生徒が、他者との対話を通して個の思考を深めることができるよう、1人1台端末を意見・考えの可視化の手段として活用していくことを図っていかねばならない。そのために、教員間で1人1台端末活用の手法について情報を交換・共有し、研鑽していく体制を構築する必要がある。

(記入者 四戸 壮一郎)

主体的に学習に取り組む生徒の育成

~必要感·切実感のある協働的な学びの工夫を通して~ (3年計画の3年次)

校長 木村 政和

1 研究主題について

本校の学校目標である、「お互いの良さを認め、目標に向かって挑戦する生徒の育成」に迫るため、上記の研究主題を設定した。

昨年度は、生徒の学習意欲や学習方法の改善をねらいとする協働的な学びの場面の工夫により、本校の研究主題の達成を目指した。年2回の生徒授業評価アンケートを比較すると、「わからない自分に気づいて声をかけられたり、わからない相手が頼ってくれたりすることが、授業の目標の達成に役立った」と考えている生徒が増加した。また、教師の説明(話及びプリント)を、「役立った」という感覚でとらえる生徒が多く、このことから、学びの主体が自分であるという意識をもてるようになってきていると考えた。ただ、依然として「交流」や「協力」についての記述が多いことから、授業における「協働」についての捉え方が指導者によって様々であることもわかった。

このことから今年度は、「必要感・切実感のある協働的な学びの工夫」を通して、「主体的に学習に取り組む生徒の育成」を目指す。協働性が生まれる課題を設定すること、目標を達成するために必要不可欠な協働的な学びの場面を設定することで、仲間の指摘やアドバイスを参考にしながら、目標を自分ごととしてとらえたり、自己の学習方法を工夫・改善したりすることにつながると考える。この結果、全生徒が、「仲間がいたからわかった、仲間がいたからできた、仲間がいたから身についた」を実感できると考える。また、これらの活動で気づいた、仲間の良さや自分の成長をサポートする仲間への感謝が、次の学習への意欲を引き出したり持続させたりするものになると考える。これらの実践研究を通して、学校目標の具現化につなげていきたい。

2 研究のねらい

問題解決のための必要感・切実感のある協働的な学びの場面の工夫により、主体的に学習に取り組む生徒を育てる。

3 研究仮説

授業の目標や学習活動のねらいを明確に示し、協働的な学びが必要とされる課題の設定や、個人の 課題解決のために生徒同士で試行錯誤させる場面を意図的に設定することで、生徒の主体的に学習に 取り組む力を高めることができると考える。

- (1) 生徒から「問い」や「思い」を引き出し、学習課題を「自分ごと」として捉えられるよう、資料や課題の提示の仕方を工夫する。技能教科や知識・技能を身に付ける場合でも発問を工夫し、 生徒が主体的に学習に取り組めるような課題を提示する。【八戸市の重点内容】
- (2) 学習課題と学習内容の整合性を図りながら、協働的に解決しなければならない課題を意図的に 提示したり、生徒同士の相互評価の場面を設定したりする。【校内研の重点内容】

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要 等
4	5	第1回校内研 概要:必要感・切実感のある協働的な学びの工夫についての研究
4	2 6	第2回校内研 概要:研修計画・研究主題・研修方法の共通理解・指導案の書き方等の共通理解 (おまない)
6	9	第3回校内研 概要:教科会議(指導案検討会)
6		授業参観月間の設定① (~6/27) 概要:「協働的な学び」「主体的な学び」の視点で授業参観
6	2 8	第4回校内研 概要:授業参観のフィードバックと 「協働的な学び・主体的な学び」についての協議
7	4	1 学期授業評価アンケート実施(全校生徒)
7	1 1	教育指導課・総合教育センター訪問 概要:授業後の指導主事との教科別協議会
8	1 8	第5回校内研 概要:1学期授業評価アンケートの考察
1 0		授業参観月間の設定②(~11/15) 概要:「協働的な学び」「主体的な学び」の視点で授業参観
1 1	1 6	第7回校内研 概要:授業参観のフィードバックと 「協働的な学び・主体的な学び」についての協議
1 2	13	2学期授業評価アンケート実施(全校生徒)
2	2 1	第9回校内研 概要:全体会(成果と課題、授業評価アンケート集計結果、 次年度の主題について)

(2) 一般研修

'	112	(1)112	
	月	日	内容・講師・概要等
	7	1 1	第6回校内研(要請訪問) 教 科:道徳 学 年:1学年 授業者:教諭 日向敦子 主題名:自分の行動に責任をもつということ 教材名:裏庭での出来事 助 言:八戸市教育委員会 青木拓哉指導主事 概 要:「協働的な活動をする必要感・切実感を喚起する発問の工夫について」 「多様な考え方と出合わせ、協働させる場をつくるための工夫について」
	1	5	第8回校内研(研修報告会) 概要:全日本中学校道徳教育研究大会の報告(日向)

6 研究の成果

- (1) グループや他者と協力して課題を解決する協働的に学ぶ時間は、安心して学べる雰囲気づくりと内容の理解につながっていると感じている生徒がおおむね多い。また、授業評価アンケートから、内容に応じて解決手段を変えて取り組むようになった、テストに合わせて計画的に自分の課題を進められるようになった、と答える生徒も増え、主体的に学習に取り組む態度が身についてきていると感じる。
- (2) 1時間の授業や単元ごとに行う振り返りが、自分の成果や課題を見つける手段となり、そのことを仲間と共有することで、次の学習の動機付けや軌道修正につながっている。

7 研究の課題

- (1) 生徒自身が自分のタイミングや判断でやり方を選び、その結果に責任を持たせるために、学習課題を自分ごととして捉えられるような切実感のある課題と協働的な学びを必要とする課題の内容と提示の仕方の工夫が必要である。また、多様な学び方の提示や試行錯誤する時間、振り返りを共有して学習計画を立てる時間も必要である。
- (2) 授業参観月間で教科の枠を越えて互いに授業参観し、生徒が主体的に学習に取り組む力をつけるためのしかけとなる協働的な学びとなっているかを見取り、情報共有する研究協議を設定したが、深まりのある議論はできなかった。研究協議の場が協働的な活動となるような計画が必要である。

(記入者 今 昌子)

学力の向上を目指して自ら学ぶ生徒の育成 ~主体的な学びを支える学習指導法の研究を通して~

(3年計画の1年次)

校長 横 濵 由 紀

1 研究主題について

本校では、昨年度「課題の解決に向けて主体的に取り組む生徒の育成~『自発的行動力』の向上を促す指導を通して~」の研究主題のもと、課題解決に向けた取組として授業づくりや、9BLOCKSを取り入れることで、生徒の課題解決に向かう態度の育成に取り組んできた。その結果、自ら課題を設定し、その達成に向けて取り組もうとする意識に高まりが感じられた。しかし、その効果は学校行事や定期考査週間に限定されており、学習に対して「より上を目指し、主体的に取り組む姿勢」を十分に育成することができなかったという課題が残った。そこで、今年度からは「学習習慣の定着」を主眼に置き、各教科における授業づくりの工夫と、学習方法を身に付けさせることで学力の向上を目指すことを目標とし、本研究主題を設定した。

2 研究のねらい

本校生徒は落ち着いた態度で授業に臨んでいるが、昨年度のNRTの結果を見ると、学習内容が十分に定着しているとは言い難い状況にある。昨年度、9BLOCKSにより課題を設定し、達成に向かう意識は高まったが、学習に対しての主体的な取組に結びついていない点と、学習方法が身に付いていないため、家庭での学習が習慣化していない点が原因として考えられる。

主体的な取組を促すためには、それぞれの生徒が学習内容を理解していることが前提となる。「わかった、できた」という思いが学びの喜びとなり、「主体的な学び」へと繋がると考えられるからである。そこで、今年度から3年計画で、各教科における授業づくりの工夫と、生徒に学習方法を身に付けさせるための方法について、全教員で研究を進めていくこととする。

今年度は、生徒が進んで学習に取り組むことができるよう、導入から展開における教師のはたらきかけの工夫について重点的に研究する。授業における充実感や達成感が、学習への主体的な取組を促すことができるということを検証したい。

3 研究仮説

導入から展開における教師のはたらきかけを工夫し、生徒が課題意識をもって授業に臨むことで、学習に主体的に取り組む態度を高めるとともに、充実感・達成感を味わわせることができるものと考える。

- (1) 各教科、領域における教師のはたらきかけの工夫
- (2) 特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり
- (3) 1人1台端末の効果的な活用とICT機器を効果的に活用した授業づくり
- (4) 9 B L O C K S と P D C A サイクルの活用

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容・授業の概要等
5	2 9	小・中学校ジョイントスクール推進事業における公開授業(全教科・全学年)
6	1	ペアによる授業参観① 授業者:古町
7	1 8	指導課計画訪問(全教科・全学年)
1 1	3 0	ペアによる授業参観②③ 授業者:溝江、谷内
1 2	1	ペアによる授業参観④ 授業者:中村
1 2	8	ペアによる授業参観⑤⑥ 授業者:田中、立花
1 2	1 1	ペアによる授業参観⑦⑧ 授業者:小山、今
1 2	1 3	ペアによる授業参観⑨⑩⑪⑫ 授業者:八幡、小山田、佐々木(敬)、佐々木(ミ)
1 2	1 4	ペアによる授業参観⑬⑭ 授業者:武内、原田
1 2	1 5	ペアによる授業参観⑮ 授業者:吉田
1 2	2 0	ペアによる授業参観⑩ 授業者:柴田

(2) 一般研修

月	日	内 容 · 講 師 · 概 要 等
4	5	特別な配慮を必要とする生徒についての共通理解
4	2 6	今年度の校内研究の進め方について
5	1 9	計画訪問指導案の様式について
5	2 9	東中学区の小学校教員との学習習慣定着に向けての共通理解
8	2 1	Google Formsの活用方法について(本校視聴覚部会)
9	2 2	9BLOCKSとPDCAサイクルの活用(各学年の取組について)
1 1	1 4	「UDの視点を取り入れた通常学級における授業づくり研修講座」の資料伝達
1	1 8	今年度のまとめ (成果と課題)

6 研究の成果

- (1) 導入から展開におけるはたらきかけを工夫することにより課題意識をもって主体的に学習に取り組む態度が育成されたことを、多くの教師が実感している。また、ペアによる授業参観を実施し、全教員が研修に参加したことで、授業づくりの工夫に対する教員の意識をさらに高めることができた。
- (2) 昨年度に続き 「9BLOCKS & PDCA サイクルの活用」を行うことにより、目標のもち方や行動に変化が見られた。また、視聴覚部会による「Google Forms の活用方法について」の研修により、授業における生徒への課題提示の方法や1人1台端末の活用について各教員が考える機会となった。

7 研究の課題

- (1) 導入から展開におけるはたらきかけを工夫することで、主体的に学習に取り組もうとする態度の育成につなげることはできたが、より多くの生徒の主体的な学びにつなげるためには生徒理解とUDの視点を取り入れた授業づくりについて研修する場を確保する必要がある。
- (2) ペアによる授業参観は全教員の研修への参加と意識の向上につながったが、複数の授業を参観する機会を設けたり、集中授業と協議を行ったりするなど、取組内容の幅を広げていく必要がある。

(記入者 佐々木 由子)

自ら学ぶ力の育成 ~自己調整学習を通して~

(3年計画の3年次)

校長 齋藤浩

1 研究主題について

昨年度の研究主題は、「自ら学ぶ力の育成~自己調整学習を通して~」であり、「自己調整学習」という学習方法を学習に限らず、学校行事を含めた様々な活動の場面に導入し、生徒の主体性の向上や自ら学ぶ力の育成、自尊心を高めるための指導方法を研究してきた。目標設定や振り返りを繰り返す中で、生徒の意欲の向上や行事後の達成感が十分に感じられる場面が多くなり、アンケートの分析でも、生徒の望ましい変容が数値から見てとれた。今年度は3年計画の3年目であり、昨年度までの取り組みで課題とされた内容の改善を図りながら、自主学習ノートの取り組みを中心に研究を進めていくこととした。

「自己調整学習」とは、「予見段階(課題を分析し、計画を立てる)」「遂行段階(実践しながら自分で自分を観察する)」「自己内省段階(自己評価と結果と原因の分析など)」の「循環的段階モデル」と呼ばれるプロセスにのっとった学習方法であるが、本校では学習に限らず、行事や一年間の目標などにも「自己調整学習」のプロセスを取り入れて、「予見・遂行・自己内省」の一連の流れを繰り返すことで、生徒の「自ら学ぶ力の育成」に迫っていきたい。

2 研究のねらい

「自己調整学習」の考え方の中の「循環的段階モデル」という学びのプロセスを、学習を含めた諸活動に取り入れていくことで、生徒自身が自分の学びを計画し、実践し、自己評価して次につなげていく姿勢を身につけることを目指す。その姿勢を身につけさせることが「自ら学ぶ力の育成」であり、それによって諸活動に向かう際の意欲や主体性を高めることができるのではないかと考えている。そのためには、ただこのプロセスを取り入れるだけではなく、教師が積極的に模範を示す「モデリング」の役割を果たす必要がある。生徒がより効果的に、意欲的に学べるよう、よりよい計画の在り方や学び方、適切な自己評価の在り方などを示し、導いていくための方法を研究し、「自ら学ぶ力の育成」に迫っていきたい。今年度は3年目であるので、昨年度までの反省を踏まえ、「自己調整学習」の各教科での取り入れ方をさらに研究し、年2回行うQUの学習意欲に関するアンケートを表の分析などを行い、生徒の変容を見ていきたい。

3 研究仮説

「自己調整学習」の「予見・遂行・自己内省段階」のプロセスを、学習を含めた諸活動に繰り返し取り入れていくことで、生徒は自然にそのプロセスが身についていくと考える。また、そのプロセスを形だけ導入するのではなく、各段階において教師が良い計画の立て方、学習の仕方、適切な自己評価の在り方などを示すことで、生徒がよりよい方法を学び、選べるように導いていくことができる。その結果、自分で自分の学びをコントロールし、意欲的に学ぶ生徒の育成が果たされると考える。

- (1) 「自己調整学習」のプロセスを自主学習ノートに取り入れ、生徒がより効果的に学びを進められるよう、適切な支援の仕方について研究する。
- (2) 問題解決のためにどんな力が必要とされ、どんな考え方や学習方法があるのかを生徒に明示できるように、教材研究を徹底する。
- (3) 生徒の「予見・遂行・自己内省」の様子を手助けし、生徒の意欲を高めるためのアドバイスのタイミングや在り方を研究する。

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	内容・授業者・概要等
4	5	第1回校内研…校内研テーマ「自己調整学習」の確認と方向性
4	2 6	第2回校内研…「自己調整学習」の実践例紹介
5	3 1	JS…「自己調整学習」を意識した自主学習ノートについて
6 ~	7月	授業参観月間
8	2	第4回校内研…「自己調整学習」を取り入れた授業実践紹介と、授業 参観月間について
8~9月		授業参観月間
1 0	3 0	第5回校内研…授業参観月間の振り返り
1 1	2 9	教育指導課訪問 第6回校内研(要請訪問) 1年A組 英語 授業者 教諭 大坂 崇
1	3 1	第8回校内研…今年度の研究のまとめと次年度に向けての協議

(2) 一般研修

	月	日	内容・講師・概要等
	6	2 8	第3回校内研…QU①(5月実施)、各種アンケート結果分析と考察
1	1	2 7	JS授業研修会(小中の実態把握と今後の取り組みについて)
1	2	2 0	第7回校内研…QU②(11月実施)、各種アンケート結果分析と考察

6 研究の成果

- (1) 自己調整学習を取り入れた授業を教師が互いに参観し合うことで、他教科での取り入れ方や教師の「モデリング」などの模範の示し方などについて研修を深められた。また、「自ら学ぶ力の育成」を図るためには有効な手段であることを共有することができた。
- (2) 学校行事においても自己調整学習を取り入れたワークシートを活用し、予見・遂行・ 自己内省のプロセスを図ることで、取り組みに対する達成感を感じる生徒が多くみら れた。
- (3) 自己調整学習アンケートや自尊感情アンケート、QUを実施し分析を行った。自尊感情アンケートでは学校全体で18項目中13項目が上昇した。これは様々な教育活動において自己調整学習を取り入れたことが、自尊感情の向上の一因ではないかと考える。また、自己調整学習アンケートの1学年と2学年においては、1学期に比べ2学期ではわずかに数値が下がる結果となったが、自己調整学習を3年間取り組んできた3年生では、予見、遂行、自己内省の項目において数値が上昇した。様々な視点から生徒理解を深め、日々の授業や指導に生かすことができた。
- (4) 小中ジョイントスクールにおいて、自己調整学習を取り入れた自主学習ノートの活用 について研修を行い、系統的な教育を意識した取り組みをすることができた。

7 研究の課題

- (1) 「自ら学ぶ力の育成」~自己調整学習を通して~の研究主題のもと、3年間研究を進めてきた。継続して取り組んだ学年のアンケートでは大幅な数値の上昇がみられ、自己調整学習のプロセスを意識した教育活動の取り組みが有意義であることが感じられたものの、指導する教師が自己調整学習に対する深い理解がなければ、難しい一面もある。また、定期考査や学校行事等では全校で共通のワークシートを用いて取り組めるが、授業でおいては教科の特性や時数の制限等もあり、取り入れ方や回数などに、大きな差が生まれるなどの課題がみられた。
- (2) 自己調整学習における「予見・遂行・自己内省」のプロセスは繰り返し行うことで自ら学ぶ力の育成を図ることにつながるが、遂行するための方略を生徒自らが立てたり、自己を適切に振り返ったりすることは、教師の支援が不可欠である。この学習プロセスを意識し生かしつつ、もう少し生徒も教師も取り組みやすさを感じられるものを工夫していく必要がある。

(記入者 齋藤さと子)

「思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫」

~課題設定の工夫と振り返りを通して~

(2年計画の1年次)

校長 高橋英臣

1 研究主題について

昨年度は、主題を「主体的に学び、考え、表現できる生徒の育成~ねらいに迫るための ICT とツールの効果的な活用~」とし、研究に取り組んだ。

各教科、領域における ICT とツール等を併せて活用したことで、授業を通して得た情報や学びが視覚的に整理され、生徒たちは意欲をもって表現活動を行うことができ、結果として、本時のねらいにアプローチしやすくなった。また、振り返りを Chromebook 上に記録しておくことで、生徒の変容が一目でわかるようになり、一人一人の評価に生かすことができた。

しかしながら、昨年度から機会をとらえて、生徒たちの主体性を育む場面や機会をしかけてきたが、「自分の言葉や様々な方法で伝える力」の育成にはまだ課題がある。課題解決に向かう生徒たちの視点が狭く、先を見通し、実態に合わせた見方・考え方をすることができないといったことが考えられる。そのため、生徒の主体性が生かされ、様々な見方・考え方が働くような授業のしかけにより力を入れて研究する必要がある。

以上のことから、主題を「思考力・判断力・表現力を高める指導法の工夫」とし、生徒が 自分の考えを、自分の言葉や様々な方法で他者に伝える力の育成に取り組んでいく。

2 研究のねらい

学校生活の中で「主体的に『学び・考え・伝える』ための取組」と「最後までやり抜くための取組」を工夫することで、本校の学校目標である「課題解決のために、考え・伝え・やりぬく生徒」を育むことを目指す。

3 研究仮説

今年度の研究テーマの副題を「課題設定の工夫と振り返りを通して」とし、授業の効果的な導入と、自己の変容を実感できるような振り返りができるような授業づくりに取り組む。これによって、授業の始めに生徒の課題に対する切実感をもたせ、授業の終末では次の課題解決に取り組む目的意識や意欲につながっていくものと考える。

- (1) 生徒の主体性を土台として、より思考力・判断力・表現力が育まれるような課題の設定と授業の振り返りを行う。
 - ア 課題の設定場面では、生徒に課題解決に対する切実感をもたせるように工夫する。 イ 振り返りの場面では、授業を通しての自己の変容に気づかせるように工夫する。
- (2) 思考を整理し、考えを他者に伝えることができるようにさまざまなツールを活用しながら、授業を展開する。
 - ア ねらいに迫るために、各ツールの特性を生かし活用する。
 - イ 視覚化を意識し、自分と他者の考えを比較できるようにする。

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究の取組内容	
/ •		200 N (0) 7	
6	30	第1回授業研究(全校特活) 授業者:教頭 須藤 修生	
		「夢の形」~I have many dreams,Championship.~	
9	1	第2回授業研究 要請訪問(全校道徳) 授業者:教諭 嶋守 公子	
		「いろいろな考え方があることを知る」内容項目【B-(9)相互理解、寛容】	
		指導助言:八戸市教育委員会 教育指導課 青木 拓哉先生	
11	24	第3回授業研究(全校社会) 授業者:教諭 岩織 安香	
		「領土はどのようにして決められているのだろう?北方領土問題から考える」	
1	31	第4回授業研究(2年保健体育) 授業者:教諭 福士 憲司	
		「速攻を成功させるためには、どのような動きと役割が必要だろうか?」	
		(バスケットボール)	

(2)一般研修

	П	h # # #		
月	日	内容等		
4	3	第1回校内研		
		・生徒情報 ・校内研についての共通理解 ・今年度の研修について		
4	26	第2回校内研		
		・校内研テーマ決定・今後の研修計画について		
		・指導案の様式について・今年度の「スマ中ファーム」の運営について		
6	7	第3回校内研		
		「課題設定の工夫と振り返り」 講師:八戸市教育委員会教育指導課 馬渡 正仁先生		
8	7	第4回校内研		
		・1学期の振り返りと授業研究振り返り(センター訪問を終えて)		
		・NRTの分析と考察		
8	21	第5回校内研		
		・HUMAN、自尊感情尺度シート分析と考察 ・ICT やツールの活用について		
9	21	第6回校内研		
		「指導と評価の一体化」 講師:八戸市教育委員会教育指導課 馬渡 正仁先生		
12	6	第7回校内研		
		「自分を知る・気持ちについて考える」		
		講師:スクールカウンセラー 東野 まり子先生		
1	17	第8回校内研		
		・自尊感情尺度シートの分析と考察 ・今年度の研究授業のまとめ		
1	31	第9回校内研		
		・今年度の研究授業の振り返り ・BEING の分析と考察 ・実践報告書について		
		・成果と来年度への改善点		

6 研究の成果

- (1) Chromebook の活用により、視覚的なアプローチから授業を進めたことで、より物事のイメージをもち、学習を深めていくことができた。
- (2) 各教科で振り返りへの取り組みを工夫し、ノート等の紙媒体か Chromebook 上に入力して残すようにした。その結果、授業中の発言を苦手とする生徒からも、考えていることや疑問に思うことをくみ取ることができた。また、それぞれの記録を全体に紹介したり、共有したりすることで生徒の自信につながった。

7 研究の課題

- (1) 課題解決に対して、必要感や切実感をもつことができるような導入の工夫にまだ課題がある。生徒の意欲を引き出すような発問と効果的なツールを研究する必要がある。
- (2) 意見交流の場面を設定するものの、発表だけで交流までできず終わってしまう場合がある。他者の意見を受容したり、時には異なる意見を述べたりという活動を取り入れ、表現力・コミュニケーション力をより高めるための工夫が必要である。

(記入者 岩織 安香)



令和5年度

小・中学校実践研究集録

編集発行:八戸市教育委員会 教育指導課

〒031-8686 八戸市内丸一丁目1番1号 電 話 0178-43-9519 (直通) FAX 0178-47-4997